



## シェイクスピアにおけるNatureの意味

著者	筒井 脩
発行年	2006-03-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00020463">http://hdl.handle.net/10112/00020463</a>

# 第一 部

各作品におけるnatureの意味

# 第一章 史劇

## 史劇第 1 ・ 四部作

### I

『ヘンリー六世・第 1 部』 *Henry VI, Part 1*

この作品では nature が 3 回 (Schmidt の定義①の意味で 2 回、natural feeling の意味で 1 回)、natural が 1 回、unnatural が 2 回用いられている。①の nature から見てみよう。Henry VI の叔父 Gloucester と大叔父 (ウィンチェスター司教) Bishop of Winchester の確執は続き、Gloucester は相手を次のように非難する。

Thou art a most pernicious usurer,  
Froward by nature, enemy to peace,  
Lascivious, wanton, more than well beseems  
A man of thy profession and degree.

(III.1. 7-20)

おまえは有害極まりない高利貸しで、生まれつき、  
ひねていて、平和の敵、職業にも地位にも  
相応しくない好色で、みだらなやつだ。

thy profession and degree は Winchester が聖職者であり、司教という地位にある故にこう言われている。by nature は成句にとる方がよいかもしれない。敵対する人間の言葉であり、主観的な言動ながら、Gloucester の Winchester に対する憎しみの激しさが観客に伝わってくる。

Suffolk は Margaret に好意を抱き、その Margaret を「造化の自然が造り出した奇跡」“nature’s miracle” (Viii.54) と口を極めて称えるのである。しかし Margaret を王妃にし、国王と国家を支配しようと野心を抱く妻帯の Suffolk の言葉は nature に対する冒瀆的な言動である。

次の nature について Taylor は注で「肉親や同胞への情愛」 natural feeling

とし、*OED* sb.9e Natural feeling or affection. Now *dial.*に言及している<sup>1)</sup>。この意味での初出は1605 *Macb.* I.v.46 compunctious visitings of Nature.である。ジャンヌ・ダルクに翻意するように説得されて、Burgundy は心がぐらつき、当惑しながら、「この女の言葉の魔術でわしの心が動いたのか、それともフランスを愛する気持ちがわしの心を急に和ませたのか」“Either she hath bewitched me with her words,/ Or nature makes me suddenly relent.” (III.iii.58-58)と言う。フランスが祖国と再認識し、祖国愛が目覚めた Burgundy の心情を nature は端的に語っている。

次に unnatural を見てみよう。ジャンヌ・ダルクは Burgundy に翻意させようと、France の悲惨な現状を述べて、次のように unnatural を用いて語る。

See, see the pining malady of France;  
Behold the wounds, the most unnatural wounds  
Which thou thyself hast given her woeful breast.  
(III.iii.49-51)

病にかかって衰えていくフランスを御覧なさい。  
傷を、あなた自身が祖国の悲しみに満ちた胸に  
与えた極悪非道の傷を御覧なさい。

unnatural について Cairncross が against natural kinship.と注を加えている<sup>2)</sup>。肉親への情愛 (nature) に反するということである。つまり祖国 France は母なる大地でもあり、それを蹂躪することは、子の親に対するような極悪非道というのである。ジャンヌ・ダルクは unnatural という語を効果的に用いて、Burgundy の心を揺さぶり、祖国フランスに敵対する行為を unnatural であることを納得させ、祖国を愛するという「自然な感情」(nature)を芽生えさせ、フランスに勝利をもたらし、イギリスを敗北に至らせる。

因みに、unnatural と同じ意味を有する unkind に当たってみよう。Exeter の言葉は宮廷における貴族同士の軋轢、不和、非難合戦が不吉な未来を垣間見せている。そして王杖が幼い王の手にあることも問題であるが、「私怨が人の道にもとる分裂を生み出す。」「envy breeds unkind division”(IV.I.193).と云い、この方が一層重大な問題であるとして、unkind という語を用いて嘆くのであ

る。貴族の確執の根は *envy* であり、それが *unkind division* の原因である。*unkind* について Cairncross は *unnatural; against the law of 'kind' or natural relation.* と説明を施している<sup>3)</sup>。OED にあるようにラテン語の *natura* に相当する英語固有の語は *kind* である。他の作品でも *unkind* は *unnatural* と併用されることがある。

England、France 両国間の紛争を収めるように、法王、皇帝、アルマニャック伯からそれぞれの書簡が届く。この書簡について Henry 王から意向を尋ねられた Gloucester はこれがキリスト教徒の流血を止め、両国に平和をもたらす唯一の手立てであると答える。その言葉を聞いた Henry 王は

Ay, marry, uncle, for I always thought  
It was both impious and unnatural  
That such immanity and bloody strife  
Should reign among profession of one faith.

(Vi.11-14)

まさにそのとおりだ。私はいつも思っていたことだが、  
同じ信仰をもつものがこのような残虐非道と  
血なまぐさい争いが行われることは神に背き、  
人の道にもとることである。

と同じキリスト教徒同志が血なまぐさい残忍な争いはこの上なく *impious* で *unnatural* であると言う。*impious* は神に対する背信であり、*unnatural* は人の道に背くことであり、自然の条理に反するという極めて強い語なのである。

そして Suffolk は高ぶる気持ちを抑え、Margaret を「人工を顔色なからしめる自然の美」“*natural graces that extinguish art*”(V.iii.192) と言って絶賛し、Henry 王の間を取り持ち、己の愛人にしようとするのである。*natural* は *art* との対句概念として使用されていて、「造化の自然が授けた」の意味と考えてよいだろう。ジャンヌ・ダルクが Burgundy を説得する際、*unnatural* の語を用いたように、Gloucester は Henry を説得するのに *natural* を用いているのである。

## II

### 『ヘンリー六世・第2部』 *Henry VI, Part 2*

この作品では nature は2回使用されていて、Schmidt の①と性質の意味に用いられている。人望のある Gloucester 公 Humphrey を逮捕し、亡き者にしようとする謀議を凝らし、Suffolk は次のように言っている。

No: let him die, in that he is a fox  
By nature proved an enemy to the flock  
Before his chaps be stained with crimson blood—  
As Humphrey proved by treasons to my liege.  
(III.i.257-260)

いや、やつを殺すべきだ。狐だから。  
自然によって狐が羊の敵であることはわかっている。  
ハンフリーも同じように謀反によって王の敵と  
わかっているのだから、顎が深紅の血で汚れる前に。

Cairncross は *By nature ... liege.* について *As the fox (eagle, kite) is proved by nature to be an enemy to the flock (children), so Humphrey is proved by treason to be an enemy to the king.* と説明している<sup>4)</sup>。Schmidt は nature を①と定義し、下位区分の自然の発生・成長を示すという項目に含めている。

他の編者は *treasons* でなく *reasons* を採用している。いずれにしても、nature の語を用いることにより、Suffolk は Gloucester が羊に対する狐の存在であり、王の天敵だと主張するのである。己の意向を相手に納得させるのに nature の語を用いるのである。それによって自然の条理にかなう行為であり、正義を印象付けようとするのである。

次に性質の意の nature を見てみよう。Richard は今日の勝利について Salisbury の獅子奮迅の働きを述べる。それに対して Salisbury は決定的な勝利を挙げるに至っていないと言う。

Well, lords, we have not got that which we have:  
'Tis not enough our foes are this time fled,

Being opposites of such repairing nature.

(Viii.20-22)

諸卿、完全な勝利を収めたわけではありません。

今は逃げただけでは安心できません。

力を盛り返してくるかも知れない敵ですから。

opposites ... nature について Cairncross は foes with such power of recovery (Hart). と Hart の注を取り入れている<sup>5)</sup>。「体の元気を回復させる」“to repair our nature” (*Henry VIII*. Vi.3) の例があるので、nature は身体・体力と考えてよいだろう。

### III

#### 『ヘンリー六世・第3部』 *Henry VI, Part 3*

この作品では nature が4回 (Schmidt の①の意味で3回、自然の情愛の意味で1回)、natural が2回、unnatural が3回、unnaturally が1回用いられている。派生語をあわせると nature は10回使用されていて *Henry VI* 三部作の中で最も頻度の高い作品である。

まず①の意味の nature から見てみよう。Richard は自己の身体を醜くしたのは愛の神が己を見放し、造化の自然を買収したせいだと独白する。

She did corrupt frail Nature with some bribe,

To shrink mine arm up like a wither'd shrub;

(III.ii.155-156)

愛の神は弱い造化の自然を賄賂で買収し、

俺の腕を枯れ木のように萎ませたのだ。

造化の自然は本来美を生み出すものという考えがある。したがって造化の自然が Richard に美を与えなかったわけである。

Henry 王を捨てて、Edward を国王と呼ぶように告げられると、Oxford は兄を殺し、「天寿を全うしようとしていた」“When Nature brought him to the door of Death?” (III.iii.105) 父までも殺した Edward を王と呼べというのかと反発する。この nature に関して Schmidt は1)の定義で、human institutions or

tendencies) に対立するものの項に分類している。また Knowlton は 3 の項目で、nature は死の変化と対立し、死に屈せざるをえないと定義し、この箇所を参照するように引用している<sup>6)</sup>。自然の条理を意味する。

Somerset が大事にしている少年を目にした Henry 王は誰か尋ねる。Somerset が「陛下、この方は、リッチモンド伯、ヘンリーです」“My liege, it is young Henry, Earl of Richmond.” (IV.vi.67) と答えると、Henry 王はイギリスの希望よと呼びかけ、「その頭は生まれながらに、王冠を戴くように、その手は王笏を握るように造られている」“His head by nature fram'd to wear a crown, / His hand to wield a sceptre;” (IV.vi.72-73) と予言する。

次の nature は Shakespeare で頻出する natural feelings の意味で使用されている。Warwick は、兄の Edward に挑戦する Clarence を肉親の情よりも正義を愛する気持ちが強いからだと言った次のように言う。

And lo, where George of Clarence sweeps along,  
Of force enough to bid his brother battle;  
With whom an upright zeal to right prevails  
More than the nature of a brother's love.

(Vi.76-79)

ほら、クラレンスのジョージが兄に戦いを  
挑むだけの兵力を率いて颯爽とやってくる。  
彼には兄弟愛の自然の情より正義に対する情熱が  
勝っている。

natural について見てみよう。篡奪者 Henry 王に従っている者は謀反人だという Warwick の言葉に対して、Clifford は「正統な王に従うのは当たりまえだ。」“Whom should he follow but his natural king?” (I.i.82) と言って反論する。OED はこの natural を Having a certain relative status by birth; natural-born. と定義して、この箇所を引用している。また Schmidt は natural の 8) native, given by birth, not adopted という定義の項目に含めている。

王のテントを護衛している番兵 1 の陛下がお休みになる頃だと言う言葉を聞いて、番兵 2 が寝台もないところでお休みになるのかと驚く。番兵 1 は次



のように言う。

Why, no; for he hath made a solemn vow  
Never to lie and take his natural rest  
Till Warwick or himself be quite suppress'd.

(IV. iii. 4-6)

そうだよ、王は、ウォリックか御自分か  
どちらかが倒れるまでは、決して横になって  
安楽に眠ることはないと厳粛に誓われたのだ。

この natural について Schmidt は consonant to nature and its general or individual laws という定義を与えている。natural rest は決戦の緊張した中での眠りなどでなく、平穏な日常の安らかな眠りを意味する。

unnatural と unnaturally を見てみよう。敵味方に分かれて戦う親子が、わが子と知らずに殺し、それが自分の息子だと気づいた父親が

O pity, God, this miserable age!  
What stratagems, how fell, how butcherly,  
Erroneous, mutinous, and unnatural,  
This deadly quarrel daily doth beget!

(II. v. 88-91)

ああ、神様、この惨めな時代に憐れみをおかけください。  
なんてひどい事を、残虐で、ひどい、罰当たりで、  
むごい、人の道に背く出来事をこのおそろしい戦争は  
毎日生み出していることか。

と言って嘆く。戦争で父が息子を殺すという浅ましい世の有様を unnatural という語で表現しているのである。

Warwick から溜め息の理由を尋ねられた Henry 王は己の不幸のためでなく、息子が不憫に思われるためだと述べ、その息子について「父の子に対する情愛にもとって、自ら廃嫡する子」“my son /Whom I unnaturally shall disinherit.”(1. 1. 194-195)と言う。Cambridge Shakespeare では unnaturally について against the law of nature. の注釈を与え<sup>7)</sup>、また Martin は denying him his

natural birthright. という説明を与えている<sup>8)</sup>。Henry 自ら己の行為が nature (子に対する情愛) に反するということを認識しており、己の不甲斐なき故息子に父が当然すべきことができない身の上を嘆いているのである。

また自分の子供を廃嫡する King Henry について、Prince Edward の母である Margaret は「このような親の子に対する情愛に反する父親」‘so unnatural a father’ (1. 1. 225) と言う。Cairncross はこの台詞について another note in the family chaos theme. と注を施している<sup>9)</sup>。The family chaos theme に unnatural の語が大いに関わっているのである。

Richard に説得されて、Clarence は兄 Edward 方に再度寝返り、Warwick に対して次のように言う。

Why, trowest thou, Warwick,  
That Clarence is so harsh, so blunt, unnatural,  
To bend the fatal instruments of war  
Against his brother and his lawful King?  
(Vi.88-91)

おい、ウォリック、クラレンスが、兄であり、  
正当な王にむかって恐ろしい兵器を向けるほど  
冷酷で、鈍感で、人の道にもとる人間だと  
思っているのか。

この unnatural には兄弟という肉親に対する情愛に反する意味と正統な王に弓を引く行為が人の道に反しているということを含意している。Henry 方に寝返るときも、nature の語を用いて己を正当化し、再度態度を変える際に unnatural の語を使用して正当化している。

Clifford にとって “his natural king” である Henry 王が York に屈して、Edward に譲るべき王位を “unnaturally” に Edward を廃嫡する。大義なき戦争で、知らずに自分の子を殺すという “unnatural” な行為に父は嘆く。これはまさしく family chaos theme である。この庶民の悲劇は権力者たちの抗争の結果である。この悲劇を見ても Henry は全く無力で、ただ嘆き涙するだけであり、このことが庶民の悲劇を浮き彫りにするのである。

一方 Richard は愛の神が nature を買収して、己を醜くしたと、野望の口実を nature に転嫁して己を正当化しようとする。

Clarence が Lancaster 方に寝返った際、Warwick は正義感が “the nature of a brother’s love” に勝ったと持ち上げた。しかし兄であり、正当なる王に兵器を向けるような “unnatural” な人間でないと行って、再度態度を変えるのである。

また *Henry VIII* を予見させるが、Henry は Richmond 伯 Henry を見て、彼が「生まれながらに」 “by nature” 王冠を戴き、手に王笏を握ると予言する。Clarence は節操のなさゆえに命を落とすことになる。

## IV

### 『リチャード三世』 *Richard III*

この作品では派生語も含めて nature は11回使用されている。nature が6回であり、そのうち Schmidt の①の意味が5回、性質の意が1回である。natural が1回、unnatural が4回である。

①の意味の nature から見てみよう。Richard は York 家が勝利を収め、平和に酔いしれているが、己の醜い体つきを恨んで、nature を呪い、悪党になる決意を独白する。

I, that am curtail'd of this fair proportion,  
 Cheated of feature by dissembling Nature,  
 Deform'd, unfinish'd, sent before my time  
 Into this breathing world scarce half made up —  
 (I.i.18-21)

おれはあのような立派な均整を奪われて、  
 うそつきの自然の女神にだまされ醜く、  
 未完成で、月足らずで、この世に出された。

proportion について Hammond は This word introduces a chain of images continued in ‘dissembling Nature’, ‘unfinish’d’, ‘unfashionable’, and ‘deformity’ which depend on the Elizabethan concept of harmony in Nature expressing

fitness to the divine plan. Richard's lack of proper proportions, that is his irregularity of appearance, his ugliness, his deformity, are outward and visible signs of the disharmony and viciousness of his spirit.と説明している<sup>10)</sup>。森羅万象の調和は神意に沿うというのがエリザベス朝時代の観念であり、Richardの醜い容貌は神意に反し、精神の邪悪さを表すものだと言うのである。The Oxford Shakespeare の編者 Jowett は dissembling について Nature cheats Richard in that he would expect to look better than he does and his physical desires are frustrated.と述べている<sup>11)</sup>。己の期待を裏切った nature を 'dissembling Nature' と言って恨んでいるのである。

夫 Edward を亡くし悲嘆にくれている Anne を口説き落としした Richard は3ヶ月前に己の手で死地に追いやった Edward について次のように言う。

A sweeter and a lovelier gentleman,  
Fram'd in the prodigality of Nature,  
Young, valiant, wise, and no doubt right royal,  
The spacious world cannot again afford.

(I.ii.247-250)

あんなにやさしく美しい人、  
造化の自然の気前のよいつきに造られ、  
若く、勇敢で、聡明で、それに正当な王の  
血筋をひいている。このような人は  
この広い世界といえども二度と生まれることはあるまい。

Jowett が in ... nature について when nature is most prodigal.と説明しているように<sup>12)</sup>、Edward は造化の自然が最も気前のよいつきに生み出した人だというのである。己の醜悪な容貌を nature の責任にする Richard の言葉は皮肉である。

Margaret は Richard に対して「生まれながら、下司で地獄の子と烙印を押されたお前」“Thou that wast seal'd in thy nativity / The slave of Nature, and the son of hell;” (I.iii.229-230)と呪う。slave of Nature について Hammond は Whitaker (p.79) quotes art. 9 of the Thirty-Nine Articles, and comments: 'he is

in bondage to the sin which is man's fallen nature and by which he is "son of hell" until redeemed by the grace of God',を引用しており<sup>13)</sup>、また Jowett は The slave ... hell について 'Original sin ... is the fault and corruption of the nature of every man that naturally is engendered...' (Articles of Religion, 9). Whether as 'slave of nature' (i.e. one who responds only to bestial impulse) or 'son of hell', Richard is beyond redemption from original sin through divine grace.と説明している<sup>14)</sup>。原罪の故に自然は善でなくなり、slave of nature が獣欲だけの存在であろうと地獄の子であろうと Richard は神の恩寵にも与れない存在である。

Richardによって2人の王子殺害を命じられた Tyrrel が雇った Dighton は殺害した王子たちのことを「自然の女神が最初に創造を始めて以来の完全無欠な傑作」"The most replenished sweet work of Nature, / That from the prime creation e'er she fram'd." (IV.iii.18-19)と語ったと言う。Jowett は work of nature について The crucial difference between this and a 'work of art' lies in its capacity to be 'smothered'.とコメントしている<sup>15)</sup>。art と nature の対で用いられており、nature の作品と人工品との決定的違いは nature が窒息することだと言うのである。nature の寵児である2人の王子殺害が nature に対する冒瀆でもあることを観客は強く意識する。

Richard は己の地位を確固たるものにするために Elizabeth of York との結婚を望み、王妃 Elizabeth に彼女を説得するように頼む。王妃 Elizabeth が Elizabeth of York について「彼女の美しい命がいつまで続くことやら」"... how long fairly shall her sweet life last?" という言葉を口にすると、Richard は「天と自然の女神とが思し召し通りに」"As long as heaven and nature lengthens it." (IV.iv.353)と応じる。heaven は神を nature は造化の自然を意味する。王妃 Elizabeth は「その命は地獄とリチャードが許す間だけ」"As long as hell and Richard likes of it." (IV.iv.354)と言り返す。The slave of Nature である Richard の言動は神と nature を冒瀆するものである。このように Richard は己の醜さを nature のせいにし、nature が気前のよい時に造った Edward を殺害し、The most replenished sweet work of Nature である2人の王子を刺客に殺害させ、heaven と nature を出し抜こうとする。

Richard は Anne とのやり取りで、自分のことを、名前は同じだが、「性格はより立派な人だ」“one of better nature.” (I.ii.147)と言う。この nature について Lull は character, disposition と注を与えている<sup>16)</sup>。

亡き Edward の未亡人 Anne は、Henry VI の葬列の中で、父 Warwick と夫を殺害したにもかかわらず、言い寄る Richard に呪いの言葉を浴びせる。

If ever he have child, abortive be it:  
Prodigious, and untimely brought to light,  
Whose ugly and unnatural aspect  
May fright the hopeful mother at the view,...

(I.ii.21-24)

あの男に子供ができるなら、  
未熟で生まれるがいい、奇怪な姿で、  
月足らずで生まれるがいい。その醜い異常な顔を見て、  
待ち望んだ母を恐れさせるがいい。

unnatural aspect について Hammond は Continues the imagery of portents of the previous two lines. と述べている<sup>17)</sup>。Schmidt では contrary to the laws and order of nature の項目に入れている。unnatural は ugly と併用することで、異常で醜悪な容貌を強調する。

Henry VI の葬列の進行を止めようとする Richard に対して、お前を見たために残っていなかったはずの鮮血が流れ出したと Anne は次のように言う。

Thy deed inhuman and unnatural  
Provokes this deluge most unnatural.

(I.ii.60-61)

人の道にはずれ、人情にもとる  
お前の所業は自然の条理にもとる  
この流血をきたしている。

unnatural は inhuman と共に用いられて、また unnatural の繰り返しによって、意味を補強する。Jowett は unnatural ... unnatural i.e. cruel ... miraculous. The repetition is explained by the shift in sense. と注を施している<sup>18)</sup>。初めの

unnatural は「人情にもとる」の意で、後の unnatural は「自然の条理に反する」と意味が変わっているというのである。

Anne が復讐の言葉を述べると、Richard は「そなたを愛している男に復讐をするというのはまったく人の道にもとる言葉だ」“It is a quarrel most unnatural, / To be reveng'd on him that loveth thee.” (Lii.138-139) と言い返す。Richard は相手を口説き落とすために unnatural という言葉を用いているのであって、nature を冒瀆する言動であることを示している。

Bush は次のように言っている。エリザベス朝の秩序観は社会の秩序を志向する。この世界(the natural world)が永続するためには、社会は本来の完全な社会を目指さなければならない。社会の希望はイギリスが再び This other Eden, demi-paradise となり、France が this best garden of the world になることである。社会は以前の社会、最初の自然本来の社会(its first naturalness)に帰るよう努力しているのである。また歴史劇における事態はどうにもならないもので、Henry 王が「両軍に私の親族がいる」“Both are my kinsmen.”と嘆き、「道に背いた対立」“unkind division” (1Henry VI. IV.i.193)のために社会が混乱している。親子が殺しあい、時代は unnatural と述べている<sup>19)</sup>。

キリスト教徒同志が血なまぐさい残忍な争いはこの上なく impious で unnatural と Henry 王は言っている。また親子が敵味方に分かれて戦い、殺した相手が自分の息子だと気づいた父親は時代が unnatural と慟哭する。英国史劇第1四部作では unnatural の語が9回用いられているのである。

## 史劇第2・四部作

### I

#### 『リチャード二世』 *Richard II*

この作品では nature は2回しか用いられていない。弟の命を奪った罪を裁くものが罪を犯した本人では諦めるしかないと言う Gaunt の言葉を聞いて、Duchess of Gloucester はその不甲斐なさを嘆いて言う。Gaunt もその1人で

あり、もう1人、自分の夫である Edward 王の7人の王子を7つの瓶と枝に例えて語る。

Some of those seven are dried by nature's course,  
Some of those branches by the Destinies cut;

(I.ii.14-15)

この7つの瓶のうち、自然の成り行きで干上がるものもあり、  
7本の枝のうち運命の手で切られたものもあります。

この nature は destinies と対句概念で用いられ、運命に対して自然の条理の意味で使用されていると考えていいであろう。

死の床にあって Gaunt はイングランドの将来を憂えて言う。

This royal throne of kings, this scept' red isle,  
This earth of majesty, this seat of Mars,  
This other Eden, demi-paradise,  
This fortress built by Nature for herself  
Against infection and the hand of war,...

(II.i.40-43)

この歴代の王の玉座、この王笏の支配する島、  
この尊厳の地、この第二のエデン、地上の楽園、  
造化の自然が悪疫と戦の手から自らを守るために  
築いた要塞。

この nature について Knowlton は、伝統的な Dame Nature であり、神の代理であり、場所も造るものと説明し、この箇所を挙げている<sup>20)</sup>。

## II

### 『ヘンリー四世・第1部』 *Henry IV, Part 1*

この作品には nature は自然界の意で1回、性質の意で2回用いられ、natural が3回使用されている。

Hotspur は Glendower と魔術や領土分割案を巡って対立する。自分が生まれた時、大地が震えたと言う Glendower に対して、Hotspur は「自然界」「nature」



(III.i.24)が病にかかって不思議な現象が起きただけのことで、Glendower の生まれと関係がないとそっけない言葉を吐く。

王は、反目している面々は元を質せば「すべて同じ性質、同じ物質から生まれたのもの」“All of one nature, of one substance bred,” (I.i.11)だと述べる。nature は単に quality, kind の意味で用いられている。

王の使者である Blunt は Hotspur 達に対して、「陛下はあなた方の不満が何かを知りたく私を遣わされたのです」“The King hath sent to know / The nature of your griefs,” (IV.iii.41-42)と述べる。この nature も quality, sort の意味で使われている。

natural を見てみよう。苦しい言い訳をし、「お前さんは本当に気がいなんだ、そうは見えんがな」“thou art essentially made without seeming so.” (II.iv.486)と言う Falstaff に Hal は「お前は本能などなくても正真正銘の臆病者だ」“And thou a natural coward without instinct.” (II.iv.488)と逆襲する。この natural を Schmidt は6) genuine, not artificial or affected:の項目に入れている。made は Q1 で、F3 は mad である。mad で訳している。

Hotspur が Glendower へ侮辱の言葉を吐くとき、Mortimer は Glendower を庇い、Hotspur の侮辱の言葉にも君に対して敬意を払っているから、自己を抑制しているのだと次のように言う。

He holds your temper in a high respect  
And curbs himself even of his natural scope  
When you come 'cross his humour, faith he does:

(III.i.164-166)

彼は君の気性に非常な敬意を払っている。  
だから君が彼の機嫌を損ねるようなことをやっても  
いつもの気持ちを抑えているのだ。

natural について Schmidt は4) consonant to nature and its general or individual laws:の定義を与えている。「自然の条理に適った」の意味である。natural scope は自然の成り行き、つまり侮辱されれば怒るのが自然の気持ちの意味である。

王は Worcester に対して「流星」“an exhal'd meteor” (Vi.19)であるのをやめ、以前のように「美しい自然の光」“a fair and natural light” (Vi.18)を放つ、王に忠実な星に戻るように説得する。Schmidt はこの natural に④の定義を与えている。natural は自然現象における異常な状態でなく、正常のという意味が込められている。

### III

#### 『ヘンリー四世・第2部』Henry IV, Part 2

この作品においては nature が11回、naturally が1回使用されている。まず Schmidt の定義①の意味の nature から見てみよう。

Northumberland は凶報に接し、「自然の女神の手を緩め、荒れ狂う海を埒内に留めておくのをやめよ。秩序など無くなってしまえ」“Now let not Nature's hand / Keep the wild flood confin'd! Let order die!” (I.i.153-154)と秩序の崩壊を求め、王軍と戦うことを決意する。

Lady Percy は夫 Percy が若者のあらゆる鏡であり、性急な話し振りさえ勇敢な人たちの口調となったと、「造化の自然が欠点とした早口まで勇者たちの口調となりました」“And speaking thick, which nature made his blemish, / Became the accents of the valiant;” (II.iii.24-25)と言う。この nature について、The New Cambridge Shakespeare は Nature と大文字を採用して、造化の自然の意味を明確にしている。

Henry IV が病に倒れ、「人民の噂が心配だ、処女が父なし子を産んだとか奇怪な児が生まれると言っております」“The people fear me, for they do observe / Unfather'd heirs and loathly births of nature.” (IV.iv.121-122)と異常現象のことを Gloucester は口にする。observe...nature に関して The New Cambridge Shakespeare の編者 Melchiori が record portents such as children from virgins and monstrous productions of Nature.と注を施しているように<sup>21)</sup>、nature は造化の自然の意味に解していいだろう。

Henry IV は責任ある王の身の苦悩のために眠られず、胸中を次のように吐露する。

O sleep, O gentle sleep,  
 Nature's soft nurse, how have I frighted thee,  
 That thou no more wilt weigh my eyelids down,  
 And steep my senses in forgetfulness?

(III.i.5-8)

ああ、眠り、安らかな眠り、  
 身体を育む優しい乳母よ、お前を驚ろかしたからなのか、  
 お前がわしのまぶたを閉じさせ、  
 わしの感覚を忘却に浸してくれないとは。

この *nature* について Schmidt は *human life, vitality* と定義している。Nature's soft nurse は身体を優しく看病するものの意味であろう。

Prince Henry は病床の Henry IV に付き添っていて、王が死んだと思って次のように述べる。

Thy due from me  
 Is tears and heavy sorrows of the blood,  
 Which nature, love, and filial tenderness  
 Shall, O dear father, pay thee plenteously.

(IV.v.36-39)

私からあなたが受けるべきものは、  
 肉親の情と愛と子としての情愛とが  
 惜しみなく捧げます肉親の涙と深い悲しみです。

この *nature* は「肉親の情愛」*natural feeling* の意味で用いられていて、この用法は Shakespeare では最も一般的なものの1つである。

次も同じ用法である。Henry IV は目を覚まし、王冠がないことに気づき、王子が持ち去ったことを知り、嘆いて言う。

See, sons, what things you are,  
 How quickly nature falls into revolt  
 When gold becomes her object!

(IV.v.64-66)

息子とはなんたるものだ。  
黄金が目的となるなら、  
肉親の情もたちまち背くのだ。

この nature も natural feeling の意味で用いられている。

Warwick は Henry IV が亡くなった事実を「自然の道を歩み終えられた」  
“He’s walk’d the way of nature,” (Vii.4) と言う。Schmidt は①の定義において、  
必然を意味するもの (Implying the idea of necessity;) として、この箇所を引用  
している。死は自然の摂理の必然的な出来事ということであろう。

Falstaff は戦争が終われば、戻って来て、Shallow たちからふんだくってや  
ると、次のように言う。

If the young dace be a bait for the old pike, I see no  
reason in the law of nature but I may snap at him:  
(III.ii.325-326)

ウグイの子がカマスの子の餌食であるのが自然法なら、  
彼を食わない手はない。

この If ... him について、Humphreys は ‘By the law of nature the greater eats up  
the less — the young dace makes a meal for the old pike; and by the same law  
Shallow (as slight a fellow as I am huge) is my destined prey’ ; and echo of the  
proverb, ‘The great fish eats the small’ (Tilley, F311). と注で説明している<sup>22)</sup>。こ  
れはまさしく弱肉強食の「自然の法則」である。Edmund の nature を思い起  
こさせる用法である。Schmidt は①の定義で、人間の制度や傾向と対をなす  
用法としている。

誤報に続いて大敗北の知らせが入り、議論が交わされる中、Morton が登場  
すると、それを目にした Northumberland は「そうだ、この男の顔は本の扉頁  
のように悲劇の内容を予告している」“Yea, this man’s brow, like to a title-leaf,  
/ Foretells the nature of a tragic volume.” (Ii.60-61) と言い、敗北の報が正しい  
ことを悟る。この nature は性質、本質の意味で用いられているのは明らかで  
ある。

Henry IV が王位に就いた経緯を振り返る言葉を聞き、Warwick は「すべて

の人の一生には過去の内容を表す歴史があります” “There is history in all men’s lives / Figuring the nature of the times deceas’d;” (III.i.80-81)と云う。この nature の用法も上記の “the nature of a tragic volume.” と同じ用法である。

Prince John が歓声を聞き、和睦の知らせが伝わったのだと云うと、Mowbray はこれが勝利後の歓声であったら、愉快だっただろうと云う。すると Archbishop は「和睦も勝利のようなもの」 “A peace is of the nature of a conquest,” (IV.ii.89)と云うのである。OED は of or in the nature of を慣用句として、この箇所を引用している。

Falstaff は自己の飲兵衛の言い訳に、Henry Prince が勇敢であるのもシェリー一酒の功德の賜物だ、「王子は生来父親の冷たい血を受け継いだ」 “the cold blood he did naturally / inherit of his father” (IV.iii.116-117)からだと云う。Naturally は by nature の意味で用いられている。

## IV

### 『ヘンリー五世』 *Henry V*

この作品では nature が7回、natural が4回、unnatural が1回用いられている。Schmidt の①の意味の nature から見てみよう。フランス王は、かつて黒太子 Edward によって国土である「造化の自然の傑作」 “the work of nature” (II.iv.60)が蹂躪された屈辱の日を思い起こさせようとする。

またフランス皇太子はアジンコート戦の戦いを前に、勝利を確信し、浮かれて、自分の名馬をだれでも賛美すべきで、「私はかつて彼を賛美して一編のソネットを書き、このような書き出しであった、『造化の自然の驚異』 “I once writ a sonnet in his praise and began thus: ‘Wonder of nature’—” (III.vii.40)と云う。

次の nature は自然界の意であろうか、

For so work the honey-bees,  
Creatures that by a rule in nature teach  
The act of order to a peopled kingdom.

(I.ii.187-189)

というのは蜜蜂も同じです。

蜜蜂は自然の法則にしたがって

人間界に秩序ある行動を教えている。

Taylor は rule in nature について instinctive polity (Wilson). An oxymoron. と注を施している<sup>23)</sup>。

次の nature は Schmidt の定義 1) で、人間の制度や性向に対するものの項に該当する用法である。自然の理法・条理の意味である。

He wills you, in the name of God Almighty,  
That you divest yourself, and lay apart  
The borrowed glories that by gift of heaven,  
By law of nature and of nations, 'longs  
To him and to his heirs;

(II.iv.77-81)

国王は全能の神のみ名において、陛下が退位されて、  
天の授与により、また自然及び諸国の法により  
イギリス王及びその後継者に属している借り物の榮譽を  
放棄されることを望んでおられます。

Craik は by gift ... nations について The law of nature is the body of commandments implanted by nature in the human mind (*OED law sb.*<sup>1</sup> 9c). The law of nations is international law (*OED law sb.*<sup>1</sup> 4c, which points out that the two terms were often coupled, citing this passage and *TC* 2.2.183-4) と注を付している<sup>24)</sup>。また Gurr は By law ... nations について A standard formula for international law. See *Tro.* 2.2.185-5: 'these moral laws / Of nature and of nations'. Strictly, the law of nations was Roman law. と説明している<sup>25)</sup>。

ハーフラ攻撃に際し、国王ヘンリーは兵士らを激励する。

But when the blast of war blows in our ears,  
Then imitate the action of the tiger,  
Stiffen the sinews, summon up the blood,  
Disguise fair nature with hard-favour'd rage;

## (III.i.5-8)

戦争の大砲やラッパの音がわれわれの耳に聞こえるなら、  
 虎の行動をまね、筋肉を引き締め、  
 勇気を鼓舞し、温和な気性を怒りの顔で覆え。

Taylor は nature について not only ‘natural appearance, your true self’ but more specifically ‘natural feeling or affection’ (sb. 9e). *OED*’s first citation of this sense is in 1605, but it clearly occurs at 2 Henry IV 4.5.39 (‘nature, love, and filial tenderness’). と説明を加えている<sup>26)</sup>。

次の nature は単に種類を指す。「各条項が予め確定いたしました通りに」  
 “According to their firm proposed natures.” (V.2.320) について、Craik は  
 According to the nature of each as firmly proposed to him (Moore Smith) と注を  
 付けている<sup>27)</sup>。

次の「本来の性質に欠陥があり」“Defective in their natures” (V.ii.55) にお  
 ける nature も quality の意味である。Defective ... natures について Gurr は  
 Creatures of the fallen world, outside Eden. と注を施している<sup>28)</sup>。また Taylor は  
 natures について At the Fall all the natural world became degenerate and  
 corrupt; because of this defect of nature, it reverts to *wildness* unless constantly  
 cultivated and corrected. と説明している<sup>29)</sup>。原罪については序でアウグスティ  
 ヌスの言葉を引用している。

次に natural を見てみよう。Exeter は政治の要諦を次のように述べる。

For government, though high, and low, and lower,  
 Put into parts, doth keep in one consent,  
 Congreeing in a full and natural close,  
 Like music.

## (I.ii.192-195)

政治体制は高、中、低というふう  
 に分かれているが、音楽のように、  
 まとまって一体を維持し、完全な、  
 自然な終止にまとまるようになっている。

Taylor は full and natural close について ‘full’ close was a technical term for an authentic or perfect cadence, ‘a final or full close’ (Morley, 128). *Natural* is a vaguer layman’s usage, meaning ‘easily or logically or not abruptly arrived at’. The general and technical terms complement each other. と説明を付与している<sup>30)</sup>。full と natural は相互に補完し合っているということである。

コーラスは次のように語っている。この natural について Schmidt は9) obedient to the impulse of nature, kind, or tender; の項に含めている。

O England! model to thy inward greatness,  
Like little body with a mighty heart,  
What might’st thou do that honour would thee do,  
Were all thy children kind and natural!

(II.Prologue)

おお、英国よ、偉大な精神を宿した  
小さな体のように、心の偉大な模範だ。  
あなたのすべての子が人情に従って行動するなら、  
名誉の命ずるどんなことをもなせよう。

Taylor は kind について (a) filial (b) loving. と注を付している<sup>31)</sup>。また Gurr は kind i.e. naturally filial. としている<sup>32)</sup>。kind と natural は同じ意味で、unkind と unnatural の関係と同様に相互補強的な関係にある語である。

国王殺害を謀った3人の貴族に向かって国王ヘンリーは次のように言う。

Treason and murder ever kept together,  
As two yoke-devils sworn to either’s purpose,  
Working so grossly in a natural cause  
That admiration did not whoop at them;

(II.ii.113-116)

反逆と弑逆とは手に手をとって、  
同じ悪事に誓った2頭の悪魔のように、  
その本性の目的に向かってどんなこともやるので、  
悪行に誰も驚かない。



Gurr は a natural について、What is natural for devils is monstrous for humans. The F compositor seems to have wavered between ‘natural’ and ‘unnatural’. と注を施している<sup>33)</sup>。F2では a natural であり、F では an naturall となっている。

馬に乗って、血が飛び散って、イギリス兵の目潰しするほど拍車をかけよと言うフランス皇太子の言葉に、Rambures は「え、やつらの目から我々の馬の血を流させるつもりですか。ではどうすれば彼らの本当の涙を見ることができでしょうか。」“What, will you have them weep our horses’ blood? / How shall we then behold their natural tears?” (IV.ii.19-20) と言う。

unnatural は Burgundy の「不自然なことをなんでも」“every thing that seems unnatural.” (VII.62) という言葉において用いられているだけである。

史劇について、Bush が言うように、Henry V において Canterbury は、蜜蜂は「自然の法則に従って人間世界に秩序ある行動を教えるもの」“Creatures that by a rule in nature teach / The act of order to a peopled kingdom.” (I.ii.188-189) と言い、社会は the dream of an ordered commonwealth に希望を抱いており、この世界の存続のためには、最初の自然本来の社会 (its first naturalness) への復帰を目指す。社会の希望はイギリスが再び This other Eden, demi-paradise であり、France が this best garden of the world になることである<sup>34)</sup>。

また Richard II のちょうど中間で、庭師とその僕が庭を刈り込んでいて、涙を流している妃にはその庭師が「大昔のアダムのように」“old Adam’s likeness” 思われ、その庭が元の完全な国の姿であり、その場面は、歴史における象徴的な分裂した国家と位を奪われる王のエピソードであると Bush は言う<sup>35)</sup>。

更に歴史劇は社会の秩序、本来の理想的な社会を目指すのが、理想と現実とは和解することがない。そのどうにもならない状況がハル王子とフォールスタッフという形をとる。ハル王子は人間の理想と社会の理想を目指すのが、日常の経験と人や事物への我々の愛着という現実がフォールスタッフであり、その現実と理想が衝突すると Bush は言っている<sup>36)</sup>。

## その他の史劇

### I

#### 『ジョン王』 *King John*

この作品では nature が6回、natural が2回、naturally が1回、unnatural が1回使用されている。Schmidt の定義①の意味の nature から見てみよう。

Arthur に落ち着くように言われると、母の Constance は次のように落ち着けない理由を述べる。

Nature and fortune join'd to make thee great;  
Of nature's gifts thou mayst with lilies boast  
And with the half-blown rose.

(II.ii.52-54)

自然の女神と運命の女神とが協力してそなたを  
偉大な人にした。野の百合とまた半ば咲いた薔薇とともに  
自然の贈り物を自慢してよい。

Honigmann は Nature and fortune について、The gifts of Nature and Fortune were often compared in the pre-Shakespearean love-novel. Shakespeare's best summary is in *AYL*.: "Fortune reigns in gifts of the world, not in the lineaments of Nature" (I.ii.45-6) と注を付している<sup>37)</sup>。nature は fortune と対概念で用いられ、nature は先天性のものに、fortune は後天的なものに関わるのである。

王は Arthur 殺しの罪を、「造化の自然の手で恥ずべき行為をするようにしるしを付けられ、注目され、特徴づけられた奴の」"A fellow by the hand of nature mark'd, / Quoted and sign'd to do a deed of shame," (IV.ii.221-222) お前がそばにいなかったら、その人殺しなど思いつかなかっただろうと言って、Hubert に罪を転嫁して、自己の正当化を試みる。

Lew the Dauphin を Pandulph は、勇気付けるため、次のように天変地異は John への罰の予告だと述べる。

No natural exhalation in the sky,

No scope of nature, no distemper'd day,  
 No common wind, no custom'd event,  
 But they will pluck away his natural cause  
 And call them meteors, prodigies and signs,  
 Abortives, presages, and tongues of heaven,  
 Plainly denouncing vengeance upon John.

(III.iii.155-161)

空のいかなる自然現象たる彗星も、自然力も、  
 荒れた日も、普通の風も、ありふれた事件も、  
 それらを自然に原因があるという考えを退けて  
 明らかにジョンへの復讐を宣言する彗星、  
 転変、徴、異常、前兆、天の声と言わない  
 人はいません。

2つの *natural* は「自然現象の」を意味する。No scope of nature について Braunmuller は i.e., 'Nothing within the limits of nature's power' (Smallwood) と注を付している<sup>38)</sup>。nature は自然現象の原理の意味と考えていいだろう。

Hubert は Arthur に手をかけていないことを王に「陛下は私の外観を見て心情を非難なさいました」“And you have slander'd nature in my form,” (IV.ii.256) と述べる。この nature について、Beaurline は natural feeling, affection と注を付している<sup>39)</sup>。

Constance は Queen Eleanor の侮辱的な言葉に次のように反論する。

His grandam's wrongs, and not his mother's shames,  
 Draws those heaven-moving pearls from his poor eyes,  
 Which heaven shall take in nature of a fee;

(II.i.168-170)

母を恥じてのことでなく、祖母のひどい行いが  
 あの子のかわいそうな目から天をも動かす真珠の涙を流させるの  
 です。その涙を天も報酬としてお受けなさるでしょう。

この nature を Schmidt は quality, kind, sort の項に含めている。しかし、*OED*

に4. b. *of or in the nature of* の次の項目に4. c. *Similarly in nature of. Obs.* とあるように熟語化し、「～に等しい」を意味する。

Constance は自分が「生来怖がりの女」“A woman, naturally born to fear;” (II.ii.15) と言う。この *naturally* は *by nature* の意味である。

King Philip は Arthur に対して King John について「そなたの人倫にもとる叔父」“thy unnatural uncle” (II.i.11) と言う。*unnatural* について、Beaurline は *unloving. Natural love was between blood relations.* と注を付している<sup>40)</sup>。*unnatural* は *against nature* の意味であって、*nature* は血族間の自然の情愛の意である。

## II

### 『ヘンリー八世』 *Henry VIII*

この作品では *nature* は12回、*unnatural* が1回使用されている。まず Schmidt の定義①の意味の *nature* から見てみよう。

王は、Wolsey の讒言を信じ、Buckingham 公をロンドン塔に送りながらも「あの者は学識もあり、非常に弁舌さわやかだ。彼ほど天賦の才能をもつ者もあるまい」“The gentleman is learn'd, and a most rare speaker,/ To nature none more bound;” (I.ii.111-112) と言う。Foakes は *bound* について *indebted, i.e. for natural abilities.* と注を施している<sup>41)</sup>。

王は Wolsey の弁明に応じて、自らの釈明の言葉を諸卿に述べる。

First, methought

I stood not in the smile of heaven, who had  
Commanded nature that my lady's womb,  
If it conceiv'd a male-child by me, should  
Do no more offices of life to't than  
The grave does the th' dead:

(II.iv.184-189)

第一に、神の好意に与れないのではと思われた。  
神は妻が男の子を懐妊した場合に、

妻の胎は胎児に対して、墓が死者にする以上の役目を  
なさぬように造化の自然に命じておられたから。

この nature も造化の自然の意味で用いられている。

Wolsey は「造化の自然は自己保存するための時間を要求します」“... nature does require / Her times of preservation,” (III.ii.146-147)と言う。

性格、性質を意味する nature が最も多く使用されている。Norfolk は Wolsey に対する注意を促すため、Buckingham に次のように言う。

You know his nature

That he's revengeful, and I know his sword

Hath a sharp edge;

(I.i.108-109)

彼が執念深いという性格をご存知です。

彼の剣の刃は鋭利であることは知っております。

Campeius 枢機卿は Wolsey を「高貴な人柄の York 公」“My lord of York, out of his noble nature,” (III.i.62)と言う。

Wolsey は自分の運命を悟り、「陛下の高貴なご気性を存じている」“I know his noble nature ...”ので、そなたを見捨てることもないから、部下の Cromwell に自分を離れ、王に仕えるようにと言う。

Catherine は、自分の娘について、「あの子は幼いが高貴で淑やかな性格ですから教育するだけの価値があります」“She is young and of a noble modest nature, / I hope she will deserve well ...” (IV.ii.135-136)と言う。

王は Gardiner に対して「わしはお前が無慈悲で残酷なやつだと確信している」“I'm sure / Thou hast a cruel nature and a bloody.” (V.ii.162-163)と言う。

Sir Thomas Lovell の急ぎように、Gardiner は用件を自分にも教えてほしいと次のように言う。

...; affairs that walk

(As they say spirits do) at midnight, have

In them a wilder nature than the business

That seeks dispatch by day.

(Vi.13-16)

妖精は真夜中に出歩くといいますが、  
真夜中に出歩く用件は昼間に急を要する用件より  
尋常でないものでありますから。

この nature について Schmidt は individual constitution, personal character の定義に分類している。

小姓の1時を過ぎたという言葉に Gardiner は次のように言う。

These should be hours for necessities,  
Not for delights; times to repair our nature  
With comforting repose, and not for us  
To waste these times.

(Vi.2-5)

ではこれは必要なことに費やす時間であって、  
娯楽の時間ではない。快い休息で体の元気を  
回復させる時間であって、浪費すべき時間ではない。

この nature は人間の体質、身体を意味する。上記の nature と同じ意味に Schmidt は分類している。

次の nature は本質・本性の意味であろう。大法官は Cranmer に次のように言う。

...; but we all are men,  
In our own natures frail, and capable  
Of our flesh;...

(Vii.44-46)

しかし我々は皆本性において  
脆く肉の誘惑に弱い人間である。

次の nature は単なる種類、性質の意味である。Wolsey の課した重税について、王は「この重税はどんな性質のものか、どんな形式のものか教えてくれ」  
“The nature of it, in what kind let’s know, / Is this exaction.” (I.ii.53-54) と言う。  
つぎに unnatural を見てみよう。Buckingham 公は父とともに部下の裏切りに

あい、断罪されて「この上ない人道にもとる、不忠の行為」“A most unnatural and faithless service.” (II.i.123) と言って己の身を嘆く。

- 
- <sup>1)</sup> Michael Taylor, ed., *Henry VI Part 1*, The Oxford Shakespeare, Oxford U.P., 2003, note.
- <sup>2)</sup> Andrew S. Cairncross, ed., *The First Part of King Henry VI*, The Arden Shakespeare, Methuen & Co. Ltd., 1963, note.
- <sup>3)</sup> Andrew S. Cairncross, *ibid.*, note.
- <sup>4)</sup> Andrew S. Cairncross, ed., *The Second Part of King Henry VI*, The Arden Shakespeare, Methuen & Co. Ltd., 1962, note.
- <sup>5)</sup> Andrew S. Cairncross, *ibid.*, note.
- <sup>6)</sup> Edgar C. Knowlton, “Nature and Shakespeare”, PMLA, LI, 1936, p.721.
- <sup>7)</sup> Michael Hattaway, ed., *The Third Part of King Henry VI*, The New Cambridge U. P., 1993, note.
- <sup>8)</sup> Randall Martin, ed., *Henry VI Part 3*, The Oxford Shakespeare, Oxford U. P., 2001, note.
- <sup>9)</sup> Andrew S. Cairncross, ed., *The Third Part of King Henry VI*, The Arden Shakespeare, Methuen & Co. Ltd., 1964, note.
- <sup>10)</sup> Antony Hammond, ed., *King Richard III*, The Arden Shakespeare, 1981, note.
- <sup>11)</sup> John Jowett, ed., *Richard III*, The Oxford Shakespeare, Oxford U.P., 2000, note.
- <sup>12)</sup> John Jowett, *ibid.*, note.
- <sup>13)</sup> Antony Hammond, *op. cit.*, note.
- <sup>14)</sup> John Jowett, *op. cit.*, note.
- <sup>15)</sup> John Jowett, *ibid.*, note.
- <sup>16)</sup> Janis Lull, ed., *King Richard III*, The New Cambridge Shakespeare, Cambridge University Press, 1999, note.
- <sup>17)</sup> Antony Hammond, *op. cit.*, note.
- <sup>18)</sup> Antony Hammond, *ibid.*, note.
- <sup>19)</sup> Geoffrey Bush, *Shakespeare and the Natural Condition*, Harvard University Press, 1956, pp.32-34.
- <sup>20)</sup> Edgar C. Knowlton, *op. cit.*, p.720.
- <sup>21)</sup> Giorgio Melchiori, ed., *2 Henry IV*, The New Cambridge Shakespeare, Cambridge University Press, 1989, note.
- <sup>22)</sup> A. R. Humphreys, ed., *2 Henry IV*, The Arden Shakespeare, Methuen & Co. Ltd., 1966, note.
- <sup>23)</sup> Gary Taylor, ed., *King Henry V*, The Oxford Shakespeare, Oxford University Press, 1982, note.
- <sup>24)</sup> T. W. Craik, ed., *King Henry V*, The Arden Shakespeare, Routledge, 1995, note.
- <sup>25)</sup> Andrew Gurr, ed., *King Henry V*, The New Cambridge Shakespeare, Cambridge

- University Press, 1992, note.
- <sup>26)</sup> Gary Taylor, *op. cit.*, note.
- <sup>27)</sup> T. W. Craik, *op. cit.*, note.
- <sup>28)</sup> Andrew Gurr, *op. cit.*, note.
- <sup>29)</sup> Gary Taylor, *op. cit.*, note.
- <sup>30)</sup> Gary Taylor, *ibid.*, note.
- <sup>31)</sup> Gary Taylor, *ibid.*, note.
- <sup>32)</sup> Andrew Gurr, *op. cit.*, note.
- <sup>33)</sup> Andrew Gurr, *ibid.*, note.
- <sup>34)</sup> Geoffrey Bush, *op. cit.*, pp.31-33.
- <sup>35)</sup> Geoffrey Bush, *ibid.*, p.32.
- <sup>36)</sup> Geoffrey Bush, *ibid.*, pp.34-35.
- <sup>37)</sup> E. A. J. Honigmann, ed., *King John*, The Arden Shakespeare, Methuen & Co. Ltd., 1962, note.
- <sup>38)</sup> A. R. Braunmuller, ed., *King John*, The Oxford Shakespeare, Oxford University Press, 1989, note.
- <sup>39)</sup> L. A. Beaurline, ed., *King John*, The New Cambridge Shakespeare, Cambridge University Press, 1990, note.
- <sup>40)</sup> L. A. Beaurline, *ibid.*, note.
- <sup>41)</sup> R. A. Foakes, ed., *King Henry VIII*, The Arden Shakespeare, Methuen & Co. Ltd., 1964, note.



## 第二章 喜劇

### I

#### 『間違いの喜劇』 *The Comedy of Errors*

この作品では、*nature* が 3 回、*natural* が 1 回使用されている。Syracuse の商人 Egeon に仕事先の Epidamnum で他人の目には区別できないほど似た双生児の男子が生まれた。また同じ場所で貧しい家にこれもよく似た双生児が生まれ、買い取り、息子たちの僕として育てていた。その Epidamnum から自国に帰る途中、嵐に遭遇し、妻は兄と召使の兄を連れ、Egeon は弟と召使の弟とを連れて、離れ離れになる。17年後、Egeon の許にいた息子 Antipholus が召使の Dromio を伴い、兄を探しに出かける。Egeon もその後を追って、敵国の Ephesus (エフェサス) に来たところを捉えられる。そして死刑の宣告を受け、夕べには処刑される運命にある。公爵から、不法入国した理由を聞かれて、Egeon は、その経緯を述べる中で、身の上を語ることほどつらいことはないが、*vile offence* (邪な犯罪) によるのではなくて、行方知れずになった息子を探すためである旨を次のように言う。

A heavier task could not have been imposed  
Than I to speak my griefs unspeakable,  
Yet, that the world may witness that my end  
Was wrought by nature, not by vile offence,  
I'll utter what my sorrow gives me leave.

(I.i.31-34)

言いようのない数々の悲しみを口にするほど  
辛いことはありませんが、私の死が邪な犯罪に  
よるのではなく、(子を思う) 肉親への情愛によるもの  
ということを世間に知ってもらうために、  
私の悲しみの許す限りのことを申し上げます。

Egeon の処刑が邪な犯罪によるのではなく、*nature* によるものと言うのであ

る。この nature は、Dorsch が natural affection—his love for his son と注を施しているように<sup>1)</sup>、「自然の情愛」 natural feelings を意味する。この nature について Bush は次のような Montaigne の言葉を引き合いに出している<sup>2)</sup>。

If there be any truly-naturall law, that is to say, any instinct, universally and perpetually imprinted, both in beasts and us, (which is not without controversie) I may, according to mine opinion, say, that next to the care, which each living creature hath to his preservation, and to flie what doth hurt him; the affection which engenderer beareth his offspring, holds the second place in this ranke.

(Montaigne's Essayes. The Second Booke Chapter VIII.)

真の自然法が存在するなら、つまり、獣であれ、人間であれ、(議論の余地はなくもないが、) 普遍的に、永劫に刻印されている、本能があるとすれば、私の考えでは、生き物が自己保存のため、また危害を加えるものから逃げようとする感情に次ぐものは、親が子に抱く愛情であると言ってもよかろう。

自己保存の本能に次ぐ親の子に対する情愛 nature が劇の主題であり、一族の離散と再会の物語である。

他は「自然に禿げた髪の毛を人が取り戻す時はありません」“There's no time for a man to recover his hair / that grows bald by nature.” (II.ii.71-72) と「自然に抜け落ちた髪の毛を取り戻す時」“Marry, and did, sir, namely, e'en no time to / recover hair lost by nature.” (II.ii.101-102) という兄 Dromio of Syracuse が2回用いている。Schimdt は①の定義を与え、更に Denoting spontaneous growth and formation: (自然の発生・成長をしめす)ものとして、この箇所を挙げている。

2組の双子児の取り違えは大混乱をもたらす。ついに女子修道院の前で、主要な人物が顔を合わせることとなり、2組の双子児の兄弟を見た公爵が驚いて、

One of these men is genius to the other;  
And so of these, which is the natural man,

And which the spirit? Who deciphers them?

(Vi.332-334)

そのものたちの一方が他方の守り神であり、

またその2人も。だが、どちらが精霊で、

どちらが人間なのか？だれに見分けがつかうか？

と言う。人間を“the spirit”と対照させて“the natural man”と言っている。双方が“the spirit”でなく“the natural man”であることがわかって、目度合い再会となる。

幸せな家族が難破によって別離を余儀なくされる。そして父は「肉親の思いう情」natureに促され、失った肉親を探しに出かけ、死に直面する。しかし摂理によって一家が再会し、家族は再び幸せを手にするのである。

## II

『じゃじゃ馬ならし』 *The Taming of the Shrew*

この作品には nature は性質の意味で1回使用されているだけである。

Hortensio は Bianca に対する恋敵 Gremio との競争を「我々の競争の性質」“the nature of our quarrel”と言うのである。

## III

『ヴェローナの二紳士』 *The Two Gentlemen of Verona*

この作品では nature は1回使用されていて、Schmidt が示すように、quality の意味で用いられている。

Proteus は Valentine と Silvia との駆け落ちをミラノ公に密告し、しかも無法者から救った Silvia に求愛し、拒否されると、腕づくでわがものにしようとする。

Nay, if the gentle spirit of moving words  
Can no way change you to a milder form,  
I'll woo you like a soldier, at arms' end,  
And love you 'gainst the nature of love : force ye.

(V.iv.55-58)

いや、心を動かす優しい言葉をもって  
君を和らげられないなら、  
僕は軍人らしく、剣の先で求愛し、  
愛の本質に反して愛し、無理やりにでも。

Proteus の求愛は “against the nature of love” (愛の本質に反して) いる。  
Proteus は友人を裏切り、その恋人を暴力で犯そうとする。まさに Proteus の  
行為は unnatural である。しかしその Proteus の人の道にもとる行為も寛大な  
Valentine によって許される。

#### IV

##### 『恋の骨折り損』 *Love's Labour's Lost*

この作品では nature は 2 回しか用いられていない。1 つは造化の自然の意味  
であり、もう 1 つは単なる性質、種類の意味である。

Boyet は談判相手の Navarre 王に対して持ち前の美を存分に活用するよう  
にと王女に進言する。

Be now as prodigal of all dear grace  
As Nature was in making graces dear,  
When she did starve the general world beside  
And prodigally gave them all to you.

(II.i.9-12)

今こそ美しさを気前よくなさいませ。  
造化の自然は美に値打ちをつけるため  
世間一般の女には美に飢えさせますが、  
あなたさまには気前よく美をお与えになりましたから。

Knowlton は神の代理として、伝統的な自然の女神 Dame Nature が特別美しい  
女性を創造する例として、この箇所を引用している<sup>3)</sup>。

Rosaline の皮肉たっぷりの言葉に閉口して、Berowne は

...; your capacity

Is of that nature that to your huge store  
Wise things seem foolish and rich things but poor.

(Vii.376-378)

知恵袋があまり大きくて、  
賢いものも愚かに、豊かなものも  
貧弱にみえるのですね。

と言う。この *nature* は *sort, kind, quality* の意味で用いられている。

*LLL* では *nature* の語は 2 回しか使用されていない。しかし *natural* と *artificial* との対比、また *nature* と *art* との対比の構図がこの作品の底流をなしている。Navarre 王は死に打ち勝ち、永遠に名を残す *fame* (名声) を求めて、*affections* (欲望) と *the world's desires* (世俗の欲望) を断ち、3 年間「生活術に専念」“Still and contemplative in living art.” (I.i.14) しようと 3 人の廷臣に呼びかける。Woudhuysen は *living art* について、これはストア派の *ars vivendi* であり、The *art* associated with the King and his courtiers contrasts with the *Nature* of the Princess's party, 2.1.10. と注を施しているように、*art* と *nature* の対照を示している。またこの句は *living* が *art* と対立する *life* に由来するから矛盾語法だという Nevo を引用している<sup>4)</sup>。

更に王と 3 人の廷臣は勿論、スペイン人で大法螺吹き of *Armado*、教師 *Holofernes*、教区牧師 *Nathaniel* たちの言動は銜い、気取り、不自然なものである。この作品では *natural* と *artificial*、*nature* と *art* の対比において *artificial* と *art* とが批判、風刺の対象となっている。

## V

### 『夏の夜の夢』 *A Midsummer Night's Dream*

この作品では *nature* は Schmidt の定義①の意味で 3 回、*natural* が 1 回使用されている。

アテネの森で、*Demetrius* は付きまとう *Helena* を邪険に扱うが、それを見て不憫になった妖精王 *Oberon* は、目が覚めて最初に見たものを恋するという花の汁を *Demetrius* の臉に塗るよう *Puck* に命じる。*Puck* は間違えて眠っ

ている Lysander に塗ってしまう。Helena が通りかかり、Lysander を起こす。目を覚ました Lysander はほれ薬が効いて、たちどころに Helena に恋してしまい、次のように言う。

And run through fire I will for thy sweet sake!  
Transparent Helena! Nature shows art,  
That through thy bosom makes me see thy heart.

(II.ii.102-104)

愛しい君のためなら、火の中をくぐろう。  
透き通るような美しいヘレナ。造化の自然は  
君の胸を通して心が見える技を示している。

nature shows art.に関して Harold F. Brooks は Ordinarily Nature produces opaque bodies; she exhibits art like a magician's (Wells) in creating Helena's, so exquisitely textured as to be transparent, enabling Lysander through her bosom to see her heart.と注を施している<sup>5)</sup>。また R. A. Foakes は A conceit based on the traditional opposition of art—the product of human skill—to nature;と説明している<sup>6)</sup>。Shakespeare に頻出する nature と art との対概念である。

劇中劇において Pyramus に扮する Bottom は Thisbe のマントに血がついているのを見て、ライオンに引き裂かれたと思い、次のように嘆くのである。

*O wherefore, Nature, didst thou lions frame,  
Since lion vile hath here deflower'd my dear?*

(Vi.280-281)

おお、造化の自然よ、なぜライオンなど造ったのだ、  
悪辣なライオンがわが恋人の花の命を散らしたのだ。

余興が終わり、Oberon は3組の夫婦の新床を訪れ、祝福して言う。

And the blots of Nature's hand  
Shall not in their issue stand:

(Vi.395-396)

造化の自然の手違いが  
その子供たちにありませんように。

次に *natural* を見てみよう。ほれ薬の効力をなくす薬を目にさされた Lysander とほれ薬の効力を保持している Demetrius、それに Hermia、Helena の4人が、混乱も収まって、眠っているところに Theseus たちがやってくる。Hermia と Lysander の駆け落ち話に Egeus は激怒するが、Demetrius は Helena への愛に戻ったことを次のように言う。

But like a sickness did I loathe this food:  
 But as in health, come to my natural taste,  
 Now I do wish it, love it, long for it,  
 And will for evermore be true to it.

(IV.i.172-175)

病気のときのようこの食べ物が嫌いになりましたが、  
 健康を取り戻すと、本来の味覚に戻りました。  
 今はそれを望み、好きで、恋い焦がれ、  
 永久に忠実でいたいと思います。

*natural* は *nature* によって与えられた、「生来の、本来の」を意味する。この劇では派生語を含めた *nature* はすべて造化の自然に関わる意味を有している。

喜劇における *nature* は深刻な状況で用いられることがない。喜劇の基本にあるのは「この世では人口は増やさねばならない」“the world must be peopled.” (Much Ado II.iii.233-4) のである。

Bush は、Pyramus に扮した Bottom は造化の自然の邪悪さを発見して、“O, wherefore, Nature, didst thou lions frame?” と叫ぶが、喜劇の獅子は無害であると述べている<sup>7)</sup>。

## VI

### 『ヴェニス商人』 *The Merchant of Venice*

この作品では、*nature* の使用が4回と少なく、また作品で重要な役を担わされていない。造化の自然が1回、種類が2回、1回が人の性格の意味で使用されている。

まず造化の自然の意の nature を見てみよう。理由もなく憂鬱な顔をしている Antonio について Solanio は「造化の自然は奇妙な人間をこしらえてきたものだ」“Nature hath fram’d strange fellows in her :” (I.i.51) と言う。

次の2例は sort, kind の意味で用いられている。箱選びで、銀の箱を選んだ Arragon は「われを選ぶものは分相応のものを得るだろう」“Who chooseth me, shall have as much as he deserves!” (II.ix.58) と刻んだ銘を見て、自分に分相応とは阿呆の顔なのかと言う。それに対して Portia は「罪を犯すことと裁くことは別の役目、正反対のものです」“To offend and judge are distinct offices, / And of opposed natures” (II.ix.61-62). と応える。

また男装し、裁判官に扮した Portia は法廷に立ち、Shylock と対面する。その訴状に対して「お前の訴訟は奇妙なものだ」“Of a strange nature is the suit you follow,” (IV.i.173) と言う。Portia が “a strange nature” という訴訟とは期限までに3,000ダカットを支払わなかったその代償に Antonio の人肉1ポンドを切り取るということなのである。

次の nature は Schmidt が4) personal character と定義している。Portia の帰りを待つ Lorenzo は Jessica に音楽の効用について語る。

Since naught so stockish, hard, and full of rage,  
But music for the time doth change his nature,—  
(Vi.81-82)

どんな鈍感で、頑なで、怒っているものも、  
音楽を聴いている間はその性質を変えないものはない。

この劇の多くの登場人物は音楽によって和やかな気分になる。しかし音楽によって変えることができないのが Shylock の nature なのである。

## VII

### 『空騒ぎ』 *Much Ado about Nothing*

*Much Ado* においては、nature はすべて Schmidt の定義①の意味で4回用いられている。またこの作品では natural や unnatural 等の派生語は使用されていない。



Beatrice があずまやに潜んで聞いているのを承知していて、Benedick が立派な紳士で、Beatrice に相応しい方ですと言う侍女の Ursula に Hero は「でも造化の自然はビアトリスほど自尊心の強い女性を造ったことがなかったのです」“But Nature never fram'd a woman's heart / Of prouder stuff than that of Beartrice.” (III.i.49-50) と言う。

Benedick の愛を Beatrice に知らせない方がいい理由を Hero は次のように言う。

If fair-fac'd,

She would swear the gentleman should be her sister;

If black, why, Nature, drawing of an antic,

Made a foul blot;

(III.i.62-64)

色が白いと自分の妹であればいいのと言い、  
色が黒いと、造化の自然が道化を描こうとして  
塗りそこなつたと断言する。

Don John の姦策にはまり、Claudio は結婚式で Hero の不貞を非難する。Hero は気絶し、息を吹き返し、もう安心ですと言う Friar の言葉を聞くと、Leonato は「子供が 1 人しかいないことで嘆いたことがあったか？そのことで造化の自然の出し惜しみを叱ったことがあったか？」“Griev'd I, I had but one? / Chid I for that at frugal Nature's frame?” (IV.i.127-128) と言って嘆くのである。

警吏の Dogberry は夜警の Seacoal に「よい容貌というのは運命の賜物だが、読み書きは天性のものである」“To be a well-favoured man is / the gift of fortune, but to write and read comes by / nature.” (III.iii.14-16) と言う。fortune と nature とが対概念で用いられている。しかしここでは、Dogberry は彼らしく、fortune は後天性のものであるのに対して nature は自然に授かったもの、つまり先天的なものという観念をあべこべに言っているのである。

## VIII

### 『お気に召すまま』 *As You Like It*

この作品は nature の使用頻度が高く、17回に及んでいる。nature は多くが Schmidt の定義①の意味で使用されている。他に natural が6回、unnatural が2回用いられている。

①の nature を見てみよう。Orlando は Adam に兄 Oliver に対する憤懣を述べている。自分に対する扱いは家で飼われている牛馬以下と言い、更に次のように皮肉を込めて言う。

Besides this nothing that he so plentifully gives me,  
the something that nature gave me his countenance  
seems to take from me.

(I.i.16-18)

僕にたっぷりとくれるこの無のほかにも、  
兄は造化の自然が与えてくれた物まで  
奪おうとしているようだ。

Michael Hattaway が the something—me について Orlando in fact means social status. と注を付しているように<sup>8)</sup>、もって生まれた社会的身分を、Oliver が奪おうとしているというのである。また Alan Brissenden は nature について The first of a recurrent series of references to nature, and another link with Rosalind (compare 1.2.39) という注を施している<sup>9)</sup>。この作品でも nature は1つの重要なキーワードである。

I.ii.30. の the good hussif Fortune について Latham が The strife between nature and fortune was a medieval commonplace, deriving ultimately from Seneca, through Boethius, and constantly recurring in Shakespeare. Lodge describes old Sir Rowland as a knight ‘whom fortune had graced with many favours, and nature honoured with sundry exquisite qualities, so beautified with the excellence of both, as it was a question whether fortune or nature were more prodigal in deciphering the riches of their bounties’. (Greg, p.1) と説明を施して

いる<sup>10)</sup>。いろいろな贈り物をする運命の女神は後天的な面を司り、すぐれた資質・素質を与える自然の女神は先天的な面を司っているのである。

Fortune の贈り物が不公平なので、なぶって運命の輪を止めようと Celia が言い出すと、Rosalind も同意し、Fortune・Nature 問答を交わす。美を与える女には貞節を与えないし、貞節を与える女には醜さしか与えないと言う Celia の言葉に、Rosalind は

Nay now thou goest from Fortune's office to  
Nature's; Fortune reigns in gifts of the world, not  
in the lineaments of Nature.

(I.ii.39-41)

あら、それは運命の女神の役目でなく、自然の女神の役目です。運命の女神はこの世の贈り物について支配しているのであって、自然の女神が施す顔を支配しているわけではありません。

と Fortune が司るのはこの世の事であり、Nature が美貌など先天的なものを与えるのであって、Celia は Fortune の役割と Nature の役割を混同していると言うのである。

それに対して Celia は Nature が美人を造ったって、その人が Fortune によって火の中に落とされ、醜くなることもあるなどと反論し、Touchstone がやって来るのを見て、Nature が Fortune を愚弄する知恵を私たちにくれたけど、議論を止めさせるために、阿呆を Fortune が寄越したと言う。

No? When Nature hath made a fair creature, may  
she not by Fortune fall into the fire? Though Nature  
hath given us wit to flout at Fortune, hath not  
Fortune sent in this fool to cut off the argument?

(I.ii.42-45)

そうでしょうか。自然の女神が美人を造っても、運命の女神によって火に焼かれることってないかしら。自然の女神が運命の女神を愚弄する知恵を私たちにくれても、運命の女神は議論をやめさせるためにこの阿呆を遣わしたのでは

ないの。

Rosalind はなるほどと Celia の主張に頷き、Fortune が Nature より一枚上手だが、その Fortune を愚弄する Nature から授かった知恵を邪魔しに、Nature が造った阿呆を Fortune が寄越したと言う。

Indeed, there is Fortune too hard for Nature, when  
Fortune makes Nature's natural for the cutter-off of  
Nature's wit.

(I.ii.46-48)

ほんと。運命の女神は自然の女神の手に負えないね、  
運命の女神は自然のくれた知恵を邪魔するため  
自然の造った阿呆を寄こすんだから。

Celia は阿呆を寄こしたことも Fortune の仕事でなくて、Nature の仕事かもしれない、Nature が与えた知恵は Fortune のことを論ずるには足りない、知恵を磨くためにこの阿呆を遣わしたのだからと次のように言う。

Peradventure this is not Fortune's work neither,  
but Nature's, who perceiveth our natural wits too  
dull to reason of such goddesses, and hath sent this  
natural for our whetstone;

(I.ii.49-52)

もしかして、これも運命の仕事でなくて、  
自然の仕事かもしれない。自然は自然に与えられた知恵は  
女神たちを論ずるには鈍いと見て、  
私たちの知恵の砥石にとこの阿呆を寄こしたのですよ。

natural に「阿呆(an idiot)」の意味があるので、このような nature をもとにした洒落が続くのである。

Celia は木々にかけてある Orlando の Rosalind への恋歌を読む。

Therefore Heaven Nature charg'd  
That one body should be fill'd  
With all graces wide-enlarg'd.

## (III.ii.138-140)

それゆえ天は自然の女神に対し  
 ただ 1 人だけにこの世のすべての美で  
 満たすようにと命じた。

天が造化の自然に Rosalind という 1 人の女性に世のすべての美德を授けるように命じたと言うのである。そこで自然の女神は仕事に取り掛かり、Rosalind に様々な美質を与えたのである。

Nature presently distill'd  
 Helen's cheek, but not her heart,  
 Cleopatra's majesty,  
 Atalanta's better part,  
 Sad Lucretia's modesty.

## (III.ii.141-145)

自然の女神は直ちにヘレンの心でなく、  
 その頬とクレオパトラの威厳と、  
 アトランタのすぐれた点と、  
 悲しむルークリースの操を抽出した。

自分に恋している Silvius を拒否する、高慢ちきな Phebe は、その思い上がりをなじる男装の Rosalind をじっと見つめるので、Rosalind は当惑して、お前など「自然の女神が安売りに造った並みの者」“the ordinary / Of Nature's sale-work.” (III.v.41-43)だと言う。sale-work について Latham は Ready-made goods. ‘What nature makes for general sale and not according to order or pattern’ (Wright) と注を加えている<sup>11)</sup>。造化の自然が特別に詠えたのでなくて、安売り用に造ったものだというのである。

Silvius が自分の熱烈な思いを Corin に語っているのを聞いた Touchstone は自己の恋の経験を語り、恋に陥った者がやる狂気の振る舞いを次のように言う。

We that are true lovers run into strange  
 capers; but as all is mortal in nature, so is all nature

in love mortal in folly.

(II.iv.51-53)

われわれ真の恋をする者はおかしなまねをするものだが、  
自然界におけるすべてのものが豊かで、

終わりが定まっているように、恋をする者は皆大いに愚かなのだ。

mortal について Brissenden が (a)abundant (b)bound to die. Touchstone is saying that just as nature is plenteous (but everything natural must die) so it is natural that everyone in love is abundant in folly.と説明を施しているが<sup>12)</sup>、前者の nature は自然界の意味であり、後者は生き物、特に人間の意味で用いられている。

次の nature は natural feelings の意味で用いられており、Shakespeare には一般的な用法である。ライオンが襲おうとしていた兄を Orlando が眠ったまま置き去りにしたのかどうか Rosalind は尋ねると、Oliver は次のように答える。

Twice did he turn his back, and purpos'd so.  
But kindness, nobler ever than revenge,  
And nature, stronger than his just occasion,  
Made him give battle to the lioness,  
Who quickly fell before him; in which hurtling  
From miserable slumber I awak'd.

(IV.iii.127-132)

あれは2度背を向け、そうしようとなりました。

しかし復讐より高貴な、兄弟に対する情愛、

置き去りにして当然だという気持ちよりも、

強い肉親への情から彼はライオンと戦いました。

ライオンはすぐに倒れ、その騒ぎで、

私は惨めな眠りから眼を覚めました。

なお kindness について Hattaway は familial affection, natural inclination (OED sv 1, 3).と注を施している<sup>13)</sup>。nature に相当する英語固有の語が kind であり、

他の作品でも *unnatural* と *unkind* とが相互に補強し合う形で用いられているように、ここでも *kindness* と *nature* とが同じ仕方で使用されている。

次の *nature* は単なる性質、種類の意味で使用されている。Duke Frederick は Rosalind と Celia が宮廷を抜け出したことを知り、Orlando も同行しているらしいと聞き、Orlando の兄の Oliver を呼び出して詰問する。Oliver が Orlando を愛したことがないと弁明しようとする、Duke は次のように言って Oliver を追放する。

More villain thou. Well, push him out of doors,  
And let my officers of such a nature  
Make an extent upon his house and lands.

(III.i.15-17)

ますます悪党だ、貴様は。こいつを外にたたき出せ、  
しかるべき役人を遣わして、  
屋敷と土地を差し押さえよ。

*natural* の語は前に述べた「阿呆」の意味の他に形容詞として Schmidt で8) *native, given by birth, not adopted* の項に分類されている意味で2回使用されている。Oliver は Charles と試合させ、Orlando を亡き者にしようと考え、Orlando が「実の兄」“*natural brother*” (I.i.143)である自分にまで悪辣な陰謀を企む人間だと語るのである。

Le Beau は Orlando に Rosalind と Celia との仲は「実の姉妹の絆」“*the natural bond of sisters*” (I.ii.266)以上のものと言う。

*unnatural* は2回用いられている。弟に助けられて改心した Oliver はまだ名乗らずに、これまでの経緯を語ると、Celia は Orlando が Oliver のことを「この上なく人の道にもとった者」“*the most unnatural*” (IV.iii.122)と言っていたと口にする。Oliver は Orlando がそう言うのももっともで、自分もその男が“*unnatural*” (IV.iii.124)であることは知っていると言う。Brissenden は122行目の *unnatural* について *excessively cruel or wicked* (OED a. (sb.) 3)と説明し、更に124行目の *unnatural* については *devoid of natural feelings* (OED a. (sb.) ab). Oliver enriches the meaning of the word through his new self-knowledge.と

注を施している<sup>14)</sup>。これは Oliver が己の非を悟り、心から悔い改めた人間であることを証するものである。

Amiens は

Blow, blow, thou winter wind,  
Thou art not so unkind  
As man's ingratitude.

(II.vii.174-176)

吹けよ吹け、冬風よ、  
お前は恩知らずほどには  
心が冷たくはない。

と歌っているが、この unkind は注釈者たちが説明しているように、(a)cruel; (b)contrary to nature.の意味であり、unnatural である。unkind は unnatural に相当する英語固有の語なのである。

Nature と Fortune との対概念が繰り返し現れ、面白さをかもし出す。Bush は、喜劇においては本来の自己になることが自己の完全性の実現であり、original natural goodness (原初の自然の善)に戻ることであると言う<sup>15)</sup>。

Bush によれば、a natural gentleness を有する Orlando はアーデンの森で、自然についての教育が完成し、ひどい仕打ちを受けてきた Orlando がその兄のために命を賭してライオンと戦い倒したが、負傷したことを知り、the most unnatural であった Oliver は悔い改めて、nature を取り戻し、真の人間に戻る<sup>16)</sup>。

また劇の最後では、フレデリックが公爵領を返還し、公爵たちは喜んで宮廷に帰って行く。Bush は、最善の世界では artificial court と good Forest とは決して対立するものではない、事実と夢・理想とを同時に獲得することが可能であることを知るのであると述べている<sup>17)</sup>。

## IX

### 『十二夜』 *Twelfth Night*

この作品では nature の語は11回、natural が3回使用されている。Schmidt



の定義①の意味で使用されているのは3回である。

Cesario に変装して仕える Viola は Orsino の恋の使者として Olivia を訪ね、その美しい顔を見て、「これは造花の自然の巧みの技で赤と白を見事に混ぜ合わせて描いた美しさだ」“’Tis beauty truly blent, whose red and white / Nature’s own sweet and cunning had laid on.” (I.v.242-243) と言う。Knowlton は時に自然の女神は美を産み出す存在であると述べている<sup>18)</sup>。

同じように、造化の自然の意味で用いられている。Orsino は自分の思いを Olivia に伝えてほしいと Viola に対して次のように言う。

The parts that fortune hath bestow’d upon her,  
Tell her I hold as giddily as fortune:  
But ’tis that miracle and queen of gems  
That nature pranks her in, attracts my soul.

(II.iv.84-87)

運命の女神が与えた財産など運命の女神同様に  
当てにしていなと言ってくれ。  
私の心を引きつけるのは自然の女神が  
与えている類稀な美しさなのだ。

更にここでは、*As You Like It* におけるように、fortune (運命の女神) はこの世の事柄を司り、nature (自然の女神) は先天的な事柄を取り仕切る。fortune と nature との対概念で用いられている。

次の nature も造化の自然の意味に取っていいであろう。Maria が Aguecheek を貶すと、Sir Toby は彼が芸達者で、「あらゆる天賦の才」“all the good gifts / of nature” (I.iii.27-28) に恵まれていると反論する。Toby は生まれつきの才能の意味で言っているが、Oxford Shakespeare の編者はそのような芸は products of ‘nurture’ not gifts of nature. と言っている<sup>19)</sup>。それに対して Maria は「本当にいろいろの才能がおありで、この上ないお馬鹿さんね」“He hath indeed all, most natural,” (I.iii.29) とやり返す。natural について OED に one naturally deficient in intellect, a half-witted person. とあるとおり、Toby の nature に応じて、Maria は軽口をたたいているのである。

次の nature は *natura naturata* つまり、所産的自然、被造物の意味で使用されているのである。Viola は初め Olivia に仕えようとするが、船長の話聞いて、変装し、小姓として Orsino に仕える決心をし、船長にその決心を打ち明ける。

There is a fair behaviour in thee, Captain;  
And though that nature with a beauteous wall  
Doth oft close in pollution, yet of thee  
I will believe thou hast a mind that suits  
With this thy fair and outward character.

(I.ii.47-51)

船長さん、あなたは善良な方とお見受けします。  
自然は汚いものを美しい壁で  
隠していることもありますが、  
あなたはこの美しい外観に  
ふさわしい心をお持ちだと信じます。

次の nature は Schmidt が①の定義で、自然的な発生・成長を示す項目に入れているものである。

Pourquoi?と言われてもわからず、「語学」“the tongues” (I.iii.92)を勉強しておけばよかったと言う Aguecheek に Toby はそうしていれば、髪の毛も立派だったろうと言って煙に巻く。「そうすれば髪の毛がよくなっていたというの」“Why, would that have mended my hair?”と聞き返す。Toby は「あたりまえさ、自然にはカールしないからな」“Past question, for thou seest it will not curl by / nature.” (I.iii.96-97)と応える。Arden の編者が説明しているように、Toby は tongues に (1) languages, (2) curling-tongs の 2通りの意味があり、それに掛けて言っているのである<sup>20)</sup>。また arts (1.93)と nature を対照させているのである。また Cambridge の編者は arts (1.93)について Sir Toby thinks ‘the arts’ signifies something artificial as opposed to natural.と注を施しているように<sup>21)</sup>、nature vs. art も当時頻出するテーマである。

次の nature を Schmidt は② native sensation, innate and involuntary affection

of the heart and mind:の定義に含めている。この nature には自然の条理・摂理の意味に取るほうがよいように思われる。Sebastian は Olivia が自分を Viola と取り違えたことを知るが、「しかし回り道をしたが、それも自然の成り行きだったのです」“But nature to her bias drew in that.” (Vi.258)と言う。Donno は nature made you follow your own bent in being attracted to a disguised form of myself.と注を加えている<sup>22)</sup>。また各編者が言っているように、ボーリングの比喩である。

Viola を Sebastian と思い込み、自分を知らないと言う Viola の言葉を聞き、Antonio は「自然の中で汚いものは人の心にしかない。醜いと言われるのは人情にもとるものだけ」“In nature there’s no blemish but the mind: / None can be call’d deform’d but the unkind.” (III.iv.376-377)と罵る。この nature は造化の自然が造ったもの、被造物である。また unkind については Arden の編者は (1) unnatural, not according to nature (‘kind’), (2) cruel と注を付している<sup>23)</sup>。また Oxford の編者は (1) cruel (b) unnatural (i.e. those who are *deformed* by nature)と説明しているように<sup>24)</sup>、unnatural と同じ意味で用いられている。

次の nature は name と対照させて、性格、人柄の意味で用いられている。遭難した船長と Viola は Illyria に流れ着く。この近くで生まれ育った船長に Viola はこの国を誰が治めているのか尋ねる。船長は「家柄も人柄も立派な公爵です」“A noble duke, in nature as in name.” (I.ii.25)と応える。

Viola は Orsino の熱い思いを Olivia に伝えるが、Olivia は Orsino が人柄もよいし、評判もよく、学問もあり、また「生来のお姿がご立派」“And in dimension, and the shape of nature, / A gracious person.” (I.v.265-266)であることも知っているが愛せないと言う。Oxford の編者は dimension ... shape of nature について Both mean ‘bodily form’.と注をしている<sup>25)</sup>。nature は body (身体)の意味で使用されているのである。

次の nature は種類を意味する。Antonio は海戦で公爵の艦隊と一戦交えて、有名になり、見つければ逮捕される恐れがあって、危険な Illyria では Sebastian に同行できないと言う。Sebastian が大勢の人を殺したのでしようと言うので、Antonio は「罪はそれほど血なまぐさいものではありません」“Th’ offence is

not of such a bloody nature,” (III.iii.30)と弁解する。

次の nature も同様である。Toby は Olivia と別れた Viola に「あなたは彼にどのような侮辱を与えたか知らない」“Of / what nature the wrongs are thou hast done him, / I know not:” (III.iv.222-224)と話しかける。

次に natural を見てみよう。大騒ぎしているのを Maria に窘められるが、Toby は洒落で応じる。その阿呆ぶりに Clown が感心すると、Aguecheek は「あの人は僕より巧みにやるが、僕はより自然にやるよ」“he does it with a better grace, but I / do it more natural.” (II.iii.82-83)と言う。Arden の編者は natural について naturally; with an unconscious ambiguity (natural=idiot)と注を加えているように<sup>26)</sup>、grace と nature を対照させると共に natural に idiot の意味があって滑稽味をだしているのである。

次の natural は artificial と対照的に用いられている。Sebastian と Viola が瓜二つであるのを見て、Duke は

One face, one voice, one habit, and two persons!

A natural perspective, that is, and is not!

(Vi.214-215)

1つの顔、1つの声、1つの服、そして2人だ。

自然が作った魔法の鏡、あって、しかもない。

と驚きの声を上げる。Arden の編者は A natural perspective について The Duke refers to an artificial ‘perspective’ or distorting glass, which, by optical illusion, can make one picture or object appear like two or more; the same effect, he says here, is now produced by nature, without the operation of art (i.e. of a ‘glass’).と説明している<sup>27)</sup>。perspective に関して、*OED* は A picture or figure constructed so as to produce some fantastic effect; e.g. appearing distorted or confused except from one particular point of view, or presenting totally different aspects from different points. *Obs.* と定義し、*Richard II* と *Twelfth Night* のこの箇所を引用している。A natural perspective は人が描いたものではない、天然の絡繰絵(からくりえ)とでも訳するのがいいのだろうか。

Bush は、“So comes it, lady, you have been mistook. / But nature to her bias

drew in that.”を引き合いに出して、女性たちの決意は変わらない、また女性たちの間違いも自然の女神の優しい、家族を築かせる計画の一部であると言う<sup>28)</sup>。

また Bush は次のように喜劇を締め括っている。Shakespeare の喜劇は事実が夢に変わるときに終わる。恋人たちが舞台を去るとき、natural sadness が示唆され、Feste や Robin Goodfellow が残っている。Jaques は他の人間が素晴らしいと考える世界から身を引き、natural life の目的が結婚であるという考えに同意できない。Bottom や Dogberry や Jaques、Sir Andrew Aguecheek たちは社会の進行を変えることはできない。彼らはそこから身を引く。そのことが我々の密かな愛情と賞賛を勝ち得るのである。Fool は、喜劇の夢で実現される完全な瞬間が単に見せかけであるということの思い出させる存在である<sup>29)</sup>。喜劇における nature の使用頻度数は後期の円熟した作品になるにしたがって増加し、その意味がテーマと結びついている。

---

1) T. S. Dorsch, ed., *The Comedy of Errors*, The New Cambridge Shakespeare, Cambridge University Press, 1988, note.

2) Geoffrey Bush, *Shakespeare and the Natural Condition*, Harvard University Press, 1956, p.76.

3) Edgar C. Knowlton, “Nature and Shakespeare”, PMLA., LI, p.720.

4) H. R. Woudhuysen, *Love’s Labour’s Lost*, The Arden Shakespeare, third series, Thomas Nelson and Sons Ltd., 1998, note.

5) Harold F. Brooks, ed., *A Midsummer Night’s Dream*, The Arden Shakespeare, Methuen & Co. Ltd., 1979, note.

6) R. A. Foakes, ed., *A Midsummer Night’s Dream*, The New Cambridge Shakespeare, Cambridge U. P., 1984, note.

7) Geoffrey Bush, *op. cit.*, p.26.

8) Michael Hattaway, ed., *As You Like It*, The New Cambridge Shakespeare, Cambridge U. P., 2000, note.

9) Alan Brissenden, ed., *As You Like It*, The Oxford Shakespeare, Cambridge U. P., 1993, note.

10) Agnes Latham, ed., *As You Like It*, The Arden Shakespeare, Methuen & Co. Ltd., 1975, note.

11) Agnes Latham, *ibid.*, note.

第一部 各作品におけるnatureの意味

- 12) Alan Brissenden, *op. cit.*, note.
- 13) Michael Hattaway, *op. cit.*, note.
- 14) Alan Brissenden, *op. cit.*, note.
- 15) Geoffrey Bush, *op.cit.*, p27.
- 16) Geoffrey Bush, *ibid.*, pp.27-28.
- 17) Geoffrey Bush, *ibid.*, p.29.
- 18) Edgar. C. Knowlton, *op. cit.*, p.720.
- 19) Roger Warren and Stanley Wells, ed., *Twelfth Night*, The Oxford Shakespeare, Oxford University Press, 1994, note.
- 20) J. M. Lothian and T. W. Craik, ed., *Twelfth Night*, The Arden Shakespeare, Methuen & Co. Ltd., 1975, note.
- 21) Elizabeth Story Donno, ed., *Twelfth Night*, The New Cambridge Shakespeare, Cambridge University Press, 1985, note.
- 22) Elizabeth Story Donno, *ibid.*, note.
- 23) J. M. Lothian and T. W. Craik, *op. cit.*, note.
- 24) Roger Warren and Stanley Wells, *op. cit.*, note.
- 25) Roger Warren and Stanley Wells, *ibid.*, note.
- 26) J. M. Lothian and T. W. Craik, *op. cit.*, note.
- 27) J. M. Lothian and T. W. Craik, *ibid.*, note.
- 28) Geoffrey Bush, *op. cit.*, p.26.
- 29) Geoffrey Bush, *ibid.*, pp.29-31.

### 第三章 問題劇

#### I

##### 『トロイラスとクレシダ』 *Troilus and Cressida*

この作品では nature の語の使用は15回であり、派生語の使用はない。まず Schmidt の定義①の意味から見てみよう。

召使の Alexander は Ajax について Cressida に次のように評する。

He is as valiant as the lion,  
churlish as the bear, slow as the elephant; a man  
into whom nature hath so crowded humours that  
his valour is crushed into folly, his folly sauced  
with discretion.

(I.ii.20-24)

あの男はライオンのように勇敢で、  
熊のように粗暴で、象のようにのろい。  
造化の自然がいろんな気質を詰め込んだので、  
勇気も蛮勇になり、馬鹿な行いにも  
分別が混じっている男です。

次の nature も造化の自然の意味である。Troilus は、Cressida の心変わりを恐れるのは多くのすぐれたギリシャの青年がいて、彼等が「生来の才能に恵まれて」「with gift of nature」(IV.iv.76)いるからだと弁解する。

Ulysses は、Ajax に対して「あなたの生来の才能」「thy parts of nature」(II.iii.242)について語る。

次の3つの nature は Schmidt が①と定義し、更に人間の制度や性向に対立するものにしてある項目に属する。自然の理法の意味である。

Helen を守ることは名誉に関わる問題と主張する Troilus に Hector は「自然はすべてのものを正当な所有者に返すことを要求する」「Nature craves / All dues be render'd to their owners:」(II.ii.174-175)したがって、夫ほど妻の正当

な所有者はいないのだから、Helen を返すべきだというのである。

続けて Hector は「この自然法」“this law / Of nature” (II.ii.177-178) が破られるようなことがあれば、それに備えて国法があると言う。

Hector は再び自然法を持ち出して、己の主張を補強する。

If Helen then be wife to Sparta's king,  
As it is known she is, these moral laws  
Of nature and of nations speak aloud  
To have her back return'd:

(II.ii.184-187)

そうだとすれば、ヘレンがスパルタ王の妻であることは、周知のことであるから、この自然法も、国家の法も彼女を返すように声高に叫んでいる。

また次の nature も Schmidt は同じ項目に含めている。Ulysses は Achilles の功名心、嫉妬心を喚起しようと弁舌を揮うなかで、「同じ気質で世界の人間は親族なのです」“One touch of nature makes the whole world kin—” (III.iii.175) と言う。この nature について Bevington は natural human weakness — here, the human propensity to praise new-born gauds or frivolous novelties (177); と注を施している<sup>1)</sup>。単なる生まれつきの性質の意味である。

次の nature は大自然を指すと思われる。偶然会ったということにして欲しいと Troilus に言われて、Aeneas は「いいですとも。自然の秘密も寡黙という点で私以上ではありますまい」“Good, good, my lord: the secrets of nature / Have not more gift in taciturnity.” (IV.ii.74-75) と言う。nature は Folio であるが、the secrets of nature について Bevington は Nature is proverbially slow to reveal her secrets. と注している<sup>2)</sup>。

次の nature も大自然の意味に解することができよう。Ulysses は Ajax に対して「大自然よ、実際は価値があるのに、価値がないと思われている何と不思議なものがあることよ」“Nature, what things there are / Most abject in regard and dear in use!” (III.iii.127-128) と言う。

次の2つの nature は Schmidt の定義1) で、自然的な発生・成長を示すも



のの項目に該当する。Achilles はやって来た Thersites に向かって「このかさぶたの自然の吹き出もの」“Thou crusty botch of nature” (Vi.5) と言う。botch は Theobald の改訂であり、FQ は batch である。Bevington は batch を採用し、batch of nature について quantity or lot of a thoroughly depraved natural condition. と説明している<sup>3)</sup>。

毒づく Patroclus に対して、Thersites は「このようなトンボみたいな、造化の自然の産み出したちびどもに悩まされて、この世はあわれなものだ」“Ah, how the poor world is pestered / with such water-flies, diminutives of nature!” (Vi.32-33) と言って、毒づき返す。nature が否定的な意味で用いられている。

次の nature は Schmidt の定義 4) individual constitution, personal character に該当する。Ulysses は「我々の能力、才能、気性、容姿」“All our abilities, gifts, natures, shapes,” (I.iii.179) を Achilles と Patroclus が笑いの種にしていると言い、ギリシャ方の秩序の乱れの張本人が Achilles であると強調する。

次の nature は Schmidt の定義 3) 人間の身体的及び精神的気質、人間の意味と解することができよう。Calchas は自己のことを「私という人間」“my nature” (III.iii.10) と言う。

以下の nature は単に性質、種類の意味で使用されている。Ulysses がトロイを攻略できない理由を開陳し、Nestor はギリシャ軍が冒されている熱病を明らかにしたと主張すると、Agamemnon が「病気の正体はわかった、ユリシーズ、その治療法はどうすればよいのかな」“The nature of the sickness found, Ulysses, / What is the remedy?” (I.iii.140-141) と問う。

Cressida の心変わりを目の当たりにして、Troilus は己の心の煩悶を「この不思議な(性質の)戦い」“a fight / Of this strange nature;” (VII.146-147) と呼ぶ。

Bush はこの作品の2つの主題は史劇と喜劇の主題つまり戦争と恋であるが、勝利も結婚もなくして終わり、Ulysses の位階論は、その主張が rules of nature は社会に秩序をもたらす行動を教えることであるが、秩序が如何ほど失われ、無視されているかを知らしめ、社会が目指す秩序の夢・理想でなくて、如何ほどギリシャ軍がその夢を失っているかの発見であると言い、更に

トロイ方も同じで、Hector は the moral laws of nature and nations をまた the laws of nature and society を主張するが、それを無視することに同意すると述べている<sup>4)</sup>。

また問題劇は明確なテーマとして経験の2つの側面、理想と現実の矛盾を受け入れ、Ulysses も Hector も the fact of common natural weakness を知り、直面させられる。また最も劇的瞬間において現実の世界とあるべき世界の双方から呼びかけられる両状況下に置かれるのを知り、Troilus が “this is, and is not, Cressid!” という叫び声をあげると Bush は言うのである<sup>5)</sup>。

## II

### 『終りよければすべてよし』 *All's Well That Ends Well*

この作品においては、nature の頻度は非常に高く、26回であり、natural は1回である。まず Schmidt の定義①の意味の nature から見てみよう。

Helena は身分の違う Bertram への恋の力が理解できなくて、戸惑うが、Bertram と自分との大きな身分の溝を nature が埋めて、恋の望みを叶えてくれると信じて「運命におけるどのような開きも造化の自然は同類同士のように手を結ばせ、親しいもの同士のようにキスをさせてくださる」“The mightiest space in fortune nature brings / To join like likes, and kiss like native things.” (I.i.218-219) と言う。ここには fortune つまり後天的のもの、社会的な身分と、nature 先天的なもの、性格、性質との対立概念が見られる。

国王は Bertram を見るなり、父親そっくりで、その端麗な容姿に気前のよい造化の自然が丹精込めて作り出している、容姿だけでなく、父の立派な気性も受け継ぐようにと次のように言う。

Youth, thou bear'st thy father's face;

Frank nature, rather curious than in haste,

Hath well composed thee. Thy father's moral parts

Mayst thou inherit too!

(I.ii.19-23)

若者よ、君は父親そっくりの顔だ。

心の広い造化の自然が急がずに、  
 丹念に君を拵えたのだ。父親の徳性も  
 受け継ぎますように！

人の端正な容貌は造化の自然の気前良さによると国王は考えているのである。  
 Leonato は一人娘の Hero のことで、*frugal Nature* (Ado IV.i.130) と言っている。

Helena は国王の病気を治したその褒美に Bertram との結婚を願い出る。国王は Bertram に Helena との結婚を命ずるが、Bertram は Helena が医者娘という身分の低いことを理由に拒む。王は社会的地位よりも美徳が重要であり、Helena は美徳そのものであって、honour のように身分によって伝わるものでなく、彼女の賢明さ、美貌は天性のもの、それが honour となると説く。

She is young, wise, fair,  
 In these to nature she's immediate heir;  
 And these breed honour.

(II.iii.131-132)

その娘は若くて、賢く、美しい、  
 これらを造化の自然からじかに受け継いだものであり、  
 これらが名誉を生み出すのだ。

Hunter は *immediate heir* の注として、*To be immediate heir is to inherit without any intervening transmitter: thus she inherits beauty immediately from nature, but honour is transmitted by ancestors.* (Johnson) を引用している<sup>6)</sup>。

Schmidt は次の *nature* を定義①で、自然的な発生・成長を示すという項目に入れている。Countess は Helen に対して、私はあなたの母と言う言葉に Helen がいいえ、ご主人様ですと答えると、次のように言うのである。

'Tis often seen  
 Adoption strives with nature, and choice breeds  
 A native slip to us from foreign seeds.

(I.iii.139-141)

養子への愛情は実子への愛情と争い、  
 外来種から選んで接木すると本来種のように

なることはよくみられることです。

Snyder は Adoption ... seeds.について Affections toward an adopted child rival those toward natural offspring, and the slip selected for grafting on our own stock becomes part of that stock, however alien in origin.と説明を施している<sup>7)</sup>。I.i. 194の native も I.iii.118の native も natural の意味である。nature の語との関連でよく用いられるのである。

Bertram の過ちは Parolles のせいであるという Lafew の言葉に、伯爵夫人も残念がり、Helena の死について、「そのために造化の自然が造ったことで称賛された最も立派な娘を死なせてしまいました」“it was the death of the most/ virtuous gentlewoman that ever nature had praise for creating.” (IV.v.7-8) と言う。Helena は産んだことで造化の自然が絶賛されたほどの立派な女性なのである。Lafew も伯爵夫人の言葉が真実であることを強調する。

次の nature は自然界の意で、あとの2つは自然の理法・条理である。Parolles は Helena と virginity 論争を繰り広げる際、nature を持ち出して、「処女を保ち続けるのは自然国では得策でない」“It is not poitic in the commonwealth of / nature to preserve virginity.” (I.i.111-112) し、「それは自然の法則に反する」“’tis against the rule of nature.” (I.i.133) ことであり、また処女を守り通すとは自殺行為であって、「自然の摂理にもとる自暴自棄の犯罪者」“a desperate offendress against / nature.” (I.i.138-9) として辻に埋葬されるべきだと言う。

次は人間の制度や性向に対立するものとされているものである。執事が Helena の Bertram への恋に悩んでいることを伝えると、それとはなしにそのことに気付いた伯爵夫人は、われわれは nature の子なのだから、これは当たり前のものであり、nature の真理を表すものと言い、Helena への愛情は肉親の愛情に劣るものではないと次のように言っている。

If ever we are nature’s, these are ours. This thorn  
Doth to our rose of youth rightly belong;  
Our blood to us, this to our blood is born.  
It is the show and seal of nature’s truth,  
Where love’s strong passion is impressed in youth.

## (I.iii.124-128)

私たちは自然の子であるから、私たちはだれでもこうだ。  
この棘は青春の薔薇につきものだ。血は生まれながらに  
そなわっているように、この恋も生まれながらに血に  
そなわっている。恋の激しい熱情は青春に刻印されるとき、  
これは自然の真理を表す印である。

Schmidt は両方とも人間の制度や性向に対立するものの項に含めている。自然の理法の意味である。次の *nature* も同じ意味である。しかし倫理的な意味合いはない。

Lafew に馬を頼む、いたずらは止すんだぞと言われ、Clown は言う。

If I put any tricks upon'em, sir, they shall be jades'  
tricks, which are their own right by the law of  
*nature*.

## (IV.v.57-59)

馬にいたずらをするとすれば、そいつは駄馬の悪癖ですが、  
それは自然の法則により仕方のないことです。

次に *human life* の意味の *nature* を見てみよう。伯爵夫人は Helena の父が非常に誠実な人であったし、それに劣らず、医術にすぐれていて、その医術を誠実な人柄の思うまま揮えたら、*nature* (人の命) をも不死のものにしたでしょうと言う。

...whose skill was almost as great as his honesty;  
had it stretched so far, would have made *nature* immortal, and death  
should have play for lack of work.

## (I. i. 14-16)

この娘の父親の医者としての腕前はその誠実さに劣らず  
すぐれておりました。その腕が十分発揮されれば、  
人は死ななくなり、死は仕事がなくて手持ち無沙汰になったこと  
でしょう。

王は重病で、「生命力と病がわしの身体の中で気ままに戦っている」“...,

nature and sickness/ Debate it at their leisure.” (I.ii.74-75)と言う。この nature も human life の意味で言っている。

次の nature も同様に命を意味する。正体を暴露されて、一兵士から縛り首だぞと脅されると、Parolles は必死に助命を嘆願する。

My life, sir, in any case! Not that I am afraid to die,  
But that, offences being many, I would repent  
Out the remainder of nature.

(IV.iii.233-235)

どうか命だけは助けてください。

死ぬのが怖いからではなくて、私の犯した罪が多いので、  
余生を懺悔して生きたいからです。

次の nature は Schmidt の定義③the physical and moral constitution of man:に該当する用法である。Helena が父の処方箋をもっており、国王の病の治療を申し出ると、国王は、医術では治癒不能の nature を救うことはできないと最もすぐれた医師団も結論を出している状況では治癒など不可能だと Helena に告げる。

The congregated college have concluded  
That labouring art can never ransom nature  
From her inaidable estate;

(II.i.115-118)

医師会全体が人間の技術では人間を  
その治癒不能からは救えないと  
結論を出している。

ここでは nature はある体質の人間を意味し、更に art との対概念で用いられている。

次も同様の用法である。Helena は Bertram がイタリア内戦に加わって、生命の危険にさらしているのは自分のせいだと考え、そのくらいならこの世の不幸がみな自己に降りかかった方がよいと語る。

...better 'twere

That all the miseries which nature owes  
Were mine at once.

(III.ii.118-120)

人間のあらゆる不幸を  
1人で背負い込むほうがました。

次の6つの *nature* は Schmidt の定義④*individual constitution, personal character*:に該当する。

Lafew は Bertram に Parolles について「私はあのような連中を飼っていたことがあるので、その性根は知っております」“I have kept of them tame, and know / Their natures.” (II.v.45-46)と云う。

Russell Fraser が注を施しているように、イタリアの内戦に関して距離を置くフランス王は参戦するフランス貴族と対照的であり、参戦する貴族たちは安逸に飽きてやってきたのである<sup>8)</sup>。その者たちは「我々のように気性の若い者」“the younger of our nature” (III.i.17)とされているのである。The Oxford Shakespeare は、Rowe の改訂した *nation* を採用している。

国王に命じられ、あるいは脅迫されて、Bertram は Helena としつぶ式は挙げるが、置き手紙をし、イタリア内戦に加わり、危険に身をさらす。Bertram に同行する人物が Parolles だと知って伯爵夫人は、Helena のような気立てのよい娘を拒否するような息子にしたのはその Parolles だと信じ、次のように言う。

A very tainted fellow, and full of wickedness.  
My son corrupts a well-derived nature  
With his inducement.

(III.ii.87-89)

大変墮落した、邪悪な男です。  
私の息子はあの男に唆されて気立てのいい性格を  
墮落させたのです。

父の容貌と気性とを受け継いでいる Bertram の性格は a well-derived nature のはずであり、軽はずみな行動をするには理由がある筈で、それが Parolles

なのである。

第4幕第3場で、Bertram が母の手紙を読んで、別人のようになり、深く心に感ずる様子が語られる。

I have delivered it an hour since. There is  
Something in't that stings his nature; for on the  
reading it he changed almost into another man.

(IV.iii.2-4)

1時間前に渡した。そこには彼の胸を刺すようなことが  
書いてあるようだ。それを読むと  
彼はほとんど別人のようになったからね。

この nature は性質、性格の意味であり、伯爵夫人のいう well-derived nature であるに違いないであろう。しかし今の段階では Diana を誘惑しようとしているのである。それを知る First Lord は「神が我々の謀反の気を起こすのを遅らせてくださいますよう。我々がこのままだと、どのようなものになることか」「Now God delay our rebellion! As we are ourselves, what / Things are we!” (IV.iii.17-18) と言う。神の加護がなければ人間は何をしてかすか分からないというのである。All's Well には人間に対する不信感というものがある。

First Lord によれば、Helena の優しさが彼女の命を奪ったのである。First Lord はそのことを次のように語っている。

...; and there  
residing, the tenderness of her nature became as a  
prey to her grief;

(IV.iii.48-50)

あの方はそこに留まり、あの方のやさしい性質が  
悲しみの餌食となってしまわれた。

nature は性質、性格の意味で用いられている。

証人として Parolles の名が挙げると、Bertram は、「真実を口にするだけでも、気分が悪くなる性格の」「Whose nature sickens but to speak a truth.” (V.iii.206)男ですと言う。



次の nature は kind, sort の意味である。フローレンスの貴族たちは Parolles を計略にかけて、信じている Bertram の前で正体を暴露させる。Bertram は「でもだからといってありがたいと思わないよ。言っていることを思えばね」  
 “But I con him no thanks for’t, in the nature he / delivers it.” (IV.iii.148-149) と  
 言う。

国王は Bertram について「彼の大罪が何であったか忘れてしまった」“The nature of his great offence is dead,” (V.III.23) と言って咎めるのをやめる。

次は natural である。第5幕第3場で伯爵夫人に向かって、Helena を失ったことは大いなる損失であるが、Bertram はそのことが分かっていないという王の言葉に、伯爵夫人は

And I beseech your majesty to make it  
 Natural rebellion done i’th’blade of youth,  
 When oil and fire, too strong for reason’s force,  
 O’erbears it, and burns on.

(V.iii.5-8)

陛下それは若葉に生じた自然の謀反と  
 お考えください、油と火は理性の力には強すぎ、  
 理性を圧倒して燃え盛るのです。

と言って、未熟な若さがなしたことで、許してくれるよう願う。Bertram の行為はまさしく natural rebellion である。Bertram は未熟を脱し、成熟し、natural rebellion を克服することが Helena の真価を知るに至る道である。

Bush が言うように、この世界も nature が要求するのは愛と社会の永続であり、したがって Parolles は Helena に “the common wealth of nature” においては処女でいることは得策でなく、処女は “against nature” であり、“should be buried in highways out of sanctified limit, as a desperate offendress against nature” とする。しかし nature は病んでいて、“Nature and sickness / Debate it at their leisure.” の状態であり、王の病を human art は治せない。Helena は結婚を望んでいるが、Bertram は “a well-derived nature” を墮落させており、“Natural rebellion” の罪を犯している。Helena は王の natural sickness と

Bertram's natural rebellion を治さなければならないのである。Helena は “great'st grace lending grace” によって王の natural sickness を治し、Helena と Bertram との認知の瞬間に、Bertram は pardon と叫ぶ。ここで sickened and rebellious nature が回復し、結婚に至るのである<sup>9)</sup>。

### III

#### 『尺には尺を』 *Measure for Measure*

この作品では nature が12回、natural が3回使用されている。その内訳は、造化の自然の意味が1回、Schmidt の定義①で、art に対立するものとして1回、定義③the physical and moral constitution of man. に該当するのが2回、定義④個人の性格1回、natural feelings が1回、性質が4回である。

これから Angelo に施政を任せるにあたって、Duke は、有している徳を活用しなければならない理由について、自然の女神を債権者に見立てて、次のように言う。

...nor nature never lends

The smallest scruple of her excellence  
But, like a thrifty goddess, she determines  
Herself the glory of a creditor,  
Both thanks and use.

(I.i.36-40)

自然の女神はそのすぐれた能力を  
わずかでも人間に貸すのは、計算高い女神らしく、  
債権者の栄光として感謝と利息とを  
取り立てることに決めているからなのだ。

定義①で art に対立する用法について見てみよう。自ら謹厳実直を認める Angelo が清楚な Isabella に欲情を意識して驚く。

Never could the strumpet  
With all her double vigour, art and nature  
Once stir my temper: but this virtuous maid

Subdues me quite.

(II.ii.183-186)

娼婦なら生まれつきの魅力と手管の両の力をもって  
迫ってきても心を動かされることはなかった。  
しかしこの貞淑な乙女には参ってしまった。

Lever は the artifice of the courtesan combined with the natural sex. と注釈を付している<sup>10)</sup>。また Bawcutt も her skill as a courtesan combined with her inherent sexuality と注を施している<sup>11)</sup>。ここには art と nature の対照的な使い方がなされている。

ある体質の人間の意の nature を見たい。Claudio は、獄へ引かれていく途中で会った友人の Lucio から理由を問われて次のように答える。

Our natures do pursue,

Like rats that ravin down their proper bane,  
A thirsty evil; and when we drink, we die.

(I.ii.120-122)

人間の性として我々は毒を  
食らうねずみのように、悪に飢えて、  
飲んで命を亡くすのだ。

この nature は Schmidt では③the physical and moral constitution of man:の項目に分類されている。「人の身体的及び精神的な性質、生まれながら備わった体質の人間」の意味である。これはアウガスティヌスの nature でもある。

次の nature も同様である。操と引き換えに命を助けると言う Isabella の言葉に Claudio は訴える。

The weariest and most loathed worldly life  
That age, ache, penury and imprisonment  
Can lay on nature is a paradise  
To what we fear of death.

(III.i.128-131)

老齡、痛み、窮乏や投獄が

身体に加えるどんな辛い、  
厭わしいこの世の生活も  
死の恐ろしさに比べると極楽だ。

Bawcuttはこのnatureについて、the vital or physical powers of man (OED 6).  
の意味に解している<sup>12)</sup>。

次のnatureはSchmidtの定義②自然の情愛に該当する。生に執着する  
Claudioは操を犠牲にしても助けて欲しいとIsabellaに訴える。

What sin you do to save a brother's life,  
Nature dispenses with the deed so far  
That it becomes a virtue.

(III.i.132-134)

兄の命を救うためにどのような罪を犯そうと、  
肉親への情愛故に、それは許され、  
いや美德ともなる。

Shakespeareに頻出するnatural feelingの意味と解してよいであろう。Bawcutt  
はnatural feeling or affection(OED 9e)或いは裁判官としてのthe personified  
figure of nature(11b)と注を施している<sup>13)</sup>。

次の3つのnatureはSchmidtの定義④individual constitution, personal  
characterに該当する。個人の体質、性格である。Dukeは留守の間政務を任  
せるAngeloについて「国民の性質」“The nature of our people”(I.i.9)を誰よ  
りも知っていると言う。

Angeloに統治を委任した理由について修道士のThomasに対して、Duke  
は次のように語る。

Therefore indeed, my father,  
I have on Angelo impos'd the office;  
Who may in th'ambush of my name strike home,  
And yet my nature never in the fight  
To do in slander.

(I.iii.39-43)

それ故に、神父、その役目をアンジェローに負わせたのだ。  
 そうすればそのものは私の名に隠れて思い切ったことができ、  
 私の人格は、直接関与しないので非難を受けずにすむ。

Lever は “my name ... my nature” について *ducal authority as contrasted with the Duke in person.* と注を施している<sup>14)</sup>。

Claudio と Isabella のやり取りを立ち聞きしていた Duke は次のように言う。

Angelo had never the purpose  
 To corrupt her, only he hath made an assay of her  
 Virtue, to practice his judgement with the disposition  
 Of natures.

(III.i.160-163)

アンジェローに妹さんを汚そうという意図など  
 決してありません。ただ彼は人間の性向を  
 見定めるために彼女の操を試したまでですよ。

Bawcutt は *practise...natures* に関して、*exercise his skill as a judge of human nature.* と注を付している<sup>15)</sup>。

次の *nature* は命の意味である。Angelo は Isabella に次のように言う。

It were as good  
 To pardon him that hath from nature stolen  
 A man already made, as to remit  
 Their saucy sweetness that do coin heaven's image  
 In stamps that are forbid.

(II.iv.42-46)

禁じられた鑄型で  
 神の姿に似せて造る邪淫を許すことは  
 既に造られた人間の命を盗むものを  
 許すのと同じだ。

Gibbons は *pardon...made* について、*pardon a man who has killed another.* と注を付している<sup>16)</sup>。

以下の nature は性質を意味する。Escalus は Duke から委任された権限を把握しあぐねて Angelo に「ある権限を与えられていますが、それがどの程度の権限であり、どういう性格のものかまだ了解していません」“A power I have, but of what strength and nature / I am not yet instructed.” (I.i.79-80) と言う。

Duke は修道士に成りすまして、牢獄を訪ね、典獄に「その罪状」“The nature of their crimes” (II.iii.7) を教えてほしいという。

Isabella の言葉が理解できずに Claudio は「どのような刑」“But in what nature?” (III.i.69) なのかを問う。

natural について見てみよう。Lucio は Angelo の人物像について Isabella に次のように語る。

...a man whose blood

Is very snow-broth; one who never feels  
The wanton stings and motions of the sense;  
But doth rebate and blunt his natural edge  
With profits of the mind, study and fast.

(I.iv.55-61)

血が溶けた雪のように冷たい人物であり、  
劣情や性欲の衝動を感じたことがなく、  
精神修養、学問、断食によって人間の  
自然な欲情を鈍らせてしまった人物。

Schmidt はこの natural を、定義③subject to, or caused by, the laws of nature.の項に含めている。自然の条理にかなったという意味である。

Isabella は Angelo に訴える。

If it confess

A natural guiltiness, such as is his,  
Let it not sound a thought upon your tongue  
Against my brother's life.

(II.ii.139-142)

兄の罪のような、人間に自然な罪を  
心の内に気付いたなら、  
兄の命を奪うという考えを言葉にしないでください。

この *natural* も同じ意味である。

Duke は Mariana が遭難のために兄を失った事情を Isabella に語るのである。

There she lost a noble and renowned  
Brother, in his love toward her ever most  
Kind and natural;...

(III.i.219-221)

そのためにその女性は兄らしい愛情を  
こよなく自分に注いでくれた高潔で名声の高い兄を  
失ってしまったのだ。

*natural* について Bawcutt は *full of brotherly affection* と注を施している<sup>17)</sup>。また *kind* と共に用いられて、相互に意味を補強するのである。

Bush は *nature* の観点から次のように言っている。公爵は、*nature* は変わらぬ道徳律と説くが、*Natural man* は神の恩寵がなければ、天使も涙を流す行為をやってのける。人間は *natural guiltiness* を有し、*our natures* は悪に導く。公爵の教訓は中世の *De contemptu mundi* と同様に、*worthlessness of human nature and natural life* である。喜劇と史劇の目は、*Christian history of nature* における、神が造ったものを見て、それを善しとされた、その最初の出来事、創造を憧憬する。しかし Adam と Eve の謀反があり、キリスト教自然史における第二の事件、*Fall* が起こる。それが天地の *the whole order of nature* を墮落させたのである。この作品の結末は *natural perfection* の瞬間ではなくて、なんとか妥協しなければならない *a natural weakness of blood and desire* の認識である。そして史劇や喜劇は *natural condition* の両面、*fact of natural incompleteness* と *dream of natural order* において、その *fact* が変貌し、その *dream* が実現する結婚あるいは勝利の瞬間を目指す。*All's Well* や *Measure for Measure* では *natural life* のこの両面の距離は拡大し、人物は *natural incompleteness* と *dream of grace* の間をさ迷うのである<sup>18)</sup>。

- 1) David Bevington, ed., *Troilus and Cressida*, The Arden Shakespeare, third series, Thomas Nelson and Sons Ltd., 1998, note.
- 2) David Bevington, *ibid.*, note.
- 3) David Bevington, *ibid.*, note.
- 4) Geoffrey Bush, *Shakespeare and the Natural Condition*, Harvard University Press, 1956, pp.36-7.
- 5) Geoffrey Bush, *ibid.*, p.40.
- 6) G. K. Hunter, ed., *Troilus and Cressida*, The Arden Shakespeare, Methuen & Co. Ltd., 1962, note.
- 7) Susan Snyder, ed., *All's Well That Ends Well*, The Oxford Shakespeare, Oxford University Press, 1993, note.
- 8) Russell Fraser, ed., *All's Well That Ends Well*, The New Cambridge Shakespeare, Cambridge University Press, 1985, note.
- 9) Geoffrey Bush, *op. cit.*, pp.40-41, pp.47-48.
- 10) J. W. Lever, ed., *Measure for Measure*, The Arden Shakespeare, Methuen & Co. Ltd., 1965, note.
- 11) N. W. Bawcutt, ed., *Measure for Measure*, The Oxford Shakespeare, Oxford University Press, 1991, note.
- 12) N. W. Bawcutt, *ibid.*, note.
- 13) N. W. Bawcutt, *ibid.*, note.
- 14) J. W. Lever, *op. cit.*, note.
- 15) N. W. Bawcutt, *op. cit.*, note.
- 16) Brian Gibbons, ed., *Measure for Measure*, The New Cambridge Shakespeare, Cambridge University Press, 1991, note.
- 17) N. W. Bawcutt, *op. cit.*, note.
- 18) Geoffrey Bush, *op. cit.*, pp.38-39, p.43, p.49.



## 第四章 悲劇

### I

『ロミオとジュリエット』 *Romeo and Juliet*

この作品では *nature* の語は6回、*natural* が2回、*unnatural* が1回用いられている。Romeo が Tybolt を殺害し、追放の刑を受けたと聞かされ、Juliet は Romeo を呪い、造化の自然に向かって言う。

O nature what hadst thou to do in hell  
When thou didst bower the spirit of a fiend  
In mortal paradise of such sweet flesh?

III.ii.80-82)

おお、造化の自然よ、あなたはこの世の楽園のような美しい身体に悪魔の魂を宿らせたのだから、地獄では何をなさったの。

次は同じ行に *nature* と *natural* が用いられている。姿をくらました Romeo と再会した Mercutio はしゃれを言い合い、いつもの Romeo だと次のように言う。

Why, is not this better now than groaning for  
love? Now art thou sociable, now art thou Romeo;  
now art thou what thou art, by art as well as by  
nature. For this drivelling love is like a great natural  
that runs lolling up and down to hide his bauble in  
a hole.

(II.iv.88-93)

恋に悩んでいるよりましだろう。  
きみは愛想がいい、それでこそロミオだ。  
これできみは生まれからも、育ちからも  
正真正銘のロミオだ。恋をしてたわいないのは

棒切れを穴に隠そうと舌を出して、走り回る大阿呆だ。

by nature は by art と対照して用いられている。Levenson は The art which complements nature in Romeo may be understood not only as skill but also as rhetoric (*OED* sb. 2a, 3a). と注を施している<sup>1)</sup>。また natural は nature の洒落で用いられていて、名詞で idiot の意味である。

次の台詞にも nature と natural が用いられている。Laurence 修道士は庭の薬草を摘みながら言う。

The earth that's nature's mother is her tomb:  
What is her burying grave, that is her womb;  
And from her womb children of divers kind  
We sucking on her natural bosom find.

(II.iii.5-8)

自然の母である大地はまた自然の墓である。  
自然を埋葬する墓がその子宮である。  
その子宮から生まれた種々の子どもが  
母の胸で乳を吸っている。

nature は万物の意味で用いられている。natural bosom は万物の胸の意である。

Juliet の死を嘆き悲しむ Capulet に対して、Laurence は諭し、続けて「愚かな肉親の情はわれわれすべてのものに泣くように命じますが、肉親の情の涙は理性の笑いの種です」“For though fond nature bids us all lament, / Yet nature's tears are reason's merriment.” (IV.v.83-84) と言う。この nature は reason との対で用いられている。また Shakespeare でもっとも一般的な用法である natural feelings (肉親の自然な情愛) の意味である。

Mercutio は「何か変わった精霊」“a spirit ... /Of some strange nature,” (II.i.24-25) と言う。この nature は単なる種類を意味する。

42時間の仮死状態から覚めた Juliet に Romeo はどこにいるのか尋ねられて、Laurence は「騒ぎの音がする。死と疫病と不自然な眠りの床から出てきなさい」“I hear some noise. Lady, come from that nest / Of death, contagion, and unnatural sleep.” (V.iii.151-153) と言う。unnatural sleep は仮死状態を意味する。

## II

『ハムレット』 *Hamlet*

この劇において *nature* の語は30回、*natural* が5回、*unnatural* が4回用いられている。親が子に対し、また子が親に対する自然の情愛等、肉親間の自然の情愛を意味する *nature* の使用が多い。その意味の *nature* から見ていきたい。

Claudius は早々の再婚の理由を述べるところで、次のように言っている。

...so far hath discretion fought with nature  
That we with wisest sorrow think on him,  
Together with remembrance of ourselves.

(I.ii.5-7)

分別が肉親を思う自然の情とたたかい、  
亡き兄に対して思慮をもって哀悼し、  
同時に自らの務めも怠ってはならぬと考えている。

兄の死を悲しむ気持ちを *nature* と言い、その気持ちに耐えて、現実の世界を生きていかなければならない行動を *discretion* と述べ、Claudius は Hamlet の言う *hasty marriage* を分別に従った理性的な行動と言うのである。

聖餐も受けず、聖油も塗られず、懺悔もせず神の審判に付されたわが身を語り、「そなたに父を思う自然の情愛があるなら、許してはならぬ」“If thou hast nature in thee, bear it not;” (I.v.81) と Hamlet に訴える。この *nature* について Hibbard は *natural feeling* (such as a son should have for his father). と説明し、更に Gloucester の ‘Edmund, enkindle all the sparks of nature / To quit this horrid act.’ との比較を促している<sup>2)</sup>。Shakespeare における最も普通に用いられる用法である。しかし Hamlet にとってこの *nature* が重大である。復讐と *nature* の意味の狭間で Hamlet は苦悩するのである。

Hamlet は劇中劇によって Claudius の罪を確信し、心がはやっている。母親に対する一層抑えがたい衝動に駆られている。母親殺しの Nero を思い出し、その衝動を抑えようと、自らに「おお心よ、自然の感情を失うな」“O heart,

lose not thy nature;” (III.ii.389) と言う。この nature について、Jenkins は natural feeling, filial affection. と注をし、If thou has nature in thee, (I.v.81) に言及して、The same ‘nature’ as demands revenge requires him to spare his mother. と述べている<sup>3)</sup>。

Polonius は Claudius に、Hamlet と Gertrude との会見が、母子のことであるから、底い立てする恐れがあり、そのために自ら立ち聞きすることを提案し、次のように言う。

’Tis meet that some more audience than a mother,  
Since nature makes them partial, should o’erhear  
The speech, of vantage.

(III.iii.31-33)

肉親の情で公正さがなくなってしまうから、  
2人の話を母親以外の隠れて聞くものが  
いたほうがよろしいでしょう。

Gertrude は、母親の子への自然の情愛 nature として、Hamlet の不利になるようなことは決して言わないだろうというのである。

Laertes は Gertrude から Ophelia の溺死を知らされると、男である自分が涙を流すのは恥じであるが、「自然の情はこういうもの、恥知らずと言わば言う方がいい」 “nature her custom holds, / Let shame say what it will.” (IV.vii.186-187) と言って男泣きに泣く。肉親の死に接して涙を流すのは人情、人間の自然な情愛といっているのである。

Hamlet は試合に先立って Laertes に詫びて次のように言う。

What I have done  
That might your nature, honour, and exception  
Roughly awake, I here proclaim was madness.

(V.ii.226-228)

私のしたことは、君の自然の情愛と  
名誉を損ない、不快感を与えたと思うが、  
狂気のなせる業だったとここに明言する。

この nature は諸注釈者が言うように、父への natural feeling であり、この点では Laertes は Hamlet の言葉に、「自然の情愛の点では納得した」“I am satisfied in nature,” (Vii.240)と答える。この nature も同じ意味で用いられている。

造化の自然の nature を見てみよう。Hamlet は「なにかもって生まれた欠点」“some vicious mole of nature” (I.iv.24)という言葉の口にする。of nature は造化の自然が授けたの意である。

Hamlet は「造化の自然が授けた仕着せであろうと、運命の星の所為であろうと」“Nature's livery or Fortune's star,” (I.iv.32)と言う。Nature は Fortune と対置で使用されており、Nature's livery は先天性を、Fortune's star は後天性を意味する。

また Hamlet は、自然の節度を守らず、大げさな演技をする役者は「造化の自然」“Nature” (III.ii.34)本人ではなく、その徒弟がまずく造った人間と言うのである。

Hamlet は Gertrude に今夜から振る舞いを改めるように言い、よい行いを続けるとそれが習慣になる、「というも習慣は生まれながらの性質をも変えることがあるから」“For use almost can change the stamp of nature,” (III.iv.173)と言う。この nature は Use is another nature.を踏まえたものであり、of nature は造化の自然が与えた、生まれつきのを意味する。

次の nature は命の意味である。Gertrude は父の突然の死にあい、悲しみに沈む Hamlet に対して、「そなたはこれが当たり前のことと知っているはず。生あるものは必ず死ぬ、自然界から永劫の世界に行くのです」“Thou know'st 'tis common—all that lives must die, / Passing through nature to eternity.” (I.ii.72-73)と言う。永劫の世界、つまり死 eternity と対置して用いられているのである。

亡霊は現世を「生きていた日々」“my days of nature” (I.v.12)と言う。この nature も命の意味である。

Laertes は Ophelia に Hamlet の好意は戯れの恋であり、「人生の春の盛りに咲くスミレ」“A violet in the youth of primy nature” (I.iii.7)であると言う。

Hamlet は生まれつきの欠点は本人に罪はない、「人間は出生を選べないから」“Since nature cannot choose his origin;” (I.iv.26)と言う。この nature は被造物、ここでは人、人間を意味する。

Laertes は Ophelia に向かって、「人間は成長するときには、筋肉や身体が成長するだけではない」“For nature crescent does not grow alone / In thews and bulk,..” (I.iii.11-12)と言う。この nature も被造物、ここでは人間を指す。

Laertes は父の死のために正気を失った Ophelia を見て、「人の性は愛するとき、繊細である」“Nature is fine in love;” (IV.v.161)という言葉をもたらす。Schmidt はこの nature は③the physical and moral constitution of man に該当するとしている。

Hamlet は父を殺害し、母を汚し、王位を奪い、あげくに己の命を狙う Claudius について次のように言う。

And is't not to be damn'd

To let this canker of our nature come

In further evil?

(VII.68-70)

我々人間を蝕むこの害虫に  
更に悪行を重ねさせることは  
墮地獄の罪ではないのか。

canker of our nature について Edwards は a cancerous growth in humankind と注しているが<sup>4)</sup>、our nature は我々人間、人類を意味すると考えていいであろう。

Claudius は己の罪業におののき、この世では誤魔化せても、天上ではそれはかなわないと次のように言う。

But 'tis not so above:

There is no shuffling; there the action lies

In his true nature;

(III.iii. 60-62)

だが天上ではそうはいかない。  
ごまかしがきかないのだ。行為は

その本性のまま現れるのだ。

この nature は本質・本性の意味で用いられている。

Gertrude は Horatio から Ophelia に言葉を掛けた方がいいと言われ、Ophelia を部屋に入れるように言い、脇台詞で「罪の本質とはこういうものだが、私の病んだ心には、些細なことも大きな禍の始まりに思える」“To my sick soul, as sin's true nature is, / Each toy seems prologue to some great amiss.” (IV.v.17-18) と言う。この nature は his true nature (III.iii.62) と同じ意味である。両方とも罪との関連で用いられている。

次に自然の理法・摂理の意味の nature を見よう。Claudius は悲しみに暮れる Hamlet に、人の死は必然であるのに、いつまでも喪に服して悲しみに耽るのは女々しく、天に、死者に、「自然の理法に対する罪」“a fault to nature” と言う。

Hamlet は役者の心得について「自然の節度」“the modesty of nature” を越えないことであると言う。この nature は自然の条理の意味であろう。

また「ある性質の人、人間」の意味としての nature を見てみよう。Polonius は Ophelia から Hamlet の狂気の振る舞いの様子を聞いて、Hamlet が Ophelia に拒否されたため、失恋による精神異常と判断し、この感情は「われら人間を苦しめるいかなる激情」“any passion under heaven / That does afflict our natures” (II.i.105-106) にも劣らないものであると言う。

Hamlet は Claudius におもねる Rosencrants と Guildenstern とを「身分の卑しい者」“the baser nature” (VII.60) と言う。nature の意味はある性質の人間である。

Osric が調子のよい、気取った物言いをする人間であることを見抜き、Laertes との御前試合を了承したとの報告を国王に伝えてよろしいかという Osric に、Hamlet は「そのような主旨をな。お前の好きなように飾りをつけてかまわない」“To this effect, sir, after what flourish your nature will.” (VII.77-78) と言う。your nature はお前のような性質の人間の謂いである。

人間界の意味の nature について見てみよう。Hamlet は、演劇の要諦は今も昔も、「いわば自然に鏡を掲げること」“to hold as 'twere the mirror up to

nature;” (III.ii.22-21)であると主張する。これは劇が実人生の模倣というルネッサンスの観念に由来する。

Hamletはこの世が刈り取っていない雑草の生え放題の庭であり、この庭を「自然界における下劣で忌まわしいもの」“things rank and gross in nature” (I.ii.136)が独占していると言っている。このnatureは現象界・自然界である。

死に際して、教会の儀式にしたがって、丁寧に葬ったが、再びこの月明かりに現れた父の姿をした亡霊に接して、Hamletは驚き、「自然に弄ばれる我々」“we fools of nature” (I.iv.54)と言う。“fools of”に関して、Jenkinsはplaythings of, subject to the caprices ofと注し、更に“we are ‘fools of nature’ in being at the mercy of nature’s limitations (and hence confounded by what is beyond nature, 1.56)”と注を付している<sup>5)</sup>。

次のnatureは本質を示している。LaertesはPoloniusを殺したHamletが自分の命を狙っているというClaudiusの言葉を聞いて、「このような重罪で死罪に値する」“So criminal and so capital in nature,” (IV.vii.7) 所業に対して何故断固たる処置をとらないのか問う。

次にnaturalについて見ていきたい。亡霊は、Claudiusが王妃に魔の手を伸ばす様子を述べ、貞潔に見えた王妃が、己の「生来の才能」“natural gifts” (I.v.51)に劣る下劣な奴に靡いたことを語る。このnaturalは「造化の自然が与えた、生まれながらの」を意味する。

亡霊は庭で午睡している時、Claudiusによって耳に注がれた毒が「水銀のように素早く身体の血管の中を駆け巡った」“...swift as quicksilver it courses through / The natural gates and alleys of the body;” (I.v.66-67)と語る。このnaturalをSchmidtはpertaining to natureの意味に解している。naturalとbodyは重複して用いられている。

HamletはRosencrantsとGuildensternを前に、父の生前にはClaudiusを軽蔑していたのに、その肖像画の購入に金に糸目をつけない今の状況について「学問が説明してくれるなら、これには自然の条理を超えるものがある」“Sblood, there is something in this more than natural, if philosophy could find it out.” (II.ii.363-364)と述べる。この台詞についてEdwardsはthere is something



abnormal about it as scientific investigation would show.と注釈を付している<sup>6)</sup>。  
natural は「自然の条理にかなった」の意味である。

Hamlet は「肉体が受ける数々の苦しみ」“the thousand natural shocks / The flesh is heir to.” (III.i.62-63) と言う。この nature について Schmidt は subject to, or caused by, the law of nature: という定義に該当するとしている。これも natural と flesh が重複して用いられている。

劇中劇で Lucianus は「お前の本来の魔法と恐ろしい性」“Thy natural magic and dire property” (III.ii.254) よ、健やかな命を即刻奪えと言って、Player King の耳に毒液を注ぐ。毒薬が本来有するという意味で natural が用いられている。

次に unnatural を見ていく。4つの unnatural は against nature の意味であり、肉親間の自然の情愛にもとったという意味である。亡霊は Hamlet に父を愛したことがあるなら、「忌まわしい、極悪非道の殺人の復讐をせよ」“Revenge his foul and most unnatural murder” (I.v.25) と言い、Hamlet の “Murder” と驚く言葉に、「殺人はどう斟酌しても、非道だが、これは極悪で、奇怪で、非道極まりない」“Murder most foul, as in the best it is; / But this most foul, strange, and unnatural.” (I.v.27-28) と述べる。この unnatural について Jenkins はこの語の繰り返しは the violation of the natural tie between kin. を強調するものだと述べている<sup>7)</sup>。

母のもとに行きながら、Hamlet は自分を抑えようとして「厳しくしても、自然の情愛にもとめることはよそう」“Let me be cruel, not unnatural:” (III.ii.390) と言う。

Hamlet の亡き後、Fortinbras やイギリス大使にことの顛末を語る際に、Horatio は「非道な行為」“unnatural acts” (VII.386) と言う。この unnatural について、Jenkins は unnatural (cf. I.v.25) to the fratricide. と言うように<sup>8)</sup>、兄殺しという自然の情に反したという意味である。

Bush は nature の視点から次のように述べている。Denmark では natural feeling に従うべきかどうか不確かなところがある。Laertes は natural grief を恥と感じ、natural feeling の要求は曖昧であり、事物そのものが natural loyalties を不確かにする悪と結びついている。the natural world は things rank and gross

で占められている。個人は *some vicious mole of nature* を有し、母には *natural imperfection* があり、叔父は *a canker of nature* である。Arthur Sewell が言うように、偉大な悲劇の根っこには、いかなる行動も我々を *evil of time* に関わらせるという思想がある。そして時の中にいると意識し、そう告白するときに死を持ち込む。*time and death* への関わりはキリスト教によって Fall と Eden の喪失に表現されている。*Hamlet* で究極において我々の心を動かすのはこの関わりに対する恐怖である。*Hamlet* と *Horatio* が御前試合を待っているとき、*Hamlet* がどう行動をとるにせよ、その行為は *time and death* を了承することなのである<sup>9)</sup>。

### III

#### 『オセロ』 *Othello*

この作品では *nature* は21回、*natural* が1回、*unnatural* が2回使用されている。*nature* は、人の性格・気質の意味で多用されている。

*Iago* は理性と本能とがうまく釣り合っていなかったら、「生来の卑しい血気」“*the / blood and baseness of our natures*” (I.iii.288-289) のためにとんでもないことになると言う。*natures* は生まれながらに有する性質を意味する。

また *Iago* は「寛大で、率直な性格」“*a free and open nature*” (I.iii.398) である *Othello* を欺くのは簡単だと言う。

一方では *Iago* は *Othello* を憎んでも、その高潔さは認めて「ムアーは、俺にはがまんならないが、誠実で、高潔で、情け深い性格だ」“*The Moor, howbe't that I endure him not, / Is of a constant, noble, loving nature;*” (II.i.286-287) と言う。

*Iago* は *Cassio* の酒癖の悪いのを *Montano* に告げると、*Montano* は *Othello* が「彼のよい人柄」“*his good nature*” (II.iii.129) の故に *Cassio* の美点だけを見て、短所を見ないのであると言う。

*Iago* は人のあら捜しをするのが「私の生来の欠点」“*my nature's plague*” (III.iii.149) と偽悪家を演じる。この *nature* も生まれつきの性格の意味である。

*Iago* は *Desdemona* と *Cassio* の関係を *Othello* に話すのも、「寛大で、高貴

な気性が、あなたの気前のよさから欺かれるままにしておきたくありません」

“I would not have your free and noble nature / Out of self-bounty be abused:” (III.iii.202-203)からだと言うのである。ここでも Othello の nature が noble との結びつきで用いられている。

Othello が面前で Desdemona を殴打するのを目にして、Lodovico は「これがどんな感情にも動かされなかった性格の人なのか」“This the nature, / Whom passion could not shake?” (IV.i.265-266)と信じられない面持ちで言う。This the nature は Q では This the noble nature であり、F では Is this the nature である。この nature は性質の人、性格の人の意である。

次の nature も性格・気質である。キプロス島で Iago は Cassio を失脚させる計画を練り、勇気を奮ってもらわねば困ると、Roderigo に次のように話しかける。

...if thou be'st valiant — as, they say, base men  
being in love have then a nobility in their natures,  
more than is native to them — list me.

(II.i.213-215)

お前が勇敢なら一くだらぬ男でも  
女にほれているときには生来よりも  
立派になるそうだが、よく聞くんだ。

Desdemona は Othello の苛立ちを国家の大事のためであり、そのような場合、「男の人は本来些細なことにかかずらうものです、重要なことがあっても」“Men's natures wrangle with inferior things / Though great ones are their object.” (III.iv.145-146)と自らに言い聞かすように言う。この nature は本性の意味である。

次の nature はものの本性を示す。Desdemona が Cyprus に無事に到着したことについて、Cassio は嵐も、高波も、吼える風も美を解して、「残忍な本性を捨てて、天使のようなデズデモナを無事に通したのです」“do omit / Their mortal natures, letting go safely by / The divine Desdemona.” (II.i.71-73)と言う。omit...natures について Sanders は forbear to exercise their deadly natural

propensities. There may also be an opposition implied between mortal and divine.と述べている<sup>10)</sup>。因みに mortal は F であり、Q1は common である。

次の nature も同じ用法である。Othello は嫉妬に苦しみ始め、それを見て Iago は「邪推は本質的に毒だ」“Dangerous conceits are in their natures poisons.” (III.iii.329) と言う。

次の2つの nature は単に種類を示す。トルコ艦隊来襲のために議会在が召集され、Brabantio が顔を出す。Duke は考えを聞きたいと言うと、Brabantio はここにやって来たのは国難のためでなく、「私個人の悲しみが堰を切ってどっとあふれ出した」“my particular grief / Is of so flood-gate and o’erbearing nature,” (I.iii.55-56) ためだと言う。

Lodovico は、「罪状」“the nature of your fault” (V.ii.337) がヴェニス政府に報告されるまで、監視下におかれると Othello に告げる。

次の nature は human nature、人間の本性、本来の人間の意味と思われる。Brabantio は Desdemona が Othello に心を惹かれたのは彼の魔力に誑かされたと信じて疑わず、

For nature so preposterously to err,  
Being not deficient, blind, or lame of sense,  
Sans witchcraft could not.

(I.iii.62-64)

知的な欠陥もなく、盲目でもなく、  
感覚もある人間が、魔法にでもかけられなければ、  
このような途方もない間違いを犯すはずはありません。

と言う。

更に Brabantio は次のように言う。

And she, in spite of nature,  
Of years, of country, credit, everything,  
To fall in love with what she fear’d to look on?

(I.iii.96-98)

人情、歳の違いも、国の違いも、外聞、

あらゆるものを無視して、彼女が見るのも  
恐ろしい者と恋に陥ることがあろうか。

in spite of nature について Honigmann は in spite of *differences* of nature と説明している<sup>11)</sup>。nature には自然の条理・摂理の意味も包含しているように思われる。

Brabantio は繰り返して、魔法でなければ、「申し分のないものがこのようにあらゆる自然の掟に逆らって間違いを犯す」“...perfection so would err / Against all rules of nature,” (I.iii.100-101) ことはありえないと主張するのである。この nature は自然の理法の意であろう。

Iago の巧みな話術に乗せられて、Desdemona への信頼が揺らぎ、「けれどもどうして人間がその自然の条理に背いて」“And yet how nature erring from itself —” (III.iii.231) と Othello は言い出すのである。nature は human nature つまり人間の本性、本来の人間の意味で、itself は自然の条理、人情の意味に解することができる。

ここぞとばかりに Othello の弱点に切り込んで Iago は次のように言う。

Ay, there's the point: as, to be bold with you,  
Not to affect many proposed matches  
Of her own clime, complexion and degree,  
Whereto we see, in all things, nature tends—  
Foh! One may smell in such a will most rank,  
Foul disproportion, thoughts unnatural.

(III.iii.232-237)

そうです、そこです。遠慮なく申しますと、  
多くの求婚が気に入らないということ、  
それも同国人で、肌の色も、身分も同じであるもの、  
すべての点で、それが自然であるのに、へん、  
そういう人には汚らわしい情欲が臭う。  
甚だしく不似合いだ、考え方も自然に反する。

Not to affect ... tends について、Sanders は Iago is again echoing Brabantio at

1.3.96-97.と注を付している<sup>12)</sup>。これは Brabantio の言葉を引き継ぐものである。この nature も自然の条理、人情の意味も有していると思われる。また unnatural は against nature であり、人情、自然の条理に反しているという意味である。

Cassio が Desdemona を口説いたという讒言やハンカチの件を Iago に持ち出され、Othello は激しい怒りに全身を震わせて次のように言うのである。

Nature

would not invest herself in such shadowing passion  
without some instruction.

(IV.i.39-41)

何かの虫の知らせでもなければ、  
人間が本来このような暗い激情に  
包まれることはなかろう。

Sanders はこの箇所について my natural faculties would not become obliterated by strong emotion unless there were some basis of fact in what I have heard.と注を施している<sup>13)</sup>。nature は人間が本来持っている知的能力、そのような知的能力をもった人間の意味に解してよいように思われる。

次の nature は造化の自然の意である。Desdemona は「名工造化の自然の傑作」“cunning’st pattern of excelling nature” (V.ii.11)である。

次は1度用いられている natural を見よう。新婚の Othello は Duke にトルコ艦隊を迎え撃つためにキプロス島行きを命じられると、「私には艱難を聞けば生来の逸る気性があると思います」「I do agnize / A natural and prompt alacrity / I find in hardness,」(I.iii.231-233)と喜んで引き受ける。natural について Honigmann は inherent, innate と注している<sup>14)</sup>。

Othello のただならぬ気配に Desdemona は怯える。しかし Othello に責められるような罪を犯した覚えはない。自分の犯した罪を考えよという言葉に、Desdemona は Othello を愛したことですと応える。それ故に死ぬのだと言う、理不尽な Othello の言葉に Desdemona は「愛したために殺されるなんて自然の条理に反します」“That death’s unnatural that kills for loving.” (V.ii.42)と言

う。

Bush はこの作品を *nature* の観点から述べている。*Othello* は個人が世界と向き合うのではなく、個人が自己と対決する劇である。*Othello* は *natural passion* (IVi.39-41) によって心を揺り動かされる。*Iago* は生活の均衡は理性と官能の均衡であり、力はわれわれの意志にあると言うが、劇は *natural character* についてそれが真実であることを証明している。この視点から *natural character* が探求されている。*Othello* に要求されるのは、*the natural elements* の調和であり、*natural reason* と *natural passion* の調和なのである。*Othello* は *free and open nature* であり、*constant, loving, noble nature* であり、*good nature* であり、*free and noble nature* である。*Othello* は *natural nobility* を有している。*Gialdi Cinthio* の *Disdemona* はムアーとの結婚は *la Nature* に反していると告白するが、この劇では、考えが間違っているのは父であり、*Iago* であり、*altered Othello* の方であって、彼女ではない。*Desdemona* は *the rules of universal nature* に反した行動をとっていないし、*Othello* の用いた魔法が彼女の *nature* を成就させ、完成させた愛である。そして *Iago* によって、変えられた *Othello* が *how nature erring from itself* — と言って疑い出すのである。その結果、*Othello* は愛の故に殺すという *unnatural* な行動にでて、*cunning'st pattern of excelling nature* の灯りを消すのである<sup>15)</sup>。

## IV

### 『リア王』*King Lear*

この作品では *nature* は40回、*natural* が2回、*unnatural* が7回使用され、その頻度は極めて高い。多用されている *natural feeling* の意味の *nature* から見ていきたい。テキストはアーデン版 (Third Series) を用いた。

*Lear* は隠居を決意し、3人の娘に国土分割を考える。そして己に対する愛情の多寡で分与するとして娘達に愛情表明を要求して次のように言う。

Which of you shall we say doth love us most ?

That we our largest bounty may extend

Where nature doth wih merit challenge.

(I.i.51-53)

そなた達のうちで誰がわしを一番愛しているのかな？  
自然の情愛と孝養を示すものに  
最も豊かなものを贈ろうと思うのでな。

Where ... challenge に関して Foakes は where natural affection and merit both lay claim to it (our generosity).と注を施し<sup>16)</sup>、NS の編者は nature について natural affection (of child towards father)としている<sup>17)</sup>。merit は愛情を口に出すことであり、Lear には言葉は即実行を意味するのである。

Gloucester は Lear の Cordelia に対する仕打ちを「陛下も自然の情愛にもとる。子供にひどいことをする父親だ」「The King falls from bias of nature—there's father / against child.” (I.ii.111-112) と言って嘆くのである。

Lear は Goneril の待遇に怒り、Cordelia のことを思い出して、ほんのちよつとした咎が大きく自分の目に見え、親の子に対する自然の情愛を断ち切ったことについて、土台をレパーで外す比喻で語る。

O most small fault,

How ugly didst thou in Cordelia show !  
Which like an engine wrenched my frame of nature  
From the fixed place, drew from my heart all love  
And added to the gall.

(I.iv.258-262)

ああ、些細なあやまちよ、  
お前はコーデリアではなんと醜く見えたことか。  
梃子のように自然の情愛を定まった場所からねじ取り、  
心から愛情をすべて吸出し、苦い憎しみを増したのだ。

NS の編者は frame of nature に関して natural affection, thought of as a structure or building と説明をしている<sup>18)</sup>。

Cordelia への仕打ちに対する後悔と Goneril の仕打ちに対する怒りから、Lear は「わしの自然の情愛を忘れよう。あんなにやさしい父親だったのに」  
“I will forget my nature: so kind a father!” (I.v.31) と悲痛な声で叫ぶ。nature



について Foakes は *natural affection or kindness* と注を施している<sup>19)</sup>。

Edmund は父の Lear への支援を密告し、父への情愛より Cornwall への忠誠心を優先するという非難を心配してみせる。

How, my lord, I may be censured that nature  
thus gives way to loyalty something fears me to think  
of.

(III.v.2-4)

親への自然の情を断ち、忠義を尽くせば  
どのような非難を蒙るか考えると恐ろしいことです。

Foakes はこの *nature* について *natural affection for a father, as opposed to the ruler, Cornwall* と注を付している<sup>20)</sup>。

Cornwall に両眼を抉り取られた Gloucester は未だ裏切られてきたとは露知らず、Edmund に「エドモンド、あらゆる親への情愛の火をつけてこのおぞましい行為の仇を討ってくれ」“Edmund, enkindle all the sparks of nature / To quit this horrid act.” (III.vii.85-86) と復讐を訴える。Foakes はこの *nature* について *filial affection, as at 3.5.2* と注を施している<sup>21)</sup>。このように肉親間の情愛を意味する *nature* の頻度が高い。それがこの作品の一面の特徴を示している。

Regan は Goneril よりも「子として当然の務め」“The offices of nature” (II.ii.367) を心得ていると Lear は言う。Foakes も Wells も Lear のこの言葉を *natural obligations* と説明する<sup>22)</sup>。この *nature* も肉親間の情愛の意味である。

次に造化の自然の意味の *nature* を見てみよう。Lear は Cordelia を「造化の自然も自分のものと認めるのを恥ずかしいと思うやつ」“a wretch whom nature is ashamed / Almost t’acknowledge hers.” (I.i.213-214) と言う。これは自分を造化の自然と同一視した言動である。

Gloucester の庶子 Edmund は開口一番 Nature に向かって、「造化の自然よ、お前は俺の女神だ、お前の法則に従う」“Thou, Nature, art my goddess; to thy law / My services are bound.” (I.ii.1-2) と呼びかける。この Nature について Foakes は *the bonds of nature, the ties of natural affection between parent and child, what Lear calls ‘The offices of nature, bond of childhood’* 等をししばしば思

い起こさせると述べ、Edmund はこれらを退けることで the law of jungle に訴え、慣習、倫理、秩序と対立するものとしての獣性に与し、自己を正当化しているとしている<sup>23)</sup>。また Wells は nature についてこの劇の a key word and concept であり、しばしば natural ties of human feeling の意味で用いられているが、ここでは OED で ‘the condition of man before the foundation of an organized society’ と定義されている ‘state of nature’ の意味に近いと述べている<sup>24)</sup>。

Lear は Goneril を呪って「造化の自然よ、聞いてくれ、聞いてくれ」“Hear, Nature, hear, dear goddess, hear:” (I.iv.267) と nature に訴える。Foakes は Nature recalling Edmund’s appeal to Nature at 1.2.1, but with a difference; Lear invokes Nature as a creative force, but his horrible curse would make nature unnatural (*disnatured*, 275), and almost aligns him with Edmund. と述べている<sup>25)</sup>。

Lear を蔑ろにし、Goneril におもねる Oswald を「造化の自然もお前を造った覚えはないと言うぞ。仕立屋が造ったのだ」“nature disclaims thee — a tailor make / thee.” (II.ii.53-54) と Kent は言う。

怒り狂う Lear は四大に向かって訴え、「造化の自然の鑄型を打ち壊せ」“Crack nature’s moulds” (III.ii.8) と絶叫する。Foakes は break the moulds that give shape to all natural forms; と注釈を付し<sup>26)</sup>、また nature’s moulds について Wells は the mould in which nature makes men — here tantamount to ‘womb’. と述べている<sup>27)</sup>。この nature は造化の自然と万物との両義を有しているように思われる。

正気を失っている Lear を目にして、Gloucester は「ああ、自然の傑作が廢墟になった」“O ruined piece of nature.” (IV.vi.130) と言う。

Cordelia は虐待された Lear を「父の虐げられた身体」“his abused nature” (IV.vii.15) と言う。

次に性格、性質を意味する nature を見てみよう。Love-contest において Cordelia の言葉に激怒し、親子の縁を切ると言う Lear に忠臣 Kent が諫言すると、その Kent に対して Lear は「余の性格からも地位からも許しがたい」“Which nor our nature, nor our place can bear,” (I.i.172) として追放の刑を言い

渡す。

自分の機嫌を損ねるくらいなら生まれてこなければよかったのだと言う  
Lear の言葉を聞くと France 王は

Is it no more but this? — a tardiness in nature,  
Which often leaves the history unspoke  
That it intends to do?

(I.i.237-239)

ただそれだけのことですか？  
しようと思うことも口にしないことのある、  
生まれつき寡黙な性質のためですか？

と言うのである。Foakes は *tardiness in nature* について *natural slowness or hesitation* としている<sup>28)</sup>。

陰謀が成功すると Edmund は父の信じやすさと兄の人柄を次のように言う  
のである。

A credulous father and a brother noble,  
Whose nature is so far from doing harms  
That he suspects none.

(I.ii.177-179)

信じやすい父と、決して他人に  
危害を加えたことがないので  
疑うことを知らない人のよい兄。

この *nature* は人柄、性質、性格である。

Lear が Goneril を呪うのを聞き、Regan はお腹立ちの時は同じ呪いを自分  
に向けるのでしようと言うと、Lear は次のように言う。

No, Regan, thou shalt never have my curse.  
Thy tender-hafted nature shall not give  
Thee o'er to harshness.

(II.ii.359-361)

いや、リーガン、お前を呪うことはしない。

お前は優しい気立てだから、むごいことはしまいから。

Goneril の Lear に対する残酷な仕打ちに Albany は「生みの親を蔑ろにする根性はその枠内に留まってなどいるはずがない」“That nature which contemns its origin / Cannot be bordered certain in itself.” (IV.ii.33-34) と言う。

Edmund は死に際に Lear と Cordelia を救う気になり、「俺の本性には違うが、少しはよいことをしようと思う」“Some good I mean to do, / Despite of mine own nature.” (VIII.241-242) と言う。Edmund はよいことをすることが自分の nature に反すると言うのである。

次の nature は或る性質の人の意味である。Cornwall は「このように深く信頼できる者が必要になろう」“Natures of such deep trust we shall much need;” (II.ii.116) と言って、Edmund を召抱えるのである。

率直にものを言うのが自分の性分と言う Kent に Cornwall は

This is some fellow  
Who, having been praised for bluntness, doth affect  
A saucy roughness and constrains the garb  
Quite from his nature.

(II.ii.93-96)

こいつは無遠慮な物言いをほめられて、  
粗暴なことをやらかし、本来の性質とは  
違った態度を無理に取るってやつだ。

と言う。Wells はこの nature について its true nature と述べている<sup>29)</sup>。

王である自分に会おうとしない Cornwall に憤るが、Lear は相手の気持ちを慮った言葉を吐く。

We are not ourselves  
When nature, being oppressed, commands the mind  
To suffer with the body.

(II.ii.296-298)

身体が圧迫を受けると、肉体とともに精神も病むときには、  
我々は本来の我々ではなくなるものだ。

この nature は Schmidt の定義 *physical and moral constitution of man* に相当するのであろうか。

次の例も同じ用法であろう。仕えている主人の理に反した感情を Kent は「主人の心に起こるよくない欲望」“every passion / That in the natures of their lords rebel,” (II.ii.73-74) と言う。

次の nature は Schmidt の定義 *human life, vital power* の意味であろう。正気を失った Lear の身を案じる Cordelia の言葉に紳士が「身体を育む乳母は休息ですが、陛下はそれが不足しておられます」“Our foster nurse of nature is repose, / The which he lacks;” (IV.iv.12-13) と答える。

絶望した Gloucester は投身自殺を考え、神の意志に従って生きていくにも気がないと「私の身体の燃え残りの火は燃え尽きます」“My snuff and loathed part of nature should / Burn itself out.” (IV.vi.39-40) と言う。Foakes は *snuff ... nature* に関して *smouldering candle-end and hated remnant of my vital force*. と注を施し、更に nature について Foakes は 3.4.69 の *man's vital powers* を参照するように述べている<sup>30)</sup>。

激しい嵐の中 Fool と一緒にいる Lear に出会い、Kent は「人間の体力はこの苦しみ、恐ろしさに耐えられません」“man's nature cannot carry / Th'affliction, nor the fear.” (III.ii.48-49) と言う。

Kent は Lear に小屋へ入るように言い、「夜の荒野の嵐には人間の身体は耐えられません」“The tyranny of the open night's too rough / For nature to endure.” (III.iv.2-3) と激しい嵐のことについて言う。Foakes は、nature は *Man's nature* (III.ii.48) と同じように、*human nature* と注を施している<sup>31)</sup>。

気の狂った Lear は乞食姿の Edgar を見て、「人でなしの娘以外に人間をこのような浅ましい目にあわせるものはあるまい」“Nothing could have subdued nature / To such a lowness but his unkind daughters.” (III.iv.69-70) と言うのである。Lear は残酷な娘という強迫観念に取り付かれている。Foakes はこの nature について *man's vital powers* と説明している<sup>32)</sup>。

Lear は残忍な Regan の心臓のまわりに何が生えているのか解剖してみたいものだと言い、「このような堅い心臓を造る何か原因が身体の中にあるのか」

“Is there any cause in nature that makes these hard hearts?” (III.vi.74-75) と言う。nature は自然界の意味も含有するであろう。

Goneril と Regan は Lear のお付の従者の数を交互に減らしていき、遂に Regan が “What need one?” (II.ii.453) と言うと、Lear は

O, reason not the need! Our basest beggars  
Are in the poorest thing superfluous;  
Allow not nature more than nature needs,  
Man's life is cheap as beast's. Thou art a lady;  
If only to go warm were gorgeous,  
Why, nature needs not what thou gorgeous wear'st,  
Which scarcely keeps thee warm.

(II.ii.253-259)

ああ、必要を言うな。どんな卑しい乞食でも  
最も貧しい持ち物に余分なものを持っている。  
人間に生命を維持する以上のものを許されなければ、  
人間の生活は畜生同然だ。お前は貴婦人だ。  
暖かくすることだけで贅沢なら、暖かくもない  
お前の豪華な着物は人間に必要なまい。

と反論する。Wells は nature ... nature に関して Lear struggles to express a distinction between human and animal nature. と注を付している<sup>33)</sup>。また Foakes は If you do not allow (human) nature more than (animal) nature needs, と説明している<sup>34)</sup>。258行の nature は animal nature の意味であろう。

次の nature は寿命の意味である。Goneril を呪う Lear に Regan は「お父様の寿命はその限界に差し掛かっています」“Nature in you stands on the very verge / Of her confine.” (II.ii.336-337) と言って窘める。老い先が短い身であることを遠まわしに言っているのである。

次の2例の nature は自然界、被造物の意味であろう。最近起こった日蝕月蝕を不吉な前兆と見て、Gloucester は次のように言う。

Though the wisdom of Nature

Can reason it thus and thus, yet nature finds itself  
Scourged by the sequent effects.

(I.ii.104-106)

自然科学であれこれ説明はつくが、  
自然界はその後の出来事に苦しんでいる。

the wisdom of Nature はいわゆる自然学であり、Foakes は nature について the world of nature (including man) としている<sup>35)</sup>。

狂気の Lear に、紳士は

Thou hast one daughter  
Who redeems nature from the general curse  
Which twain have brought her to.

(IV.vi.201-203)

陛下には2人の娘のために  
人々の呪いを蒙った人間の本性を  
贖ってくださる姫がおられます。

と言う。general ... to に関して Foakes は The universal curse of original sin was brought on human nature by Adam and Eve, the first *twain*, who lie behind the more immediate pair, Goneril and Regan. と述べている<sup>36)</sup>。また Wells も (a) general curse which two individuals — Goneril and Regan — have brought upon her; (b) universal curse (of original sin) which Adam and Eve brought upon mankind. と注を施している<sup>37)</sup>。

次の nature は Edmund にとって自然本性の意味であろう。Edmund は「人目を忍ぶ、自然の情欲で」“in the lusty stealth of nature” (I.ii.11) 生まれた私生児の方が嫡子よりも五体が立派だと主張する。

次の nature は art との対概念で用いられている。「その点では自然は人工に勝っている」“Nature’s above art in that respect.” (IV.vi.86) と言う Lear の言葉は狂気の言葉であるが、NS の編者は A mad reference to a stock theme of the period; the relation between Art and Nature — a king who coins by divine right standing for Nature & a forger for Art. と説明している<sup>38)</sup>。

次に natural を見ていく。Edgar を陥れる陰謀に成功して、父の信頼を得た Edmund に Gloucester は領地を継がせる決意を次のように言う。

...and of my land,

Loyal and natural boy, I'll work the means

To make thee capable.

(II.i.83-85)

親孝行の、父親思いのお前がわしの領地を  
相続できるように手段を講じよう。

この natural について Foakes は properly loving to his father ; the word could also mean both 'legitimate, born in wedlock', and 'illegitimate'. と注を付している<sup>39)</sup>。

狂気の Lear は紳士の言葉を聞いて、逮捕されると誤解し、「わしは生まれながらの、運命に弄ばれる道化だ」“I am even / The natural fool of fortune.” (IV.vi.186-187) と言う。Foakes は natural ... fortune に関して born to be the dupe of fortune. Compare *RJ* 3.1.1.136; but a *natural fool* is also a fool by birth, simpleton. と注を施している<sup>40)</sup>。

unnatural を見ていこう。この unnatural は強い意味を有する語である。France 王は Lear の最愛の子であった Cordelia が一瞬のうちに Lear の憎しみを受けることになった Cordelia の罪はさぞ「非道な」“of ... unnatural degree” (I.i.220) ものでしょうと皮肉を言う。

Edgar が父を亡き者にしようという内容の偽手紙を Edmund に見せられ、Gloucester は陰謀だと思い込み、Edgar を「人でなしの、汚らわしい、獣みたいな悪党」“Unnatural, detested, brutish / villain” (I.ii.76-77) と罵る。

深刻な顔をしている Edmund に Edgar が理由を問うと、父を真似て、読んだ予言書の日蝕月蝕の影響を思い出していると言い、「親子間の情愛にもとった状態のような」“as of unnaturalness between the child and the parent” (I.ii.144) という言葉を口にする。unnatural は against nature であり、nature は肉親間の情愛を意味する。

Edmund は父を亡き者にしようとの計画を「非道な企て」“unnatural purpose” (II.i.50) と言うが、これは Edgar を陥れるための策略であるから、



Edmund の行為が unnatural であることを証明するものである。

怒り心頭に発した Lear は Goneril と Regan を「人情にもとる鬼婆」“you unnatural hags” (II.ii.467) と呼ぶ。

Goneril と Regan の残忍な仕打ちに苦しむ Lear の悲しみを Kent は「人情に反した仕打ちを受け、狂わんばかりの悲しみ」“how unnatural and bemadding sorrow” (III.i.34) と表現している。

Lear に同情したために、邸宅を奪われ、今後一切 Lear のことを口に出してはならぬと厳命される。Gloucester はそのことを「人の道にもとる仕打ち」“unnatural dealings” (III.iii.2) と言い、Edmund も Gloucester に合わせて、「この上なく残酷で、人情にもとっています」“Most savage and unnatural” (III.iii.7) と言う。

Bush は次のように述べている。*King Lear* の主題は父子間の natural bond である。Lear は nature を信じ、問題は unnaturalness に直面して、その信仰を維持できるかどうかということである。*King Lear* ではすべての人がある種の nature を信じ、その信念を表明する劇である。典拠の1つである *King Lear* では自然の法は力強く、神聖であり、その上に神の法があって、揺るぎないものである。*King Lear* では嵐と、ものそのものの発見において、nature を信仰し、nature を知り、nature に従うとはどういう意味かを探求しているように見える。また our natural selves であるだけで十分か、man であるだけで十分かということの探求である。Lear は Poor Tom に本質的な human nature を、the thing itself を見出したのである。嵐の後、Cordelia は戻ってきて、natural obligation を遂行し、kindness と父子の natural relation を再確認する。Cordelia は“sickened and divided nature にある程度の回復をもたらす<sup>41)</sup>”。

## V

### 『マクベス』 *Macbeth*

この作品には nature が26回、natural が2回、unnatural が3回使用されている。まず Schmidt の定義①の意味の nature から見ていく。Macbeth は眠りが「大自然の供するご馳走」“great Nature’s second course” (II.ii.38) であると

言う。

Macbeth は魔女の許を訪れ、次のように魔女に要求する。

... though the treasure

Of Nature's germens tumble all together,

Even till destruction sicken, answer me

To what I ask you.

(IV.i.58-61)

破壊がうんざりするまで、

大自然の種の宝がすっかり崩壊しようとも

尋ねることに答えてくれ。

魔女からバーナムの森がタンシネインの丘に攻め寄せるまで、負けることはないと言われ、

... and our high-plac'd Macbeth

Shall live the lease of Nature, pay his breath

To time, and mortal custom.

(IV.i.98-100)

玉座のマクベスは大自然から

借りている命をまっとうし、

期限がきたら息を引き取るのだ。

と言って、Macbeth は喜ぶのである。the lease of Nature について Muir は the term of life と注し<sup>42)</sup>、Braunmuller は i.e. the limited time nature grants one to live (Macbeth's natural life span) と述べている<sup>43)</sup>。つまり人の寿命である。

Macbeth は刺客に、犬にも人間にも「恵み深い造化の自然」“bounteous Nature” (III.i.97) が授けた才能によって違いがあるのだと説く。

Macbeth は Banquo と Fleance が生きていることに非常な不安を感じていることを口にする。それに対して Lady Macbeth は「でも造化の自然からの借り物は永遠ではありません」“But in them Nature's copy's not eterne.” (III.ii.38) と言って慰める。

次に自然界、被造物の意味の nature を見てみよう。戦況を報告する将校は

Macdonwald の悪行を「被造物の増大する悪が彼に群がっている」“The multiplying villainies of nature / Do swarm upon him.” (I.ii.11-12) と言う。multiplying villainies of nature について Braunmuller は proliferating evils within creation. と説明している<sup>44)</sup>。

Lady Macbeth は「自然界に悪を働くもの」“Nature’s mischief” (I.v.50) に仕える殺しの精霊達に自分の甘い乳を苦い胆汁に変えるように祈るのである。Nature’s mischief について Muir は mischief done to nature, violation of nature’s order committed by wickedness という Johnson の説、both injury engendered in human nature and done to it という Elwin の説、mischief wrought by any natural phenomenon, such as storm, tempest, earthquake, etc. という Cuningham の説や、また objective, substantial forms, invisible bad angels, to whose activities may be attributed all the unnatural occurrences of nature. という Curry の論を引用している<sup>45)</sup>。

Duncan 暗殺を前に、Macbeth は短剣の幻影を見、「今世界の半分では自然界は死んでいるようだ」“Now o’er the one half-world / Nature seems dead,” (II.i.49-50) と呟く。Braunmuller は seems dead について because nature is asleep. と述べている<sup>46)</sup>。

王の従者を何故殺したか問われると、Macbeth は必死に言い訳をし、「王の大きな傷口は破壊がどっと入り込む自然界にあけられた突破口のように見えました」“And his gash’d stabs look’d like a breach in nature / For ruin’s wasteful entrance:” (II.iii.113-114) ので、怒りを抑え切れなかったと言う。Braunmuller は breach ... entrance について The underlying image is of an opening or break (‘breach’) in a shore or dike, letting in ruinous (sea) water, or of attacking troops breaking into a castle or walled city: some injurious force overcomes cultivation’s or civilisation’s boundaries. This complex image represents Duncan’s body as a devastated landscape, as Macbeth’s violated castle, and as the violated bonds of loyalty and hospitality. と述べている<sup>47)</sup>。ダンカンの遺体が荒廃した光景、自分の城内で信義にもとる行為を行った状況、断ち切られた忠誠と歓待の絆を表しているというのである。

次に自然の条理の意味の nature を見よう。魔女の3つの予言のうち2つが実現したのを知ると、それがよいことなら、何故 Duncan 王殺害を想像しただけで「自然の習慣に反して」“Against the use of nature?” (I.iii.137)髪が逆立ち、激しく心臓が鼓動するのかと Macbeth は言う。Muir は Against ... nature について contrary to my natural habit (Kittredge).を引用している<sup>48)</sup>。

Macduff が Malcolm と Donalbain がこっそり逃げだしたので、Duncan 殺しの張本人の疑いを掛けられていると言うと、Rosse はこれも「自然に反します」“Gainst nature still:” (II.iv.27)と応じる。Braunmuller はこの言葉について i.e. like the self-devouring horses and other unnatural events he has just listed. と説明を加えている<sup>49)</sup>。

次の nature は人間の意と考えていいだろう。Macbeth と Lady Macbeth は国王殺害の具体的な計画を話し合う。護衛を酔い潰せば、国王殺害は容易だと Lady Macbeth は主張する。

... when in swinish sleep

Their drenched natures lie, as in a death,  
What cannot you and I perform upon  
Th' unguarded Duncan?

(I.vii.68-71)

酒びたしのものが死んだように、  
豚のように眠り込んでいれば、  
護衛のいないダンカンに対して  
あなたと私でできないことがありますか？

次の nature は被造物、命あるものの意味と考える。宴会の場で血みどろの Banquo の亡霊に狼狽し、夫婦してその場を繕うが、混乱のうちに宴が終り、憔悴している Macbeth に Lady Macbeth は「命あるものを生かすもの、眠りがあなたに欠けています」“You lack the season of all natures, sleep.” (III.iv.140)と気遣うのである。

次の nature は原罪を負う人間の自然・本性の意味である。Banquo は merciful Powers に「眠りの中で人が見る呪わしい思いを抑えてください」“Restrain in

me the cursed thoughts that nature / Gives way to in repose!” (II.i.8-9)と祈る。

Malcolm は Macduff の本心を探るため、Macbeth より自分の方がずっと放縦であると言う。それに対して Macduff は「人間性における際限ない放縦は暴政です」“Boundless intemperance / In nature is a tyranny;” (IV.iii.66-67)と言う。この言葉について Muir は i.e. want of control over the natural appetites constitutes a tyranny or usurpation in the “little kingdom” of man’s nature. と注を施している<sup>50)</sup>。

次の nature は人情を意味する。Duncan 王の訪問の知らせに、Lady Macbeth は王殺害をたくらむ。そして「人情の後悔の念」“compunctious visitings of Nature” (I.v.45)が王殺害の意図を妨げることのないように祈願する。この nature について、*OED* は III. 9. e. Natural feeling or affection. Now dial. と定義し、初出にこの箇所を挙げている。

次の nature は性格、気性の意味であろう。Lady Macbeth は Macbeth から魔法の3つの予言とその2つが実現した事実を手紙で知らされ、

Glamis thou art, and Cawdor; and shalt be  
What thou art promis’d. — Yet do I fear thy nature:  
It is too full o’ th’ milk of human kindness,  
To catch the nearest way.

(I.v.15-18)

あなたはグラームズ、そしてコーダー、  
それから約束された身分になられるでしょう。  
でもあなたの気性が心配です。人情という乳が多すぎて、  
最短の近道に行くことがおできにならない。

と Macbeth の気性に対する懸念を口にする。Muir は kind, kindness が natural や nature を意味するという Cuningham の指摘を引用している<sup>51)</sup>。また Brooke は ‘kind’ が元来 ‘natural’ を意味し、現代のこの語の意味は ‘natural goodness’ に由来するのであり、Lady Macbeth が意識的に the unnatural を祈願しているので、ここでは両義で用いられていると述べている<sup>52)</sup>。

Macbeth は王位に就いたが、Banquo の「王にふさわしい気性」“royalty of

nature” (III.i.49)に恐れを抱き、不安を感じているのである。Braunmullerはこのnatureについて、royal natureと注をし、更にThe phrase is both emphatic praise and an allusion to Banquo's royal progeny predicted by the sisters in 1.3.と説明を加えている<sup>53)</sup>。

Macbethは刺客たちに、お前たちをつらい目にあわせたのは自分でなく、Banquoだったと納得させ、これを黙って見逃すほど我慢強いのかと次のように言う。

Do you find

Your patience so predominant in your nature,  
That you can let this go?

(III.i.85-87)

お前たちはこれを黙って放っておくほど  
我慢強い性質なのか？

このnatureは性質、性格の意味である。

Banquoは殺したが、Fleanceを逃がしたという刺客の言葉を聞いて、Macbethは

... the worm, that's fled,  
Hath nature that in time will venom breed,  
No teeth for th' present.

(III.iv.28-30)

逃げた子蛇はやがて毒を産み出す  
性質をもつが、今は牙をもたない。

とFleanceに懸念を示す。

Macduffの真心を知ると、Malcolmは

... (I) here abjure  
The taints and blames I laid upon myself,  
For strangers to my nature.

(IV.iii.123-125)

私が自らに浴びせた汚点や欠点は

私の性格には無縁のものとして取り消します。

と説明するのである。この *nature* は個人の性格を示す。

次の *nature* はある性質の人の意味である。*Malcolm* は亡命してきた *Macduff* を信用できず、「善良で徳のある人も王の命令ではしり込みするかもしれない」“A good and virtuous nature may recoil, / In an imperial charge.” (IV.iii.19-20) と言う。

老人の異常現象の話を知ると、*Rosse* も次のように言う。

And Duncan's horses (a thing most strange and certain)  
 Beauteous and swift, the minions of their race,  
 Turn'd wild in nature, broke their stalls, flung out,  
 Contending 'gainst obedience, as they would make  
 War with mankind.

(II.iv.14-18)

そしてダンカンの馬が、(奇怪だが、確かなことだ)  
 姿がよく脚が速く、非常な名馬だが、  
 性格が荒くなり、厩を破り、飛び出し、  
 反抗するさまは、まるで人間に戦いを  
 挑んでいるかのようなようでした。

*Beauteous ... mankind* について *Braunmuller* は *The underlying assumption here is that horses are naturally subordinate to 'mankind', and the possibility that horses might abandon 'obedience', their training by humans, images a breakdown in nature's order. This collapse extends even to the horses' own natural order: they attack and eat each other.* と注を付している<sup>54</sup>)。自然の秩序の崩壊が馬の秩序の崩壊に及んでいるというのである。

次の *nature* は *life* の意味である。*Lady Macbeth* は *Macbeth* の仕事がやりやすいように、眠り薬を入れた酒で酔いつぶれて眠りこけている *Duncan* の付け人たちのことを、

I have drugg'd their possets,  
 That Death and Nature do contend about them,

Whether they live, or die.

(II.ii.6-8)

寝酒に薬をもったので、2人の中で死神と自然とが  
生かそうか死なそうかと争っている。

と言う。7-8について、BraunmullerはLady Macbeth imagines a contest, or an allegorical play, in which abstract figures (Death and Nature) fight over the grooms' lives and consciousness.と注を付している<sup>55)</sup>。

MacbethがBanquoは大丈夫だろうなと言う言葉に、刺客は頭に「20もの深手」「twenty trenched gashes」(III.iv.26)を受けており、「一番かるい傷でも命取りです」「The least a death to nature」(III.iv.27)と言って、Banquoの死を保証する。この句についてBraunmullerはFirst Murderer claims that any one of the 'gashes' would have been mortal, but the generalised expression recalls the apocalyptic language surrounding the discovery of Duncan's body in 2.3. As 3.2.16 partly anticipates, Nature is being killed.と述べている<sup>56)</sup>。

侍女がLady Macbethの夢遊病の様子を詳細に語ると、Doctorは「眠りの恩恵を受けながら同時に眼が覚めているときの行動をするという、身体が大変乱れている」「A great perturbation in nature, to receive at once / the benefit of sleep, and do the effects of watching!» (Vi.9-10)と言う。このnatureは身体を意味する。Muirはperturbation in natureについてWilsonのconstitutional disorderを引用している<sup>57)</sup>。

naturalは2回用いられている。MacbethはBanquoの亡霊に恐れおののくが、他のものは「自然の血色のよい顔色」「the natural ruby of your cheeks」(III.iv.114)をして、平然としているのに驚くのである。

Lady Macduffは1人でイギリスに亡命したMacduffを「あの人は私たちを愛していないのです。自然の情愛がないのです」「He loves us not: He wants the natural touch;» (IV.ii.8-9)と言って嘆く。natural touchについてMuirはthe feeling of natural affectionとJohnsonのnatural sensibilityを引用している<sup>58)</sup>。またBraunmullerはwants the natural touchに関してi.e. lacks the sensibility or feeling that is the effect of being part of nature; perhaps a reference to Macduff's



motherlessness. と注を施している<sup>59)</sup>。

Rosse は王殺しという大罪に天も人間の行為に病んで、昼間なのに暗いと言う。Old Man は「自然に反することです」“’Tis unnatural,” (II.iv.10) と応える。unnatural は異常な自然現象を意味している。

Doctor は夢遊病の Lady Macbeth の行動をつぶさに見、心が病んでいることを知り、「自然に反する行為が自然に反する悩みを生むのです」“Unnatural deeds / Do breed unnatural troubles:” (Vi.68-69) という言葉を口にする。unnatural は Macbeth 夫妻の国王殺害という、神の摂理に背いた行為を指している。

Bush は次のように述べている。夫の natural feeling は Lady Macbeth が最も恐れるものであり、そこで Macbeth の natural pity を止め、自分の内にあるそれを否定する。Macbeth は命を、Nature’s copy や the lease of nature を奪い、nature’s mischief を行い、そのことを the natural order から隠していたが、それに unnatural な事態が応えるのである<sup>60)</sup>。

---

<sup>1)</sup> Jill L. Levenson, ed., *Romeo and Juliet*, The Oxford Shakespeare, Oxford University Press, 2000, note.

<sup>2)</sup> Hibbard, ed., *Hamlet*, The Oxford Shakespeare, Oxford University Press, note.

<sup>3)</sup> Harold Jenkins, ed., *Hamlet*, The Arden Shakespeare, note.

<sup>4)</sup> Philip Edwards, ed., *Hamlet*, The New Cambridge Shakespeare, Cambridge University Press, 1985, note.

<sup>5)</sup> Harold Jenkins, *op. cit.*, note.

<sup>6)</sup> Philip Edwards, *op. cit.*, note.

<sup>7)</sup> Harold Jenkins, *op. cit.*, note.

<sup>8)</sup> Harold Jenkins, *ibid.*, note.

<sup>9)</sup> Geoffrey Bush, *Shakespeare and the National Condition*, Harvard U. P., 1956, pp.80-81, p.87.

<sup>10)</sup> Norman Sanders, ed. *Othello*, The New Cambridge Shakespeare, Cambridge University Press, 1984, note.

<sup>11)</sup> E. A. J. Honigmann, ed., *Othello*, The Arden Shakespeare, (third series), Thomas Nelson and Sons Ltd., 1997, note.

<sup>12)</sup> Norman Sanders, *op. cit.*, note.

- 13) Norman Sanders, *ibid.*, note.
- 14) E. A. J. Honigmann, *op. cit.*, note.
- 15) Geoffrey Bush, *op. cit.*, pp.57-58, p.60.
- 16) R. A. Foakes, ed., *King Lear*, The Arden Shakespeare (third series), Thomas Nelson and Sons Ltd., 1997, note.
- 17) G. I. Duthie and J. Dover Wilson, *King Lear*, The New Shakespeare, Cambridge University Press, 1962, note.
- 18) G. I. Duthie and J. Dover Wilson, *ibid.*, note.
- 19) R. A. Foakes, *op. cit.*, note.
- 20) R. A. Foakes, *ibid.*, note.
- 21) R. A. Foakes, *ibid.*, note.
- 22) R. A. Foakes, *ibid.*, note.
- 23) R. A. Foakes, *ibid.*, note.
- 24) Stanley Wells, *King Lear*, The Oxford Shakespeare, Oxford University Press, 2000, note.
- 25) R. A. Foakes, *op. cit.*, note.
- 26) R. A. Foakes, *ibid.*, note.
- 27) Stanley Wells, *op. cit.*, note.
- 28) R. A. Foakes, *op. cit.*, note.
- 29) Stanley Wells, *op. cit.*, note.
- 30) R. A. Foakes, *op. cit.*, note.
- 31) R. A. Foakes, *ibid.*, note.
- 32) R. A. Foakes, *ibid.*, note.
- 33) Stanley Wells, *op. cit.*, note.
- 34) R. A. Foakes, *op. cit.*, note.
- 35) R. A. Foakes, *ibid.*, note.
- 36) R. A. Foakes, *ibid.*, note.
- 37) Stanley Wells, *op. cit.*, note.
- 38) G. I. Duthie and J. Dover Wilson, *op. cit.*, note.
- 39) R. A. Foakes, *op. cit.*, note.
- 40) R. A. Foakes, *ibid.*, note.
- 41) Geoffrey Bush, *op. cit.*, p.75, pp.88-89, p.93, pp.96-97, p.110.
- 42) Kenneth Muir, ed., *Macbeth*, The Arden Shakespeare, Methuen and Co. Ltd., 1963, note.
- 43) A. R. Braunmuller, ed., *Macbeth*, The New Cambridge Shakespeare, Cambridge University Press, 1997, note.
- 44) A. R. Braunmuller, *ibid.*, note.
- 45) Kenneth Muir, *op. cit.*, note.
- 46) A. R. Braunmuller, *op. cit.*, note.
- 47) A. R. Braunmuller, *ibid.*, note.
- 48) Kenneth Muir, *op. cit.*, note.

- <sup>49)</sup> A. R. Braunmuller, *op. cit.*, note.
- <sup>50)</sup> Kenneth Muir, *op. cit.*, note.
- <sup>51)</sup> Kenneth Muir, *ibid.*, note.
- <sup>52)</sup> Nicholas Brooke, *Macbeth*, The Oxford Shakespeare, Oxford University Press, 1990, note.
- <sup>53)</sup> A. R. Braunmuller, *op. cit.*, note.
- <sup>54)</sup> A. R. Braunmuller, *ibid.*, note.
- <sup>55)</sup> A. R. Braunmuller, *ibid.*, note.
- <sup>56)</sup> A. R. Braunmuller, *ibid.*, note.
- <sup>57)</sup> Kenneth Muir, *op. cit.*, note.
- <sup>58)</sup> Kenneth Muir, *ibid.*, note.
- <sup>59)</sup> A. R. Braunmuller, *op. cit.*, note.
- <sup>60)</sup> Geoffrey Bush, *op. cit.*, pp.66-67.

## 第五章 ローマ史劇

### I

『タイタス・アンドロニカス』 *Titus Andronicus*

この作品では *nature* が 8 回、*unnatural* が 1 回使用されている。*nature* では Schmidt の定義①の意味で 3 回、*natural feeling* の意味で 3 回、本性の意味で 2 回用いられている。

①の *nature* から見てみよう。Titus は狩猟の催しが Lavinia を不幸に追いやったことを後悔し、そこを「この詩人が描写しているような、殺人と強姦のために造化の自然が造った」“Pattern’d by that the poet here describes, / By nature made for murders and for rapes.” (IVi.57-59) 場所だと言う。

Titus の言葉を聞いて、Marcus も、「ああ、何故自然はこのような忌まわしい巢窟のような場所を造るのだ。神々が悲劇を楽しむのでなければ？」“O, why should nature build so foul a den, / Unless the gods delight in tragedies?” (IVi.59-60) と言って、自然を呪うのである。このように造化の自然を意味する *nature* が悪と関係していることがこの作品の特徴である。

ゴート人 2 が、赤ん坊をあやしている Aaron の言葉を Lucius に次のように語る。

Did not thy hue bewray whose brat thou art,  
Had nature lent thee but thy mother’s look,  
Villain, thou might’st have been an emperor;

(Vi.28-30)

もしお前の肌色がお前は誰の子かばらさなかったら、  
もし造化の自然がお前に母親の顔の色を与えていたら、  
おい、お前は皇帝になっていたかもしれんのだ。

次は *natural feeling* の意味の *nature* を見てみよう。皇帝に推挙してくれた Titus に対して、Saturninus は感謝して、娘 Lavinia を妃にしたいと申し出る。Titus は名誉として喜ぶが、Bassianus と婚約していることを理由に Titus の

身内のものはそれを望まず、Lavinia を逃そうとする。Mutius は Titus に抵抗し、刺殺される。Mutius を Andronicus 家の代々の墓に埋葬するのを許そうとしない Titus に対して、弟の Marcus は「兄上、その呼び名で兄弟の情が訴えますから」“Brother, for in that name do nature plead,—” (I.i.370) と肉親の情に訴える。この nature の用法は Shakespeare では最も一般的なものである。

同様に息子の Martius が「父上、そうお呼びして、親子の情が訴えますから」“Father, and in that name doth nature speak—” (I.i.371) と言って、親子の情に訴える。

次の nature も同じ肉親間の情愛の意味である。新皇帝に推された Lucius は傷ついた Rome を癒す政治に乗り出す前に、亡き Titus を弔うことを求めて、「しかし諸君、しばらくお許してください。父に対する肉親の情愛故、悲しい仕事をしなくてはなりませんから」“But, gentle people, give me aim while, / For nature puts me to a heavy task.” (VIII.149-150) と言う。

次の2つの nature は本性の意味である。亡き同胞の供養のためゴート族の女王 Tamora の長男の生贄を認める Titus に向かって、Tamora は「あなたはその本性に近づきたいのでしょうか。それなら慈悲深いことで神々に近づいてください」“Wilt thou draw near the nature of the gods? / Draw near them then in being merciful;” (I.i.117-118) と必死になって、慈悲を訴える。draw ... merciful について、Waith は Proverbial: ‘It is in their Mercy that kings come closest to gods’ (Tilley M898). と注を付している<sup>1)</sup>。

Bassianus を殺された Lavinia は Tamora に向かって「さあ、いらっしやい、セミラミス、いや、野蛮なタモラ、このお前の名ほどお前の本性にふさわしい名前はないから」“Ay, come, Semiramis, nay, barbarous Tamora, / For no name fits thy nature but thy own.” (II.iii.118-119) と言う。barbarous Tamora が彼女の nature と言うのである。

unnatural の用法を見よう。Titus が自分の娘 Lavinia を自らの手で刺すのを見て、Saturninus は驚き、「なんということをしたのだ。人の道にもとる、非道なことを」“What hast thou done, unnatural and unkind?” (VIII.48) と言う。unnatural は unkind と併用することにより意味を強めるのである。unkind に

ついて、Waith は(a) unnatural (b) cruel と注を施している<sup>2)</sup>。

## II

### 『ジュリアス・シーザー』 *Julius Caesar*

この作品では nature が 6 回、natural が 1 回使用されている。Schmidt の定義①を意味する nature から見てみよう。

Antonius は亡骸を前にして、Brutus を賞賛し次のように言う。

His life was gentle, and the elements  
So mix'd in him, that Nature might stand up  
And say to all the world, "This was a man!"

(V.v.73-75)

彼の生涯は高潔で、各要素が見事に調和しているので、  
大自然が立ち上がり、全世界に向かって

「この人こそ立派な人間であった」と言うほどであった。

会談でいつの間にか夜が更けていたので、Brutus は「自然の要求には従わなければならない」“nature must obey necessity,” (IV.iii.227)から休もうと言う。この nature は精神と肉体を有する身体、人間の意味に解していいだろう。Knowlton は定義5で nature は人は肉体と精神を有する、したがって人は眠り、他の機能を果たさねばならないと言う<sup>3)</sup>。

以下の4つの nature は性格、性質の意味で使用されている。Brutus は Caesar の野心に憂慮して、「彼は王冠をほしがっている。そのことがどう彼の性格を変えるか、それが問題だ」“He would be crown'd; / How that might change his nature, there's the question.” (II.i.12-13)と煩悶する。

Portia の死を耐えようとする Brutus に、Messala がそのように偉大な人は大きな不幸に耐えなければならないと言う。それを聞いた Cassius は「俺も理屈では君と同じ考えであるが、俺の性格としてそれは耐えられない」“I have as much of this in art as you, / But yet my nature could not bear it so.” (IV.iii.193-194)と言う。

Cassius は異常な嵐に恐れおののく Casca に万物が「その性質」“Their

natures” (I.iii.67) を変える理由を考えよと言う。

Cassius に Caesar 暗殺陰謀を唆されて以来、Brutus は夜も眠れず、悩み、その様を次のように述べる。

..., and the state of man,  
Like to a little kingdom, suffers then  
The nature of an insurrection.  
  
(II.i.67-69)

そうすると、人間という国家は小王国のように、  
内乱に苦しむのだ。

この nature について Schmidt は quality, sort, kind: の意味に該当するとしている。

次に natural を見てみよう。数々の異常現象に接して、Casca は次のように言う。

When these prodigies  
Do so conjointly meet, let not men say,  
“These are their reasons, they are natural”;  
  
(I.iii.28-30)

このような前兆がこう一度に起こっては、  
「これらはこういう理由だ、自然現象だよ」とは言えまい。

この natural については、Schmidt は定義⑦ according to the ordinary course of things, not supernatural: に該当するとしている。

### III

#### 『アントニーとクレオパトラ』 *Antony and Cleopatra*

この作品において nature が 7 回、natural が 2 回使用されている。Schmidt の定義①の nature から見ていこう。

友人に請われて、Enobarbus は Antony が Cleopatra に初めて会った Cydnus 河での光景を語り、Cleopatra の姿の艶やかさは言語を絶するものだったと次のように言う。

For her own person,  
It beggar'd all description: she did lie  
In her pavilion — cloth of gold, of tissue —  
O'er-picturing that Venus where we see  
The fancy outwork nature.

(II.ii.197-201)

彼女自身については、筆舌に尽くしがたいものであった。  
彼女は天蓋の下に横になり、天蓋の生地は金糸で、  
画家の想像が造化の自然を超えるあのヴィーナスの絵をも  
凌いでいる。

Ridley は O'er-picturing ... nature について *Surpassing the picture of Venus artistic imagination has outdone nature.* と説明している<sup>4)</sup>。また Wilders は *more beautiful than a picture of Venus in which the artist's imagination surpasses the goddess herself.* と注を加えている<sup>5)</sup>。そして art と nature との対概念の用法が見られる。

次の nature も同じ造化の自然の意である。今は亡き Antony を心に思い描き、夢見た Antony は夢を超える存在であるといい、更に

... nature wants stuff  
To vie strange forms with fancy, yet to imagine  
An Antony were nature's piece, 'gainst fancy  
Condemning shadows quite.

(VII.97-100)

造化の自然は不思議なものを生むことにかけては  
空想にかなわない。でもアントニーのような人を  
思い浮かべるということは自然の傑作であり、空想に勝り、  
空想の生み出す実体のないものを圧倒するものだ。

と述べる。引用全体について Bevington は *Mere Nature lacks material to contend with the fancy or imagination in creating fantastic forms; yet an Antony such as I have pictured forth would be in himself Nature's masterpiece in*



competition with imagination, a masterpiece utterly surpassing any of the illusory images created by the imagination. Cleopatra insists on the superiority of the *idea* of Antony, whether or not such a man ever existed; the idea perfects Nature and yet is no idle imagining either, for it is invested in the reality of Antony.と説明を加えている<sup>6)</sup>。空想は実在には及ばないのであり、Antony は実在であって、自然の傑作なのである。

Charmian が何でも知っているというのはあなたかと問うと、Soothsayer は「自然という無限の秘密の書を少し読み解くことができます」“In nature’s infinite book of secrecy / A little I can read.” (I.ii.9-10)と答える。この nature は自然界、自然の条理を意味すると思われる。

そして住民たちは皆 Cleopatra を見に出かけ、1人残った Antony が空気に口笛を吹き、その空気も真空を作ってもよいということであれば、Cleopatra を見に出かけ、自然に間隙を作ったであろうと言うのである。

... air; which, but for vacancy,

Had gone to gaze on Cleopatra too,

And made a gap in nature.

(II.ii.216-218)

その空気も真空を作り出すということがなければ、

クレオパトラを見に行つて、自然界に穴をあけたであろう。

but for vacancy について Bevington は *except that this would have created a vacuum (something that Nature proverbially abhors; Dent 42)* と注を施している<sup>7)</sup>。自然は真空を嫌うという諺を踏まえているのである。

Antony がやって来て、話があると行って近づくと、Cleopatra は気分が悪いと言ってわざと避けようとする。

Help me away, dear Charmian, I shall fall.

It cannot be thus long, the sides of nature

Will not sustain it.

(I.iii.15-17)

あちらへ連れていっておくれ、チャーミアン、倒れそう。

こうして長くはおれまい。人間の身体では耐えられない。

the sides of nature について Bevington は my bodily frame, my human strength と注を加えているように<sup>8)</sup>、この nature は人間の意味に用いられている。Schmidt は③the physical and moral constitution of man:の定義の項目に含めている。

次の nature は human life の意味に用いられている。Caesar に凱旋の飾りにされるよりも、死を決意した Cleopatra は、先に Iras が倒れて死ぬのを見て、

If thou and nature can so gently part,  
The stroke of death is as a lover's pinch,  
Which hurts, and is desir'd.

(Vii.293-295)

お前と命がそのようにやさしく  
別れることができるのなら、死の一撃は恋人が  
つねるようなもの、痛い、好ましいもの。

と言う。

Antony の死の知らせに Caesar やその部下たちは素直に喜ばないでいる。Agrippa は

And strange it is,  
That nature must compel us to lament  
Our most persisted deeds.

(Vi.28-30)

不思議なことだ、  
一番望んでいたことが達せられたのに、  
人間の気持ちとして嘆かずにはいられないとは。

と言って、望んでいたことが達せられたのに、悲しみを覚える不思議な気持ちを吐露する。欠点はあったが偉大な人物であった同じローマ人の死に接して、人間として自ずとわいてくる情 (natural feeling) の意味で nature は用いられている。

次に natural の用法を見てみよう。Octavius は手紙を読みながら、「わが偉

大なる同僚を憎むのはシーザーの生まれつきの欠点ではない” “..., It is not Caesar's natural vice to hate / Our great competitor.” (Liv.2-3)と Lepidus に向かって言い、Antony の放縦振りを非難する。この natural について Bevington は i.e. unprovoked(いわれの無い)と注を施しているが<sup>9)</sup>、その意味を含めて、「自然の女神に与えられた、生来の、生まれつきの」の意味で使われている。Schmidt は②bestowed by nature, not acquired:に該当するとしている。

次の natural も同じ意味で使用されている。Octavia と再婚した Antony は、Caesar と自分とどちらが運は強いかと聞くと、Soothsayer は Caesar のそばでは守護霊も怖気づき、何事にも負けると予言する。更に「あの生まれつきの幸運で、彼は不利でもあなたを打ち負かす” “... and of that natural luck, / He beats thee 'gainst the odds.” (II.iii.25-26)と告げる。

Bush は、最後期の作品では、nature は命と愛の源泉であって、完璧な姿であり、“Husband, I come.” というように、Cleopatra の死さえも結婚の瞬間である。また natural fact と human art との対概念が頻出し、よりすぐれているのは nature であって、Cleopatra は nature が the fancies of art (II.ii.200-1)を凌いでいると述べている<sup>10)</sup>。

#### IV

##### 『コリオレイナス』 *Coriolanus*

この作品では nature の語が18回、natural が1回、unnatural が3回使用されている。まず Schmidt の定義①の意味から見ていこう。Rome によって追放された Coriolanus が Aufidius と連合を組み、Rome に攻め込むという知らせを聞き、Cominius は Coriolanus の雄姿を次のように言う。

He is their god. He leads them like a thing  
 Made by some other deity than nature,  
 That shapes man better;

(IV.vi.91-93)

彼はヴォルサイ軍の神だ。造化の自然でない、  
 もっと人間を立派に造る別の神に

造られたもののように指揮している。

次の nature は大自然・自然の条理の意味に用いられている。Martius を敵対者と考える Sicinius は「大自然は獣に味方の見分け方を教えますのでね」

“Nature teaches beasts to know their friends.” (II.i.5) と言う。この箇所について Brockbank は Isaiah, i. 3 (1585), ‘The ox hath knowen his owner, and the asse his masters cribbe’. という Noble の指摘を引用し<sup>11)</sup>、また Bliss は Eccclus. 13.16, 18: ‘Everi beast loveth his like...How can the wolfe agre with the lambe?’ との比較を促している<sup>12)</sup>。

哀願するような表情の息子を見て、Coriolanus は次のように言う。

... and my young boy

Hath an aspect of intercession which

Great nature cries, ‘Deny not’.

(Viii.31-33)

俺の幼い男の子が訴えるような顔つきをしている。

大自然が拒否しては駄目だと言っているようだ。

この nature は親子間の自然の情愛 (natural feeling) の意であるが、great が付くことによって、大自然の意味も包含するように思われる。

この作品では、Schmidt の定義④ individual constitution, personal character: の意味で用いられる nature の頻度が高い。主人公の性格が重要な意味を有しているのである。

*Coriolanus* は暴動場面から始まるが、首謀者らしき市民 1 がその矛先を *Coriolanus* に向け、彼が貴族の悪を体現し、暴動の理由は彼の傲慢さにあると主張する。それに対して市民 2 は「あの男の性格でどうしようもないことを悪徳だと言うのだな」“What he cannot help in his nature, you / account a vice in him.” (I.i.40-41) と反論する。

*Coriolanus* は慣習に従って執政官の職の承認を得るため民衆にいやいや古傷を見せ、承認を得る。護民官の Sicinius と Brutus が民衆に翻意するよう説得する。Brutus は *Coriolanus* の功績が執政官職に値するなら、「誠実な人柄の彼」“his gracious nature” (II.iii.185) が民衆を思い、悪意を改めて好意を持

つよう性根を改めるべきであったと言う。この nature も性格、人柄を意味する。

その Brutus の言葉をついで、Sicinius は Coriolanus の人間性を「あの男の気難しい気性」“his surly nature” (II.iii.193) と言う。

護民官は Coriolanus の執政官承認を民衆に翻意させることに成功し、民衆の拒否にあえば、Coriolanus は激怒する、それを盾にすればよいと言うのである。そういう性格の Coriolanus を「彼の性格であれば」“as his nature is” (II.iii.256) と言っている。

護民官の挑発によって Coriolanus は激怒し、民意を離反させる。貴族の1人がこの男は幸運を台無しにしてしまったと言うと、Menenius は「彼の性格はこの世には高潔過ぎるのだ」“His nature is too noble for the world.” (III.i.257) という言葉を口にする。

次の nature も同様である。母 Volumnia が現れると、Coriolanus は次のように言う。

Why did you wish me milder? Would you have me  
False to my nature? Rather say I play  
The man I am.

(III.ii.15-17)

母上は何故もっとおだやかにとおっしゃるのですか。

私の気性に背いた行動をとらせたいのですか。

むしろ私本来の男らしい態度を取れとおっしゃってください。

Volumnia は戦争の際には、名誉と策略は矛盾しないと同様に、平和においても策略を用いても名誉を損なうことはないと言き、自分の運命と友人が危機に陥っている場合、名誉となるなら、自分の本性を偽ると言う。

I would dissemble with my nature where  
My fortunes and my friends at stake required  
I should do so in honour.

(III.ii.63-65)

私は本性を偽りましょう、

私の運命と友人が危険でそうすることが必要であり、  
そうしてそれが名誉である限りは。

Coriolanus の my nature と Volumnia の my nature はまったく同じ意味である。

ヴォルサイ人の中で人気を得、影の薄くなった Aufidius は自分に対しても傲慢になったと感じるが、しかしそれが Coriolanus であり、仕方のないことだと言う。

Yet his nature

In that's no changeling, and I must excuse

What cannot be amended.

(IV.vii.10-12)

けれどその点の彼の気性は変わらない。

改められないことは許さねばなるまい。

Coriolanus の傲慢な気性は繰り返し言及されている。

また Aufidius の言う「気性」“nature” (IV.vii.41) も Coriolanus の性格への言及である。

次の nature も同じように性格を意味する。Aufidius は Coriolanus を亡き者にしようとして、共謀者たちにこれまでの行動を話し、粗暴で、手に負えない、わがままで、「彼の気性」“his nature” (V.vi.25)を曲げていると言う。

Sicinius は Coriolanus について次のように評する。

Such a nature,

Tickled with good success, disdains the shadow

Which he treads on at noon.

(I.i.258-260)

ああいう性格の男は成功するといいい気になり、

真昼に踏み自分の影さえ軽蔑する。

この nature は「～の性質を有する人」の意味である。

改めて Rome のいかなる要求にも耳を塞いだ Coriolanus も妻の Virgilia、母 Volumnia、息子の Martius の姿を目にして、心が揺らぎ、自らに言い聞かせるように「情愛などなくなってしまう。肉親の絆や特権など裂けてしまえ」

“...out, affection! / All bond and privilege of nature break!” (Viii.24-25) と言う。all bond and privilege of nature について Brockbank は *Lx*, II.iv.177, ‘The office of nature, bond of childhood’. と比較するよう指摘している<sup>13)</sup>。また Bliss は natural ties and claims of kinship と注を施している<sup>14)</sup>。この nature は肉親間の自然の情愛である。

副官に Coriolanus は Rome を占領するだろうかと尋ねると、Aufidius はミサゴが魚を捕らえるように、Coriolanus は Rome を手に入れるだろうと言う。

I think he'll be to Rome

As is the osprey to the fish, who takes it

By sovereign of nature.

(IV.vii.33-35)

あの男は、ミサゴが魚を捕らえるように、  
生まれながら備わった威厳でローマを  
手に入れるだろうと思う。

sovereign of nature つまり natural sovereign は「生まれながらに備わった威厳」の意味と考えていいだろう。

Coriolanus は、民衆が権利を主張し、元老院は多数を恐れてそれを認めたために、「こうして我々の元老院の座を卑しめた」“Thus we debase / The nature of our seats,” (III.i.134-135) と主張する。この nature は quality の意味である。

Brutus の言う「伝染性」“catching nature” (III.i.307) の nature も quality, kind の意味である。

次に natural を見てみよう。Menenius は「生きていくあの身体の活力」“that natural competency / Whereby they live.” (I.i.138-9) と言う。この natural について、Schmidt は④consonant to nature and its general or individual laws: の定義に該当するとしている。

次に unnatural を見たい。Rome に大きな貢献をなした Coriolanus を葬ることはわが子を食い殺す「無慈悲な母獣と同じ」“like an unnatural dam” (III.i.290) であって、とんでもないことだと Menenius は言う。

母や妻が情に訴えて、Rome 攻略を説得してやめさせる任務を帯びてやって来たことを承知している Coriolanus は「人の道にもとるとおっしゃらないでください」“Tell me not / Wherein I seem unnatural.” (Viii.83-84)と言う。Volumniaの願いに違ふことは肉親間の自然の情愛に反する行為であることを Coriolanus は認識しているのである。

Coriolanus は親子の絆、自然の情に訴える Volumnia の言葉に遂に屈して、「この自然に反する光景を神々が笑っている」“this unnatural scene / They laugh at.” (Viii.184-185)と言う。unnatural は against nature の意味であり、この nature をどう解釈するかは観客に任せられている。

Bushによれば、Coriolanus は natural nobility を有しているが、彼の性格は pride が高い。それが彼の nature (I.i.40-41)である。第3幕で、Coriolanus が母に my nature に背いた行動を取らせたいのかと問う。母は強引に彼の nature に背かせる。第5幕で再び母は his nature に背かせ、natural feeling に従わせようとする。Coriolanus の選択は his own nature と universal nature との選択である。そして母が勝利を収め、Coriolanus は natural feeling に屈する。しかしこの natural feeling を受け入れることは彼にとって命にかかわるということである<sup>15)</sup>。

## V

### 『アテネのタイモン』 *Timon of Athens*

この作品では、nature の語は24回、natural が3回使用されている。この頻度の高さは作品の複雑さと大いに関連しているのである。まず Schmidt の定義①の意味の nature から見ていきたい。

詩人は Timon を描いた画家の絵について、「それは自然に教えています。芸術の技巧がこのタッチに生き、実物以上に生き生きしています」“It tutors nature; artificial strife / Lives in these touches, livelier than life.” (I.i.37-38)と言って激賞する。Jowett は tutors nature について instructs nature as to how it should be. と注を付し、更に it makes ‘things better than nature bringeth forth’ and has the ability to ‘to teach and delight’. という Sidney の詩論を引用している



16)。

Timon は造化の自然を「気前のいい主婦大自然」“The bounteous housewife nature” (IV.iii.423) と言う。John Jowett は The oaks bear mast, the briars scarlet hips. / The bounteous housewife Nature on each bush / Lays her full mess before you. について Nature is presented as fecund and erotic, with probable word-play on *hips* as fruits of the rose and body-part. と注を施している<sup>17)</sup>。

次に性格の意味の *nature* を見てみよう。詩人は Timon の人柄について、「善良で慈悲深い性格」“his good and gracious nature” (I.i.57) と言う。

絵を贈られて、Timon は、絵に描かれているのはあるがままの人間だと言い、「人間の性格は不正直な取引で、人間はみかけだけだから」“since dishonour traffics with man’s nature, / He is but out-side;” (I.i.161-2) と絵画論を口にする。

First Senator は Timon の憤懣が「性格の一部」“coupled to nature” (Vi.224) になっていると言う。coupled to nature について Oliver は part of his nature と注を施している<sup>18)</sup>。

詩人は更に Timon が置かれた状況を運命の女神が頂上に鎮座する山に喩えて画家に語る。

The base o’ th’ mount

Is rank’d with all deserts, all kind of natures

That labour on the bosom of this sphere

To propagate their states.

(I.i.66-69)

山のふもとには財産を増やそうと

この地上で働いているあらゆる才能のある人々、

あらゆる気性の人々が並んでいる。

この *nature* はある性格の人の意味であろう。

金の用立てを頼まれて、Timon の執事に元老議員は「なにかが間違っただ、高潔な方でもうまくいかないことがある。万事うまくいけばいいが、お気の毒だ」“Something hath been amiss — a noble nature / May catch a

wrench—would all were well—’tis pity—” (II.ii.212-213) と言い訳をしたと執事が語る。この nature は性格の人の意味である。

Timon は忘恩の輩に愛想が付き、Athens を捨てて洞窟に住み、この世の在りようを述べる。

Not nature,  
To whom all sores lay siege, can bear great fortune,  
But by contempt of nature.

(IV.iii.6-8)

人間はあらゆる病苦に襲われるから、  
大身代という病気にかかる  
同じ人間を軽蔑するようになる。

Klein は Not ... nature. について i.e. a man raised by fortune out of the normal miseries of nature despises those who continue in them (Riverside). と注を施し<sup>19)</sup>、Oliver は To whom — siege について which is constantly beset by all kinds of sores (and might therefore be expected to bear yet another — great fortune). 更に But ... nature については except by acting in defiance of nature and natural affection (by despising its kind). There may be a quibble on “nature” in the senses of “human nature” and “beings of the same nature or kind”, as Deighton suggested. と注を施している<sup>20)</sup>。また Jowett は Not nature ... can bear it に関して、it is not in human nature to bear. The following notes take human nature as the referent, but there is probably also a wider glance at things in the natural world and at nature itself. と説明し、更に To whom には、i.e. to humanity in its raw, natural condition. という注を付し、8行目の nature については、i.e. (a) the natural human state, devoid of the benefits of *great fortune*; (b) kinship and familial origins, a person’s own kind. と注を付している<sup>21)</sup>。

Timon はこの自然界、人間界を「呪われた自然界」“our cursed natures” (IV.iii.19) と言っている。

Alcibiades が去ると、Timon は空腹を覚え、「生きている者は人間の薄情に気分が悪くなっているのに腹がへるとはなあ」“That nature being sick of

man's unkindness, / Should yet be hungry!" (IV.iii.178-179) と言う。nature は Schmidt によれば、精神と肉体を有する身体、人間の意味である。Jowett は That... hungry について、*Nature* refers to Timon's own needs. He is metaphorically sick through a surfeit of 'man's unkindness', but physically hungry, and digs the earth for 'one poor root' (l. 187). There may also be some suggestion that *nature* as the earth is both sick and eager to stimulate more human unkindness in yielding gold. と注を施している<sup>22)</sup>。

Apemantus は「裸の身体」“naked natures” (IV.iii.230) と言い、また「全くの自然状態の生きもの」“mere nature” (IV.iii.233) という言葉を用いる。naked natures について Klein は natural nakedness と注をし<sup>23)</sup>、Oliver は mere nature について nature in its undiluted, unmitigated form と注を施している<sup>24)</sup>。

Alcibiades は Timon の墓碑銘を読み、感慨にふける。大自然と比較して流す涙の少なさ故、人間を「けちな人間」“niggard nature” (V.iv.77) と言う。Klein は niggard nature について miserly nature, in that it shows little grief and few tears. と説明している<sup>25)</sup>。また Jowett は niggard nature について、parsimonious human nature. The phrase is Spenserian. In *Faerie Queene* II.xii.50 'niggard Nature' contrasts with lavish art. Timon's 'rich conceit' (ingenuity, imagination; i.e. the faculty of artistic creativity) leads him to find a lavish mourner in a world of nature separate from the human, making an extravagant and 'conceited' art out of nature. と注を施している<sup>26)</sup>。

Timon は草の根を求めて掘っていて、金貨を掘り当て、その金貨を罰当たりの土くれと呼び、国家間に紛争をもたらし、人間を誘惑する娼婦と言い、「お前に本来の務めをさせてやろう」“I will make thee / Do thy right nature.” (IV.iii.44-45) と言う。この nature について、Schmidt は定義④ individual constitution, personal character: に該当するとしている。

Timon に梅毒にでも罹れと毒づかれた Apemantus は「その言葉には病気に罹った様が見られる」“This is in thee a nature but infected,” (IV.iii.204) と言い返す。この nature は性質の意味である。

Second Senator は、復讐が求める処刑を「人の性・人間性」nature (Vi.33)

は嫌うものと言う。

Timon は誠実で、忠実な執事の言葉に思わず、「それを知ると俺の物騒な気性も和みそうになる」“It almost turns my dangerous nature mild.” (IV.iii.496) と言う。この nature は気性の意味である。

次の nature も同じ意味で用いられている。Timon が財を再び手にしたと聞くと、詩人は出向いていって、見捨てた友人どもの気性を「恩知らずの気性」“thankless natures” (Vi.59) と言う。

議員たちの忘恩の仕打ちを執事から聞いて、Timon は慰めて「人の命が土に返る日が近づくと、死出の旅路の準備で、気が重くなるのだ」“And nature as it grows again toward earth, / Is fashion'd for the journey, dull and heavy.” (II.ii.222-223) と言う。nature について Klein は the life of man と注している<sup>27)</sup>。

借金の使いに行った Flaminius は恩義を忘れた Lucullus のやり方に怒りをぶちまける。

O may diseases only work upon't,  
And when he's sick to death, let not that part of nature  
Which my lord paid for, be of any power  
To expel sickness, but prolong his hour!

(III.i.60-63)

ただもう病気になるがよい。そして重病になったら、  
主人のご馳走のおかげでついた体力が病気を追っ払わず、  
苦しみの時を長引かすように。

この nature は human life, vitality の意味で用いられている。Klein は that ... nature について、that part of his bodily system. と注を付している<sup>28)</sup>。

Timon は Apemantus に向かって「お前の身体は辛い経験で始まり、長い苦勞でそれに慣れている」“Thy nature did commence in sufferance, time / Hath made thee hard in't.” (IV.iii.270-271) と言う。この nature も身体の意味である。

Timon は人間のもろさを「身体というもろい船」“nature's fragile vessel” (Vi.199) と言う。この nature も身体の意味である。Jowett は nature's fragile vessel i.e. the human body (seen as a container for the soul). と注を付している<sup>29)</sup>。

Sempronius の弁解の言葉を聞いた Servant の 1 人は、美しい見せかけで、かけでは悪事を働くのが悪党で、「損得勘定の友情はそういうものなのだ」“of / such a nature is his politic love.” (III.iii.35-36) と言って、Timon の望みが断たれたことを嘆く。この nature は sort, kind, quality の意味である。

次に natural を見てみよう。画家に絵画を贈られて、Timon は「絵画に描かれているのは在るがままの人間といってよい」“The painting is almost the natural man: (I.i.160) と感謝の言葉を述べる。natural man について、Oliver は man as he really is, not the man whom dishonesty makes pretend to be better than he is. と注を施している<sup>30)</sup>。

Timon は金が “natural son and sire” (IV.iii.385) (実の親子) の間さえ引き裂くと言う。この natural について Schmidt は 8) native, given by birth, not adopted: の定義に該当するとしている。

Timon は詩人の作品について「お前の作品は人工であるが、自然そのものだ」“thou art even natural in thine art.” (Vi.84) と皮肉る。Jowett は natural in thine art について、Praise of the Poet’s verisimilitude half-conceals the sense ‘instinctively duplicitous’. と注を付している<sup>31)</sup>。Schmidt は genuine, not artificial or affected. としている。また当時の nature と art の対概念に言及したものである。

Bush によれば、劇の前半では Timon の nature は “good and gracious” であるが、第 4 幕では、この世を拒否する Transformed Timon となっている。忠実な召使の Flavius のことを思い出すと、Timon の dangerous nature が和らぎそうになる。しかし Timon は人間への憎しみと contempt of nature (contempt of life) を持ち続ける。natural feeling の否定は人間としての存在を拒否することであり、究極的には生存そのものの否定である。最後に Timon は消し去った natural feeling を認める。Timon の墓碑銘を見て、Alcibiades は Timon の気持ちを持ち量る。Alcibiades の言葉によって、Timon は natural sorrow をもって記憶されるのである<sup>32)</sup>。

- 
- 1) Eugene M. Waith, ed., *Titus Andronicus*, The Oxford Shakespeare, Oxford U. P., 1984, note.
  - 2) Eugene M. Waith, *ibid.*, note.
  - 3) Edgar C. Knowlton, "Nature and Shakespeare," PMLA, LI, 1963, p.722.
  - 4) M. R. Ridley, ed., *Antony and Cleopatra*, The Arden Shakespeare, Methuen & Co. Ltd., 1962, note.
  - 5) John Wilders, ed., *Antony and Cleopatra*, The Arden Shakespeare, (third series) Routledge, 1995, note.
  - 6) David Bevington, ed., *Antony and Cleopatra*, The New Cambridge Shakespeare, Cambridge University Press, 1990, note.
  - 7) David Bevington, *ibid.*, note.
  - 8) David Bevington, *ibid.*, note.
  - 9) David Bevington, *ibid.*, note.
  - 10) Geoffrey Bush, *Shakespeare and the Natural Condition*, Harvard University Press, 1956, pp.130-131.
  - 11) Philip Brockbank, ed., *Coriolanus*, The Arden Shakespeare, Methuen & Co. Ltd., 1976, note.
  - 12) Lee Bliss, ed., *Coriolanus*, The New Cambridge Shakespeare, Cambridge University Press, 2000, note.
  - 13) Philip Brockbank, *op. cit.*, note.
  - 14) Lee Bliss, *op. cit.*, note.
  - 15) Geoffrey bush, *op. cit.*, pp.63-65.
  - 16) John Jowett, ed., *Timon of Athens*, The Oxford Shakespeare, Oxford University Press, 2004, note.
  - 17) John Jowett, *ibid.*, note.
  - 18) H. J. Oliver, ed., *Timon of Athens*, The Arden Shakespeare, Methuen & Co. Ltd., 1963, note.
  - 19) Karl Klein, ed., *Timon of Athens*, The New Cambridge Shakespeare, Cambridge University Press, 2001, note.
  - 20) H. J. Oliver, *op. cit.*, note.
  - 21) John Jowett, *op. cit.*, note.
  - 22) John Jowett, *ibid.*, note.
  - 23) Karl Klein, *op. cit.*, note.
  - 24) H. J. Oliver, *op. cit.*, note.
  - 25) Karl Klein, *op. cit.*, note.
  - 26) John Jowett, *op. cit.*, note.
  - 27) Karl Klein, *op. cit.*, note.
  - 28) Karl Klein, *ibid.*, note.
  - 29) John Jowett, *op. cit.*, note.

<sup>30)</sup> H. J. Oliver, *op. cit.*, note.

<sup>31)</sup> John Jowett, *op. cit.*, note.

<sup>32)</sup> Geoffrey Bush, *op. cit.*, pp.62-63.

## 第六章 ロマンズ劇

### I

#### 『ペリクリーズ』 *Pericles*

この作品では *nature* の語は11回、*natural* と *unnatural* が各1回用いられている。*nature* は造化の自然の意味で5回用いられていて、ロマンス劇の特徴を示している。

Schmidt の定義①の意味の *nature* から見てみよう。Antiochus は娘を連れてくるように命じ、その娘を懐胎した際に「造化の自然」“*Nature*” (I.i.10) が美の贈り物をしたと言う。To glad her presence について、Hoeniger は Maxwell の注を挙げた後、But it is possible that *her presence* refers to *Nature* whose very bounty is demonstrated and ‘gladdened’ by the perfect woman she and her agents (the planets) have created. と注を付け加えている<sup>1)</sup>。また Gossett は The daughter’s unnatural seduction by Antiochus has violated both the incest taboo and the benevolent intentions of Nature. と注を施している<sup>2)</sup>。

Simonides は娘 Thaisa について「造化の自然」“*Nature*” (II.ii.6) が人々に見せるため、また見て驚くように生んだ、美の申し子であると言う。

Cerimon は「大自然が引き起こす」“*Nature works*” (III.ii.38) と言う。

女将は「造化の自然がこの子を拵えたのは、お前に幸運を授けるつもりだったんだ」“When nature fram’d this piece, she meant thee a / good turn;” (IV.ii.136-137) から、いい子がいると触れ回れと Boulton に言う。

Gower が語る。

Deep clerks she dumbs, and with her neele composes  
Nature’s own shape, of bud, bird, branch, or berry,  
That even her art sisters the natural roses;

(V. Chorus.4-7)

彼女は造詣深い学者をも沈黙させ、針をもってつぼみ、  
小鳥、枝、木の実を自然のままの形に刺繍し、



その人工の薔薇は天然の薔薇と見紛うほどである。

Nature は art と対をなし「人工」に対する「大自然・造化の自然」を意味し、また natural roses も art と対照をなし、natural は「大自然が造った、天然の」を意味するのである。

Pericles は再び嵐に遭い、独り助かり、Pentapolis の浜に辿り着き、嵐に向かって叫ぶ。

Yet cease your ire, you angry stars of heaven!  
Wind, rain, and thunder, remember, earthly man  
Is but a substance that must yield to you;  
And I, as fits my nature, do obey you.

(II.i.1-4)

怒れる天の星々よ、もう怒りをおさめてください。  
風よ、雨よ、雷よ、地上の人間はあなた方に  
敵わないものだということを思い出してください。  
そして私も人間ですから、あなた方に従います。

Gossett は Pericles submits to the power of the elements ‘as befits his character (nature)’. Nature, however, may refer to Pericles’ humanity rather to his personality.と注を施している<sup>3)</sup>。性格より、人間性、人間を意味するとしている。

Cleon は恩のある Pericles の王女 Marina を預かり、大切に育てることを誓い、もし私が怠るようなことがあれば、民衆も黙っていないだろうと言い、更に

But if to that my nature need a spur,  
The gods revenge it upon me and mine,  
To the end of generation!

(III.iii.23-25)

いえ、私とその義務を果たすのに鞭撻を必要とするなら、  
神々が私と私の子々孫々末代まで罰して下さいますよう。

と言うのである。my nature は I.ii.4 の my nature と同じ用法で用いられている。

Pericles の「哀れな、小さい生命よ」[Poor inch of nature!](III.i.34)という台詞について、Hoeniger は Whether the words are those of Shakespeare or some other author is a moot point.と注を施している<sup>4)</sup>。また Warren は tiny natural creature. The phrase is introduced from Wilkins's narrative (p.519).と注を付している<sup>5)</sup>。

紳士 1 がなに不自由ないのに、このように朝早く起きている Cerimon に向かって次のように言う。

'Tis most strange,  
Nature should be so conversant with pain,  
Being thereto not compell'd.

(III.ii.24-26)

必要ありませんのに、  
こんな風にご自分から苦労をお求めになるのは、  
不思議です。

この nature は Cerimon を指している。

Ephesus で Cerimon が召使に向かって「彼の病を治す手立てはないのだ」  
“There's nothing can be minister'd to nature / That can recover him.” (III.ii.7-9)  
と言う。nature について Gossett は the physical constitution of a human being.  
と注を施している<sup>6)</sup>。また Warren は Q の to nature より in nature の方が、意味がとおるとし、nature を自然界の意味に解している<sup>7)</sup>。

仮死状態の Thaisa を見て、Cerimon は召使に火をおこし、薬を持ってくるよう言いつけ、

Death may usurp on nature many hours,  
And yet the fire of life kindle again  
The o'erpress'd spirits.

(III.ii.84-86)

死が人の身体を何時間も不法占拠していても、  
命の火が消えた活気を再び燃え上がらせることがあるものだ。

と言う。この nature は人間の身体の意味と考えていいだろう。

Dionyza はわが子を愛すればこそ Marina を殺したのであって、「あなたが私のやり方を人の道にもとるとおっしゃるのなら、あなたは自分の娘を愛していないのです」“And though you call my course unnatural,— / You not your child well loving—” (IV.iii.36-37) と言う。この unnatural は against nature (自然の情愛に反する、人の道にもとる) である。

## II

### 『シンベリン』 *Cymbeline*

この作品で nature が18回、natural 4回、unnatural が1回使用されている。ロマンス劇では造化の自然の意味の nature が多用されている。

Iachimo は初めて会った Imogen を見て、その美しさに驚く。種々の事物の差異を見抜く目を「造化の自然」“nature” (I.vii.32) から与えられているのに、女性の美醜の区別をできない自分自身を嘲っている。慧眼を与える nature を賛美しているのである。

また Iachimo は、金のためなら、腐敗が「造化の自然」“nature” (I.vii.125) に手を貸して産ませた出来損ないの人間と付き合う女どもと Posthumus が関係をもっていると讒言する。

Iachimo は Imogen の寝室の様子を語る際、彫刻家が Chaste Dian を描く様子は「造化の自然」“another Nature” (II.iv.84) のようだと言っている。

Iachimo は Imogen の部屋に忍び込んだことの、Imogen に関する確実な証拠とする身体の特徴を「身体にあるもって生まれた徴」“some natural notes about her body” (II.ii.28) と言っている。natural は自然の女神が授けたという意味である。

Cymbeline のもとから奪ってきて、洞窟で育てた Guiderius と Arviragus とが生まれながらの高貴さを示すのを見て、「造化の自然が与えた高貴な輝きを隠すのはむずかしいものだ」“How hard it is to hide the sparks of Nature!” (III.iii.79) と Belarius は驚きの声を上げる。

Arviragus のやさしい言葉を聞き、Belarius は次のように言う。

O noble strain!

O worthiness of nature! breed of greatness!  
Cowards father cowards, and base things sire base;  
Nature hath meal, and bran; contempt, and grace.

(IV.ii.24-27)

ああ、高貴な血筋だ。生まれながらの徳、  
王の血筋だ。臆病者の子は臆病者、  
卑しい者の子は卑しい。自然は粉も、糠も、  
そして下等なものも、上等なものも作る。

両方の nature は造化の自然の意味で用いられている。

剛毅な2人の王子の言葉を聞き、Belariusはその気品に打たれて言う。

O thou goddess,  
Thou divine Nature; thou thyself thou blazon'st  
In these two princely boys:

(IV.ii.169-171)

ああ、女神よ、聖なる造化の自然よ、  
あなたはこの2人の王子の中に  
あなた自身を現している。

Belarius は、王子たちの高貴さを繰り返し口にする。それは自然の女神のなす業に対する賞賛なのである。

そしてローマ軍の総大将 Lucius は、自分の小姓にしている男装の Imogen に問いかける。

Who is this  
Thou mak'st thy bloody pillow? Or who was he  
That (otherwise than noble Nature did)  
Hath alter'd that good picture?

(IV.ii.362-365)

そなたが血まみれの枕にしていた人は誰だったのか。  
またあの立派な絵を描き変えたのは  
造化の自然以外の誰であったのか。



law:” (V.iv.37-38)と言う。attending nature’s law について Warren は awaiting nature’s decree (that he should be born). Compare *Winter’s Tale* 2.2.62-4: ‘This child was prisoner to the womb, and is / By law and process of great nature thence / Freed’. と注を施している<sup>9)</sup>。

Imogen は Belarius の洞窟を見つけて、声を掛けないほうがよいだろう、「その勇気がない。でも飢えて死にそうになると、勇気が出るもの」“I dare not call: yet famine, / Ere clean it o’erthrow Nature, makes it valiant.” (III.vi.17-20)と言う。この nature は精神と肉体を有する身体、人間の意味と考えていだろう。

次の nature は寿命の意味であろう。Iachimo が Imogen のことを口にする時、Cymbeline は次のように言う。

My daughter? what of her? Renew thy strength:  
I had rather thou should live, while Nature will,  
Than die ere I hear more: strive, man, and speak.  
(V.v.150-152)

娘が？娘がどうしたというのだ。元気を出せ。  
その先を聞くまでは死なせるより、寿命の限り、  
生かしておきたい。おい、しっかりして、先を話せ。

Warren は while nature will について the rest of your natural life と注を施している<sup>10)</sup>。

Pisanio は Imogen に Posthumus からの手紙を見せて真相を明かす。Imogen は自分が不義を働いたという手紙を読んで、

To weep ’twixt clock and clock? If sleep charge Nature,  
To break it with a fearful dream of him,  
And cry myself awake?

(III.iv.42-44)

1時間毎に涙を流すことが？ 眠くて体力がなくなると、  
夫になにか恐ろしいことが起こった夢を見て  
うなされて目を覚ますことが？

と当惑して言う。charge nature について、Warren は weigh down the vital powers (i.e. if I ever manage to get to sleep) と注を施している<sup>11)</sup>。この nature は活力、体力を意味する。

Cornelius は妃に毒薬の調合を頼まれるが、真意をはかりかね、仮死状態にする薬を調合したことを語る。

..., but in short time

All offices of nature should again

Do their due functions.

(V.v.256-258)

しばらくすると、身体の諸機能が

再び元の機能を回復する。

Warren は offices of nature について natural faculties と注釈を施している<sup>12)</sup>。

Posthumus だと思って Cloten の死体に泣き伏している Imogen に気づき、Lucius は言う。

But dead rather:

For nature doth abhor to make his bed

With the defunct, or sleep upon the dead.

(IV.ii.356-358)

いや、死んでいるのだろう。死体をベッド代わりにしたり、

死体の上に寝たがるものはないからな。

この nature は生きもの、ここでは人間の意味で用いられている。Schmidt は human life, vitality. としている。nature doth abhor について Warren は a living creature would detest. と注を付している<sup>13)</sup>。

Queen に毒薬を求められるが、Cornelius は疑惑の目を向け、一時感覚を麻痺する薬を渡して次のように言う。

I do know her spirit;

And will not trust one of her malice with

A drug of such damn'd nature.

(I.vi.34-36)

わしには彼女の気性がわかっている。

あの邪悪な女にそんな恐ろしい薬は渡せない。

この nature は kind, sort の意味で用いられている。

ローマの使者 Lucius が3,000ポンドの年貢を要求する際に、Queen は拒否すべきで、ブリテンは、*Richard II* において Gaunt が述べているように、「この島が天然の要害」“The natural bravery of your isle” (III.i.19)であるので、ローマから攻められる恐れがないのだからと言う。natural は Schmidt の定義の bestowed by nature を意味する。Gaunt は *Richard II* で「造化の自然が自らを守るために築いた要塞」“This fortress built by Nature for herself” (II.i.42) と言っている。

Cloten は Imogen の言葉を思い出して言う。

She said upon a time (the bitterness  
of it I now belch from my heart) that she  
held the very garment of Posthumus in more respect  
than my noble and natural person;

(III.v.134-137)

あれはいつか言った、(その恨みを胸から吐き出してやる)  
ポスツュマスの服のほうが生まれの高貴なおれよりも大事だと。

Warren は noble and natural に関して noble by nature と注を付している<sup>14)</sup>。

ローマ軍の進軍に Belarius が隠れようと言うと、Guiderius は

Nay, what hope  
Have we in hiding us? This way, the Romans  
Must or for Britons slay us or receive us  
For barbarous and unnatural revolts  
During their use, and slay us after.

(IV.iv.3-7)

そうです、身を隠したって何の希望があるのです。  
そんなことをすれば、ローマ人に見つかり、  
ブリテン方と思われ、殺されるか、野蛮で裏切り者とみなし、



役立つ間使われ、殺されるにちがいありません。

Warren が receive ... use について recruit us, as treacherous rebels (against our country) while they have need of us. と注釈を施しているように<sup>15)</sup>、unnatural には母国を裏切る意味が含意されているのである。

### III

#### 『冬の夜ばなし』 *The Winter's Tale*

この作品では nature が17回、natural が2回、naturally が1回、unnatural が1回使用されている。ロマンス劇に特有の、造化の自然の意味で多く用いられている。

不義の子であると信じる Leontes の脅迫にもかかわらず、Paulina は体を張って、Hermione と Perdita を庇い、Perdita を不義の子だと考えるような Leontes の黄色という嫉妬の気性を彼女が持つことがないようにと、嫉妬深い Leontes に顔貌が瓜二つに造り出した「やさしい自然の女神」“good goddess Nature” (II.iii.103)に祈願するのである。ここで Perdita と nature との関係が強調されている。Pafford は、この箇所注の中で、Cf. IV.iv.88-96. Shakespeare is full of references to Nature the great creator. She is also Great in *Cor.*, VIII.33; *Cym.*, Viv.48; Goddess in *Lr.*, I.iv.275; and Goddess and Divine in *Cym.*, IV.ii.170-1. と述べている<sup>16)</sup>。

毛刈り祭りの日に羊飼いの家に変装して現れた Polixenes に、Perdita は「自然の私生児」“nature's bastards” (IV.iv.83)と呼ばれる streak'd gillyvors が好きではないと言う。その理由を聞かれた Perdita は

For I have heard it said

There is an art which, in their piedness, shares  
With great creating nature.

(IV.iv.86-88)

その斑模様には偉大な造化の自然に  
人工が加えられているということを  
聞いていますので。

と答える。造化の自然に人工が加わっているということに若い純真な Perdita は抵抗を感じているのである

Perdita の理由を聞くと、Polixenes は

Yet nature is made better by no mean  
But nature makes that mean: so, over that art,  
Which you say adds to nature, is an art  
That nature makes. You see, sweet maid, we marry  
A gentler scion to the wildest stock,  
And make conceive a bark of baser kind  
By bud of nobler race. This is an art  
Which does mend nature—change it rather—but  
The art itself is nature.

(IV.iv.89-97)

けれども自然がその手段を造らなければ、自然はよくなる。だから自然に加えられるとあなたの言うその人工を自然は支配しているのだ。

あのね、娘さん、上品な枝を野生の台木と結婚させて、高貴な血統の芽で卑しい木に宿らせることがある。

これが自然を改良するというよりむしろ作り変える術であるが、その術も自然である。

と、nature も art によってよりよいものになると言い、接木の例を持ち出して、art そのものが nature であると言うのである。しかし王子 Florizel と羊飼いの娘の結婚には反対なのであり、Polixenes は自然の認識に反するのである。ここには dramatic irony がある。

そして Polixenes は変装をとって、Florizel に Perdita との交際を禁じる。しかし Florizel は王位継承権より、Perdita の方を選ぶ決意をして、次のように言う。

It cannot fail, but by  
The violation of my faith; and then

Let nature crush the sides o'th'earth together,  
And mar the seeds within!

(IV.iv.477-479)

私が誓いを破らないかぎり、このまま変わることはない。

そして私が誓いを破るようなことがあれば、

自然が大地の横腹を砕いて、その中の種子を壊してしまえばいい。

Pafford が指摘するように、nature と seeds 等の使用は *Macbeth* や *King Lear* における場合と同じような cosmic image を生み出し、Florizel の決意の強さを示すものである<sup>17)</sup>。

また羊飼いと道化の愚かさを見て、小悪党の Autolycus は「馬鹿でない俺たちはなんて幸せなんだ。でもひょっとしたら造化の自然が俺をあいつらのように造っていたかもしれない」“How blessed are we that are not simple men! / Yet nature might have made me as these are;” (IV.iv.746-747) と言う。

更に Third Gent. は Hermione にそっくりの彫像を制作した技について、Romano が命の息を吹き込むことができれば、「造化の自然を欺いてその仕事を奪う」“beguile Nature of her custom” (VII.98) ほどで、「造化の自然さながら」“her ape” (VII.99) であると言う。Pafford はここでもその技が nature に代わって制作するのであるから、art と nature の対置であると言っている<sup>18)</sup>。

Third Gent. は Perdita が間違いなく Leontes の王女であるという幾つかの証拠を挙げ、Perdita の生まれながらの気品を「育ちよりも自然が示す高貴な気質」“the affection of noble- / ness which nature shows above her breeding” (VII.37-38) と言う。生まれと育ちの対概念がここでも見られる。

次の nature を見てみよう。滞在して9ヶ月が経ち、Bohemia の王 Polixenes は故国が恋しくなり、暇乞いをする。Leontes は Polixenes を引き止めようと説得するが果たせず、妻 Hermione に頼む。Hermione の説得に Polixenes は承諾し、そのために突然 Leontes は2人の仲を疑い、嫉妬する。怪訝な顔の夫を見た Hermione は大変悩んでいらっしやるようですが、何かお気にさわることでもありましてと問いかける。それに対して Leontes は嫉妬の念を押し殺して、次のように言う。

No, in good earnest.

How sometimes nature will betray its folly,  
Its tenderness, and make itself a pastime  
To harder bosoms!

(I.ii.150-153)

いや、なんでもない。時に人間の情は  
その愚かさ、弱さを表に出してしまい、  
気の強い人の物笑いになることか。

この nature を Schmidt は②native sensation, innate and involuntary affection of the heart and mind:の定義の項に含めている。natural feelings の意味である。

次の nature は性格、ある性格の人の意味で用いられている。Polixenes と Hermione に対する邪推が確信となった Leontes は廷臣の1人 Camillo に、Hermione の密通が皆に知れわたっているのではないかと言う。それに対する Camillo の否定の言葉に、Leontes は「鋭敏な者」“the finer natures” (I.ii.226) 以外には気付かれていないのかと己の考えに固執する。

Hermione が押し込められた牢で子供を産んだので、付け人の Paulina はその子を引き取りに行く。牢番が王の許可がないとして、拒否するとき、Paulina は牢番に、

This child was prisoner to the womb, and is  
By law and process of great nature, thence  
Free'd and enfranchis'd;

(II.ii.59-61)

このお子は胎内に囚われておいででしたが、  
大自然の法と手続きによってそこから解放され、  
自由にられました。

と言って安心させる。great nature の law によって生まれた子であると Paulina の言葉に牢番も納得するのである。Perdita はこのように nature と関係の深い人物であることが早くから示唆されているのである。

Paulina から Hermione の死を知らされて、Leontes はすっかり後悔の念に

打たれ、

So long as nature  
Will bear up with this exercise, so long  
I daily vow to use it.

(III.ii.240-242)

身体がこの行に耐える限り、  
毎日誓ってその勤めを果たす。

と言って、命のある限り、Hermione と Mamillius とが葬られている礼拝堂を訪れると誓う。この nature は肉体と精神を有する身体の意味で用いられている。Schmidt は③the physical and moral constitution of man: という定義に含めている。

natural の用法を見てみよう。Leontes は Antigonus や側近から Hermione の不貞の証言を得ようとするが、側近たちはこぞって Leontes にそれは邪推ですと忠言すると、Leontes は更に頑なになり、側近は信用できないと言い、お前たちの助言を求めているのは王としての特権によるのではなく、このことを伝えるのは「わしの生来の善意」“our natural goodness” (II.i.165) からだと言う。Schmidt は bestowed by nature, not acquired. の定義を与えている。ますます Leontes は暴君の様相を強めるのである。

Hermione の彫像を見るために Paulina の部屋を訪ねた Leontes はカーテンが引かれ、像を見た瞬間、「生きているままの姿だ」“Her natural posture!” (VIII.23) と驚きの声を上げる。前の natural と同じ意味で用いられている。

Autolycus は助けを求める Shepherd をいい鴨にできると考え、脇台詞で「俺は生まれつき正直者ではないが、時々偶然正直者になることがあるのだ」“Though I am not naturally honest, I am so / sometimes by chance:” (IV.iv.712-13) と言う。naturally は by nature の意味であり、ここでは nature と chance との対置が見られる。

Leontes の理不尽な言動に、Paulina は「この上なく恥ずべき、人の道にもとる主人」“A most unworthy and unnatural lord” (II.iii.112) であっても、これ以上の理不尽なことはやれまいと言う。Leontes は最も unnatural な人間、つ

まり自然の条理に反する人間なのである。

#### IV

##### 『あらし』 *The Tempest*

この作品では nature が8回、natural が4回、unnatural が1回使用されている。まず Schmidt の定義①の nature から見ていく。

Gonzalo は皆を元気付けるため、理想郷について語り、nature について次のように言う。

All things in common Nature should produce  
Without sweat or endeavour: treason, felony,  
Sword, pike, knife, gun, or need of any engine,  
Would I not have; but Nature should bring forth,  
Of it own kind, all foison, all abundance,  
To feed my innocent people.

(II.i.155-160)

共用の品物は自然が汗水流して働かなくても  
生み出してくれます。反逆、重罪、剣、槍、  
短刀、鉄砲、いかなる武器も必要がありません。  
自然がひとりでに罪のない人々を養う五穀を  
豊かに実らせてくれます。

nature は両方とも造化の自然の意味で使用されている。Kindley は without ... endeavour について、Genesis 3.19 gives as one of the consequences of the Fall: ‘in the sweat of thy face shalt thou eat bread’, and this was taken to imply that until they fell, Adam and Eve did not need to toil.と述べ、更に158-159 nature ... abundance について、This amplifies 155-156, suggesting that food will be provided by what grows naturally, without cultivation.と注を付している<sup>19)</sup>。

Prospero は Miranda に自分が政務を蔑ろにし、魔術の研究に耽っていて、実弟 Antonio に大公の位を奪われた経緯を語る際、「私の邪な弟に邪悪な性質が目覚めたのだ」 “...in my false brother / Awak’d an evil nature;” (I.ii.92-93)

という言葉の口にする。この *nature* は性格を意味する。

Miranda は Caliban にいくら教育を施しても、「善良な性格の人たち」“*good natures*” (I.ii.361) が我慢できないものをもっていると言う。*nature* はある性格の人の意味である。

Ferdinand に厳しく当たるので胸を痛める Miranda は「父は言葉からの見かけよりやさしい性質の人です」“*My father’s of a better nature, sir, / Than he appears by speech:*” (I.ii.499-500) と Ferdinand に慰めの声をかける。この *nature* は性格、性質の意味に用いられている。

Stephano たちと己の命を狙う陰謀を企む Caliban に失望して、Prospero は

A devil, a born devil, on whose nature  
Nurture can never stick; on whom my pains,  
Humanely taken, all, all lost, quite lost;  
(IV.i.188-190)

悪魔だ、生まれながらの悪魔だ、  
その性質ではどんなに躰けをしても身につかない。  
情けをかけたわしの苦労も全く、全く無駄になった。

と言う。*nature/Nurture* について各編者が詳しい注を施している。Arden (third series) は Prospero’s emphasis here is probably on moral nature, to which Caliban (in Prospero’s and Miranda’s eyes, at least) appears wholly resistant. と注を付している<sup>20)</sup>。また *OED* はこの箇所を初出として引用している。

これまでの敵に対して、復讐よりも慈悲をもって接しようと心に決め、「肉親である、お前、野心を抱き、憐れみも人情も捨てたわしの弟」“*Flesh and blood, / You, brother mine, that entertain’d ambition, / Excell’d remorse and nature;*” (Vi.74-76) である Antonio に「お前を許す。お前は人の道にもとるものであるけれども」“*I do forgive thee, / Unnatural though thou art.*” (Vi.78-79) と言って許すのである。*nature* については、Lindley は *natural feelings, here especially brotherly feelings.* と注を施している<sup>21)</sup>。*unnatural* は *against nature* の意味であり、喜劇では *unnatural* だった Oliver はもとの *good nature* を取りもどす。*The Tempest* が暗い作品という印象を与えるのは、Antonio の存在で

ある。

次の natural は名詞である。Stephano を神と崇める Caliban を見て、Trinculo は「だんな様だと。怪物がこんな馬鹿だとはなあ」“Lord, quoth he? That a monster should be such/a natural!” (III.ii.30-31)と呆れて言う。この natural について、Lindley は simpleton. A paradox, since a monster, by definition, is ‘unnatural’. The distinction between a ‘natural fool’ and the ‘fool artificial’, who consciously adopted the function of jester, is a significant one in the period — and important to the trading of insults between Caliban and Trinculo in this scene. と注を施している<sup>22)</sup>。

和解が成立し、喜んでいるところに水夫たちがやってくるのを見て、Alonzo は「これは尋常な出来事ではない」“These are not natural events;” (Vi.226)と驚く。更に水夫からこれまでの経緯を聞くと、Alonzo は「これには自然の条理を超えるものがある」“And there is in this business more than nature / Was ever conduct of:” (Vi.243-244)と云う。この natural を Schmidt は according to the ordinary course of things, not supernatural.の意味に解している。

初めて Ferdinand を見て、Miranda は「あの人は神のような方と申します。この世の人でこのような高貴な方を見たことはありません」“I might call him / A thing divine; for nothing natural / I ever saw so noble.” (I.ii.421-422)と云う。この natural について、Orgel は as opposed to the artificial creations of, e.g., Prospero’s masque. Kermode glosses ‘in the realm of nature, as opposed the realm of spirit’, but the spirits of the play are spirits of nature.という注を施している<sup>23)</sup>。

Prospero が引き起こした嵐に遭遇した人たちが驚愕し、自分たちの言葉が「普通の言葉」“natural breath” (Vi.157)と思わないようだと Prospero は言うのである。この natural は natural events の natural と同じ用法である。

Bush は nature の視点から述べている。ロマンス劇では、人と世界との出会いには危険があるが、失われた original goodness を回復させる治癒力がより確かになっている。goodness of nature が確信と驚異の念で語られ、nature は史劇や喜劇と同じように、女神であり、divine Nature, noble Nature, Great



Nature, wise Nature, good goddess Nature, great creating Nature である。Gonzalo の共和国は original naturalness を憧憬する社会の夢である。Marina と Perdita と Miranda は *As You Like It* の Orlando と同じように natural nobility を有する。Goddess Nature の子供たちは親たちの罪を持たず、古い世代の犯した傷を癒す。また natural fact と human art との対比が論じられるが、すぐれているのは nature の方である。art を褒めるとき、それを natural という。nature と art とは美と驚異を造り出すとき、双方は gentle rivals であるが、natural things の奇跡には art は太刀打ちできない。art は折れ、final touch を表現できない。Romano には eternity が欠け、Imogen の chimney-cutter は動きと息を創造できない。art そのものの元が nature である<sup>24)</sup>。

---

<sup>1)</sup> F. D. Hoeniger, ed., *Pericles*, The Arden Shakespeare, Methuen & Co. Ltd., 1963, note.

<sup>2)</sup> Suzanne Gossett, ed., *Pericles*, The Arden Shakespeare, (third series), Thomas Learning, 2004, note.

<sup>3)</sup> Suzanne Gossett, *ibid.*, note.

<sup>4)</sup> F. D. Hoeniger, *op. cit.*, note.

<sup>5)</sup> Roger Warren, ed., *Pericles*, The Oxford Shakespeare, Oxford University Press, 2003, note.

<sup>6)</sup> Suzanne Gossett, *op. cit.*, note.

<sup>7)</sup> Roger Warren, *op. cit.*, note.

<sup>8)</sup> Roger Warren, ed., *Cymbeline*, The Oxford Shakespeare, Oxford University Press, 1998, note.

<sup>9)</sup> Roger Warren, *ibid.*, note.

<sup>10)</sup> Roger Warren, *ibid.*, note.

<sup>11)</sup> Roger Warren, *ibid.*, note.

<sup>12)</sup> Roger Warren, *ibid.*, note.

<sup>13)</sup> Roger Warren, *ibid.*, note.

<sup>14)</sup> Roger Warren, *ibid.*, note.

<sup>15)</sup> Roger Warren, *ibid.*, note.

<sup>16)</sup> J. H. P. Pafford, ed., *The Winter's Tale*, The Arden Shakespeare, Methuen & Co. Ltd., 1965, note.

<sup>17)</sup> J. H. P. Pafford, *ibid.*, note.

<sup>18)</sup> J. H. P. Pafford, *ibid.*, note.

<sup>19)</sup> David Lindley, ed., *The Tempest*, The Cambridge Shakespeare, Cambridge University

第一部 各作品におけるnatureの意味

Press, 2002, note.

<sup>20)</sup> Virginia Mason Vaughan and Alden T. Vaughan, ed., *The Tempest*, The Arden Shakespeare (third series), Thomas Nelson and Sons Ltd., 1999, note.

<sup>21)</sup> David Lindley, *op.cit.*, note.

<sup>22)</sup> David Lindley, *ibid.*, note.

<sup>23)</sup> Stephen Orgel, ed., *The Tempst*, The Oxford University Press, 1987, note.

<sup>24)</sup> Geoffrey Bush, *Shakespeare and The Natural Condition*, Harvard U. P., 1956, pp.129-132.

## 第七章 詩

### I

『ヴィーナスとアドーニス』 *Venus and Adonis*

詩においては、造化の自然を意味する *nature* の使用が多い。この作品においても *nature* は7回用いられていて、すべて造化の自然の意味で使用されている。

Nature that made thee with herself at strife,  
Saith the world hath ending with thy life.  
自らと争ってあなたを生み出した造化の自然は  
この世はあなたの命とともに終わると言う。

(11-12)

この *nature* は造化の自然の意味である。11 with...strife に関して Roe は Nature as artist was a standard Renaissance idea (just as in WT 4.4.86-97, which speaks of 'great creating nature'); as such she has tried to outdo her own best efforts in fashioning Adonis. と説明している<sup>1)</sup>。ここでも art-nature topos が見られる。

His art with nature's workmanship at strife,  
画家の芸術が自然の創造物と競うときのように。

(291)

Roe はその Introduction において Sidney's belief in the power of art over nature, a dominant credo of the period, finds itself repeatedly vindicated. と述べ<sup>2)</sup>、上記の箇所を引用している。ここには art と *nature* の対照させる用い方が見られる。

Till forging Nature be condemned of treason,  
ついには偽造する造化の自然は反逆の罪を被らされるのだ。

(729)

Burrow は forging...treason について Nature is presented as having stolen divinely owned moulds and as having usurped a divine prerogative to coin money

in order to forge Adonis.と注を付している<sup>3)</sup>。

To cross the curious workmanship of nature,  
造化の自然のこの精妙な作品。

(734)

Surfeits, impostumes, grief, and damned despair  
Swear Nature's death, for framing thee so fair.  
過食の病い、腫れ物、悲しみと憎むべき絶望とが、  
造化の自然を死なせることを誓う、  
こんなに美しいあなたを作ったことのために。

(743-744)

Now nature cares not for thy mortal vigour,  
Since her best work is ruined with thy rigour.

今や自然のこよなく麗しい作品をおまえの過酷さで滅ぼされたか  
らには、  
造化の自然はもはやおまえの破壊力を恐れはしないだろう。

(953-954)

Prince は mortal vigour について Nature no longer cares how destructive Death may be.と注を付している<sup>4)</sup>。ここには nature と death の対置が見られる。

## II

### 『ルークリースの凌辱』 *The Rape of Lucrece*

この作品では nature は3回引用されていて、すべてが広い意味で造化の自然を表している。

For marks descried in men's nativity  
Are nature's faults, not their own infamy.  
なぜなら、出生のときからある染みは  
造化の自然の過ちであって、その人の恥ではない。

(538-539)

nature は造化の自然の意味である。

The prey wherein by nature they delight:

その者たちが天性好む餌食

(697)

この nature は「造化の自然に授けられた」という意味と考えるとよからう。by nature は成句ととる方がよいかもしれない。

In scorn of nature, art gave lifeless life:

芸術が造化の自然を嘲り、

命なき者に命をあたえていた。

(1374)

この nature は造化の自然の意味であり、ここでは nature と art と対概念で用いられている。Roe は For the art-nature *topos*, see *Ven.* 289-94n. The capacity of visual representation to render details lifelike appears to have been its greatest appeal for Shakespeare. と注を施している<sup>5)</sup>。1377の the painter's strife について Burrow は *Strife* is often used to describe the emulous competition between art and nature, as in *Venus* l. 291. と注を付している<sup>6)</sup>。

### III

#### 『ソネット集』 *The Sonnets*

Sonnets では nature は nature が thou や she 等に言い換えられているが、12回使用されている。ほとんどが自然の造化、自然の女神の意味で使用されている。

#### 4

Nature's bequest gives nothing, but doth lend,

And being frank, she lends to those are free:

自然の女神は遺産を与えるのではなく、貸し付けるのだ。

彼女は気前がいいから、気前のいい人たちに貸し与える。

Evans は Nature's ... lend について Nature gives nothing without expecting a return ('interest', 'use') on her loan (in a sense, therefore she acts like a usurer). と述べている<sup>7)</sup>。

Then how, when nature calls thee to be gone,

What acceptable audit canst thou leave?

自然の女神があなたにこの世を去るように命じたとき、  
どのようにして、喜んで受け入れられるどのような清算を残して  
いけるのか？

11

Let those whom nature hath not made for store,

Harsh, featureless and rude, barrenly perish;

造化の自然が繁殖用に創ったのではない者たち、

おぞましくて、醜くて、粗野なやつらは、

子なしのまま死なせるがいい。

Evans は for store について、as a source of ‘increase’. Nature thus expects ‘increase’ only from those whom she has favoured. と注を施している<sup>8)</sup>。

また Look whom she best endowed she gave the more,... について Burrow は Nature gives more (including more offspring) to those who are already well endowed with qualities. と注を付している<sup>9)</sup>。

18

And every fair from fair sometime declines,

By chance, or nature’s changing course, untrimmed:

美しいものはすべて、いつかは美を失って朽ちる。

偶然や自然の変移が、美しい飾りをはぎとってしまう。

Evans は nature’s changing course に関して natural decay (inherent in all things). と注を施している<sup>10)</sup>。また Duncan-Jones は implying that the youth transcends the physiological variability of female love-objects. と注を付している<sup>11)</sup>。ここでは nature は chance との対照で用いられている。

20

A woman’s face with nature’s own hand painted,

きみの顔は自然みずからの手で描き上げた女の顔だ。

Evans は A woman...painted について、Nature, not art (as with women), is

responsible for his complexion; his perfection is natural, women have to 'paint' even to approach it.と注しているように<sup>12)</sup>、nature 対 art の関係で用いられている。

Duncan-Jones は with ... hand について created by nature herself; と注を付している<sup>13)</sup>。

Till nature as she wrought thee fell a-doting,

自然の女神が、きみを創っているうちに恋におちて、

Evans は Nature ... a-doting について Nature as she formed you fell in love with you (being a woman, she became emotionally involved and therefore had to change you to a man).と説明を施している<sup>14)</sup>。

## 60

Time doth transfix the flourish set on youth

And delves the parallels in beauty's brow,

Feeds on the rarities of nature's truth,...

時が青春に与えた美を取り去り、

美の額に皺という溝を掘り、

造化の自然の完璧さが生み出した稀有のものを蝕む。

Burrow は Feeds on ... truth について feeds on the delicacies produced by the constant perfection of nature.と注を付し<sup>15)</sup>、Evans は rarities of nature's truth について choicest creatures produced by the perfection (truth) of nature.と注を付し、nature's truth については nature's essential integrity; an integrity which is natural, as in 54.2.と注を付している<sup>16)</sup>。

## 67

Why should he live, now nature bankrupt is,

Beggared of blood to blush through lively veins?

いま造化の自然は破産して、生命の血管をあかあかと

流れる血もかれはてたのに、なぜ、彼は生きねばならないのか。

Duncan-Jones は bankrupt について Nature is *bankrupt* on the sense that all her wealth of human beauty has, supposedly, been bestowed on the fair youth,

leaving none to bestow on other human progeny.と注を施している<sup>17)</sup>。

68

And him as for a map doth nature store  
To show false art what beauty was of yore.

造化の自然は、いわば、縮図として彼を生かしている、  
偽りの技巧に昔の美がどうであったかを示すためだ。

ここでも nature 対 art の問題を持ち出している。

84

Let him but copy what in you is writ,  
Not making worse what nature made so clear,  
詩人はきみのなかにかかれたものを写せばいい。

造化の自然がかくも明らかにしたものを悪くしないようにして。

各編者は Let ... writ について、Sidney, AS, 3.12-14: 'in Stella's face I read / What love and beauty be; then all my deed / But copying is, what in her nature writes'. を引用している。

94

They rightly do inherit heaven's graces,  
And husband nature's riches from expense;  
こういう人たちは、まことに、天の恩寵にめぐまれて、  
自然の富を浪費せずにつつましく用いるものである。

Evans は nature's riches について (1) abundant endowments given (them) by nature ('nature' thus becoming a surrogate for 'heaven' in line 5); (2) wealth of created nature (like 'They', also the inheritor of 'heaven's graces').と注を施している<sup>18)</sup>。また Burrow は husband ... expense について prevent the squandering of natural beauties. と注を付している<sup>19)</sup>。

109

..., though in my nature reign'd  
All frailties that besiege all kinds of blood, ...  
あらゆる気性の人間を包圍するあらゆる欠点



私の生来の気質に君臨しようとする。

Evans は nature について (1) inherent character, disposition; (2) natural qualities. と注を付している<sup>20)</sup>。

## 111

And almost thence my nature is subdued  
To what it works in, like the dyer's hand;  
おかげで私の本性も染物師の手のように、  
おのが仕事場の色にそまることとなったのだ。

この nature も性格、本性の意味で用いられている。

## 122

Or at the least, so long as brain and heart  
Have faculty by nature to subsist;  
ともかく、頭と心が自然から授かった力を働かせて  
生命をもち続けるかぎりは。

## 126

If nature, sovereign mistress over wrack,  
破壊を統御する女王、自然の女神は

## 127

For since each hand hath put on nature's power,  
Fairing the foul with art's false borrow'd face,  
だれもが造化の自然の力を我が物にして  
人工から借りた偽の顔で醜を美に変えてから、

Burrow は put on nature's power について usurped an office which is properly nature's (through) cosmetics. と注釈を加えている<sup>21)</sup>。

<sup>1)</sup> John Roe, ed., *The Poems*, The New Cambridge Shakespeare, Cambridge University Press, 1992, note.

<sup>2)</sup> John Roe, *ibid.*, note.

<sup>3)</sup> Colin Burrow, ed., *The Complete Sonnets & Poems*, The Oxford Shakespeare, Oxford

University Press, 2002, note.

- 4) F. T. Prince, ed., *The Poems*, The Arden Shakespeare, Methuen & Co. Ltd., 1961, note.
- 5) John Roe, ed., *The Poems*, The New Cambridge Shakespeare, Cambridge University Press, 1992, note.
- 6) Colin Burrow, ed., *op. cit.*, note.
- 7) Blakemore Evans, ed., *The Sonnets*, The New Cambridge Shakespeare, Cambridge University Press, 1996, commentary.
- 8) Blakemore Evans, *ibid.*, commentary.
- 9) Colin Burrow, ed., *op. cit.*, note.
- 10) Blakemore Evans, *op. cit.*, commentary.
- 11) Katherine Duncan-Jones, ed., *Shakespeare's Sonnets*, The Arden Shakespeare (third series), Thomas Nelson and Sons Co. Ltd., 1997, note.
- 12) Blakemore Evans, *op. cit.*, commentary.
- 13) Katherine Duncan-Jones, *op. cit.*, note.
- 14) Blakemore Evans, *op. cit.*, commentary.
- 15) Colin Burrow, *op. cit.*, note.
- 16) Blakemore Evans, *op. cit.*, commentary.
- 17) Katherine Duncan-Jones, *op. cit.*, note.
- 18) Blakemore Evans, *op. cit.*, commentary.
- 19) Colin Burrow, *op. cit.*, note.
- 20) Blakemore Evans, *op. cit.*, commentary.
- 21) Colin Burrow, *op. cit.*, note.